修士論文

郭店楚墓竹簡『五行』の新研究

岩手大学大学院総合科学研究科総合文化学専攻
地域文化リノベーションプログラム
佐々木　天珠

二〇二四年三月

目次

凡例

第壱章　序論　……一

第弐章　郭店楚墓竹簡『五行』訳注篇　……六

第参章　漢字の隷定における問題点　……六十七

第一節　楚系文字の淘汰（文字統一と秦系文字の出現）

一　察（（楚系文字）・察（秦系文字））

二　（（楚系文字）・就（秦系文字））

三　聞（（楚系文字）・聞（秦系文字））

四　（（楚系文字）・肆（秦系文字））

五　胥

第二節　字の隷定

一　（見）と（視）

二　（聖）と（聲）

第肆章　思想史上における問題点　……七十七

第一節　「（弁）」に関わる解釈

第二節　第二十章の解釈について
第三節　郭店楚墓竹簡『五行』と諸子百家

第伍章　結語

資料篇
参考文献
謝辞

……九十

凡例

一、使用する漢字は基本的に常用漢字を用いる。

二、本稿第弐章訳注篇は原文、訓読、口語訳、注から成る。

三、底本は荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社・一九九八年）であるが、場合によっては武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戰國簡冊合集（一）郭店楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一一年）を基に改変を加えている。

四、第弐章訳注篇では郭店楚墓竹簡『五行』を章分けしているが、これは池田知久『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年）に基づいている。

五、本稿第弐章の作成にあたって関係論著目録は次の通りである。最初に第Ⅱ章における略称を記した上で著者名等、書名、出版社、出版年度を記す。なお、参考文献一覧は最後に一括掲載する。

□郭店『五行』関連

1. 郭店簡：荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社・一九九八年）
2. 池田：池田知久『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年）
3. 李零：李零『郭店楚簡校讀記（増訂本）』（北京大學出版社、二〇〇二年）
4. 劉釗：劉釗『郭店楚簡校釋』（福建人民出版社、二〇〇五年）
5. 陳偉等：武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戰國簡冊合集（一）郭店楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一一年）

□馬王堆『五行』関連

6. 馬王堆『五行』池田：池田知久『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』（汲古書院、一九九三年）
7. 馬王堆『五行』裘錫圭：裘錫圭主編・湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心編『長沙馬王堆漢墓簡帛集成　肆』（中華書局、二〇一四年）

□最新の漢字研究

8. 『古漢字発展論』：黄徳寛 等『古漢字発展論』（中華書局、二〇一四年）
　　藪敏裕 監訳『古漢字発展論』（発行：樹立社、発売：ゆまに書房、二〇二三年）
9. 禤：禤健聡『戦国楚系簡帛用字習慣研究』（科学出版社、二〇一七年）
10. 白於藍：白於藍『簡帛古書通仮字大系』（福建人民出版社、二〇一七年）

六、「秦系文字」とは春秋戦国期において秦の地域で使用されていた文字を指し、「秦文字」とは統一後の秦で使われていた文字を指す。

第壱章　序論

第一節　研究契機

筆者は台湾留学中に、台湾人やクラスメイトのベトナム人などとの交流を経て、台湾、東南アジアを中心に五行の思想が広まっていることを知り、興味をもった。調べていくうちに、すべての物質は木・火・土・金・水の五つの元素から構成され、この五つの元素が互いに影響を与え合うことで変化し、循環していくと考える五行思想とは別に、『荀子』非十二子篇において批判された「五行」があることがわかった。

略法先王、而不知其統、猶然而材劇志大、聞見雑博、案往舊造説、謂之**五行**、甚僻違而無類、幽隠而無説、閉約而無解。案飾其辭而祇敬之、曰此真先君子之言也。子思唱之、孟軻和之。世俗之溝猶瞀儒、嚾嚾然不知其所非也、遂受而傳之、以為仲尼子弓（本によっては「游」に作る）為茲厚於後世。是則子思孟軻之罪也。

この『荀子』非十二子篇に見える「五行」がそれである。この「五行」については従来からその内容について諸説があり、例えば『中庸』の君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友の「五達道」や『孟子』の父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の「五倫」などが想定されていた。しかし、馬王堆漢墓帛書『五行』（以下、馬王堆『五行』と略称）の登場により状況は大きく転換した。『馬王堆漢墓帛書』とは、一九七二年に中国湖南省長沙市芙蓉区馬王堆漢墓三号墓で出土した帛書である。馬王堆『五行』中には「集大成」や「金声玉振」などの『孟子』特有の語が見え、『荀子』が批判する「五行」ではないかと話題になってきた。その後、一九九三年に出土した『郭店楚墓竹簡』には、冒頭に「五行」と題された馬王堆『五行』よりもさらに古い『五行』が含まれていた。馬王堆『五行』には「経」と「説」があり、「経」の内容を「説」が解説する形体をとるため、分量は馬王堆『五行』の方が多い。馬王堆『五行』の「経」の部分と郭店楚墓竹簡『五行』（以下、郭店『五行』と略称）は、内容としては概ね対応している。このようなことから、現在ではこの『荀子』非十二子篇に見える「五行」は、馬王堆『五行』の祖本ないし郭店『五行』である可能性が高いと思われている。

本論文では、『五行』のより古い戦国期の姿を残している郭店『五行』を検討する。先行研究としては、池田知久、李零、劉釗、陳偉等の諸氏を参考とし、原文を厳密に解釈し従来の説で疑問が残る点について、近年の出土資料の研究の進展の成果を取り込みつつ、新説を出した部分もある。

第二節　研究目的

郭店『五行』を厳密に解釈し、その思想史的意義を究明することを本論文の目的とする。例えば、郭店『五行』第三十二号簡に次のようにある。

顔色仚（容）仪（貌）恩（溫）弁也。以亓（其）宇（中）心與人交、兌（悅）也。

この文章の「弁」については、従来「變」の字とされ、さらに通仮[1]して「戀」と同じとされ、「恋い慕う」意とされてきたが、「弁」はその字の意味として「楽」と解釈できることが明らかになってきた。郭店『五行』の解釈に疑問が残るすべての箇所についてこのような検討を行い、郭店『五行』を現在の水準において可能な限り厳密に解釈することを目的としている。このような方法により、戦国期における『五行』の意味を当時の実態に即して解釈し、当時の思想史的意義を明らかにすることを目的としている。

第三節　『郭店楚墓竹簡』『五行』について

『郭店楚墓竹簡』は、『郭店楚簡』『郭店簡』とも略称される。一九九三年十月に中国の湖北省荊門市沙洋区紀山鎮郭店村の郭店一号楚墓

---

[1]「通仮」とは、音（字音）が同じ漢字を、意味（字義）も同じとして通用させることである。

で出土した竹簡群で、現在は湖北省博物館に所蔵されている。考証によると、戦国時代の中期または末期の作とされている。

『郭店楚墓竹簡』の竹簡は全部で八〇四枚ある。そのうち文字が記された竹簡は七三〇枚、字数は一三〇〇〇字あまりである。次に記す通り、十八篇から成る。

『老子』甲、乙、丙
『太一生水』
『緇衣』
『魯穆公問子思』
『窮達以時』
『五行』
『唐虞之道』
『忠信之道』
『成之聞之』
『尊徳義』
『性自命出』
『六徳』
『語叢』一、二、三、四

本論文で扱う『五行』についてみていきたい。冒頭でも挙げたが、『荀子』非十二子篇に次のようにある。

略法先王、而不知其統、猶然而材劇志大、聞見雑博、案往舊造説、謂之**五行**、甚僻違而無類、幽隠而無説、閉約而無解。案飾其辭而祇敬之、曰此真先君子之言也。子思唱之、孟軻和之。世俗之溝猶瞀儒、嚾嚾然不知其所非也、遂受而傳之、以為仲尼子弓為茲厚於後世。是則子思孟軻之罪也。

先秦期の文献では、「五行」に言及する数少ない例である。『荀子』の批判する「五行」は明らかに五行思想の五行ではないとされ、長らく逸書とされてきたが、龐樸[2]は馬王堆『五行』をこの逸書つまり思孟子学派の書と主張した。その後、前述したとおり、さらに古い形を残した『郭店楚墓竹簡』中の『五行』が一九九三年に発掘され、『五行』の研究は最高潮を迎えることとなる。

ただこの三十年間で出土資料や竹簡に関する研究はさらに加速的に進展しているため、現在においてさらに竹簡について再検討することは文字学的にも思想史学的にも意義があると考える。具体的には楚系文字の特徴と、郭店『五行』の思想史的特徴または関係性ついて言及したい。

第四節　研究方法

本稿では、まず郭店『五行』の原文に見える漢字を隷定[3]しながら、精読して注釈をつけた。それを基に本稿第弐章の訳注篇を作成し、第参章ではその中でも特に問題になる隷定、仮借字等の問題を、第肆章では全体の意味との関連について、それぞれ検討を行った。

漢字の検討方法は、「字形」「意味」「音」の三方向からアプローチした。これは漢字が「形」「音」「義」の三つの要素から成るためである。郭店『五行』の漢字の隷定と意味の確定については、まず、最初の発掘報告である荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社・一九九八年）により、当時の基本的な漢字の隷定について確認した。次に、池田知久『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年）の譯注篇の訓読、口語訳を参考に本文の意味を検討した。また池田による郭店『五行』の注釈内容から漢字の隷定についての問題点がどこにあるかを確認した。さらに、李零『郭店楚簡校讀記（増訂本）』（北京大學出版社、二〇〇二年）で郭店『五行』の漢字の隷定や内容について池田と異

---

[2] 龐樸「馬王堆帛書解開了思孟五行説古謎」（『文物』、一九七七年、第十期）（未見）

[3] 「隷定」とは、本来は古漢字をその字形に基づいて隷書にすることを意味した。現在では楷書にすることも隷定と言う。本稿でも楚簡の文字を楷書にすることを隷定と呼ぶこととする。その隷定した字形がその意味の本字に対して異体字のこともあるし、または仮借字である場合もある。

なる点について確認、劉釗『郭店楚簡校釋』（福建人民出版社、二〇〇五年）では、作者の劉釗は漢字の専門家であり、隷定について池田・李零とは違う視点を持っているため、参考にした。劉釗から裨益される点が多かった。また、武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戰國簡冊合集（一）郭店楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一一年）は、荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』に対し多くの研究者の意見を盛り込み改良したものであり、多様な学者の先進的な意見を参考にすることができた。加えて、竹簡を写真で記録した図版が、荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』よりも明瞭なものになっており、筆跡等について詳細に見ることができた。さらに、荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』では確認できなかった細かい残簡や簡の裏側に残されていた関連する字形をも確認することができた。

また、漢字の「（字）形」からのアプローチでは、禤健聡『戦国楚系簡帛用字習慣研究』（科学出版社、二〇一七年）を多く使用した。禤は楚系文字の字語関係[4]の研究において優れた功績を残しており、この資料では楚系文字で問題とされやすい字形について「意味」から検索することができ、多くの楚系文字の例を見ながら、楚系文字の字形の特徴について知ることができた。漢字の「音」からのアプローチでは、白於藍『簡帛古書通仮字大系』（福建人民出版社、二〇一七年）を主に使用した。白於藍は上古音[5]で通仮できる漢字について、実際の先秦期の出土例に挙げながら網羅的に挙げている。「意味」からある漢字とある漢字が通仮するであろうと予測した際に、「音」からも通仮できるかどうかを確認するため使用した。

---

[4] 漢字の字形とその表す意味と音の関係。ある漢字がその字本来の意味で使用されているのか、仮借的な用法で使用されているのかについて検討をも含む。たとえば『論語』冒頭の「學而時習之、不亦說乎」の「說」は悦ぶ意味で使用されている。本来は「悦」の意を表す際には「兌」が使用されていたが、その後「說」字などが作られ「悦」の意を表すようになった。『論語』は編集当時の漢字の用字習慣を残していると考えられる。「悦」字の登場は楚では戦国末以降と推定されている。

[5] 「上古音」とは漢代以前にあったと推定されている上古中国語および漢字音の音韻体系のことである。

第弐章　郭店楚墓竹簡『五行』訳注篇

第弐章は、郭店楚墓竹簡『五行』（以下、郭店『五行』とする）の原文・訓読・口語訳・語注を付した訳注篇とする。【　】で括ったものは竹簡の号簡数を表す。また、原文、訓読、口語訳の中で、（　）で括ったものは隷定または通用する漢字、［　］で括ったものは送り仮名、〈　〉は「天」字や「而」字等について文脈の判断に合ったものを括っており、〔　〕で括ったものは原文にはないが、補われるべき欠字、または筆者が必要に応じて加えた説明である。竹簡上に見える「■」や「▬」はここでは省略している。詳しくは本稿資料篇に付している武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戰國簡冊合集（一）郭店楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一一年）の図版を参照されたい。

第一章

原文

五行。**㤅**（仁）型（形）於內胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內胃（謂）之行。義型（形）於內胃（謂）之悳（德）之【一】行、不型（形）於內胃（謂）之行。豊（禮）型（形）於內胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內胃（謂）之【二】〔行。智型（形）〕於內胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內胃（謂）之行。聖型（形）於內胃（謂）之悳（德）【三】之行、不型（形）於內胃（謂）之悳（德）之行。悳（德）之行五、和胃（謂）之悳（德）、四行和胃（謂）之善。善、人【四】道也。悳（德）、天道也。

訓読

五行

㤅（仁）の内に型（形）るる、之れを悳（德）の行と胃（謂）い、内に型（形）れざる、之れを行と胃（謂）う。義の内に型（形）るる、之れを悳（德）の行と胃（謂）い、内に型（形）れざる、之れを行と胃（謂）う。豊（禮）の内に型（形）るる、之れを悳（德）の行と胃（謂）い、内に型（形）れざる、之れを行と胃（謂）う。智の内に型（形）るる、之れを悳（德）の行と胃（謂）い、内に型（形）れざる、之れを行と胃（謂）う。聖の内に型（形）るる、之れを悳（德）の行と胃（謂）い、内に型（形）れざる、之れを悳（德）の行と胃（謂）

う。悳（德）の行の五つのする、之れを悳（德）と胃（謂）い、四行の和する、之れを善と胃（謂）う。善は、人道なり。悳（德）は、天道なり。

口語訳

五行

人間の内面に〔生まれつき〕形作られている仁を、徳の行いと言い、内面において形作られているのではなく〔後に努力によって獲得した〕仁を、行いと言う。人間の内面において〔生まれつき〕形作られている義を、徳の行いと言い、内面において形作られているのではなく〔後に努力によって獲得した〕義を、行いと言う。人間の内面において〔生まれつき〕形作られている禮を、徳の行いと言い、内面において形作られているのではなく〔後に努力によって獲得した〕禮を、〔行い〕と言う。人間の内面において〔〔生まれつき〕形作られている智を〕、徳の行いと言い、内面において形作られているのではなく〔後に努力によって獲得した〕智を、行いと言う。人間の内面において〔生まれつき〕形作られている聖を、徳の行いと言い、内面において形作られているのではなく〔後に努力によって獲得した〕聖を、徳の行いと言う。

これらの徳の行いの五つが調和したものを、徳と言い、四つの行いが調和したものを、善と言う。善は、人道であり、徳は、天道である。

注

（1）五行。**息**（仁）型（形）於內、胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內、胃（謂）之行。

「五行」の二文字は、郭店楚墓竹簡の本テキストに対しての篇名になっている。馬王堆『五行』には篇名は見られない。「**息**」は、「心」を構成要素とし、「身」は声符[6]。形声字で現在の「仁」と書かれる字である。『古漢字発展論』[7]によると、楚簡[8]ではこの字の他に

---

6 『説文』の「从A」は「Aを構成要素とする」と翻訳する。「Aを構成要素とする」と言った場合は、Aは「意符A」を意味する。

7 『古漢字発展論』四五七頁参照。

8 「楚簡」とは、楚地域で出土した竹簡のことで、内実としては楚系文字、秦系文字、または他の地域の文字が混入している可能性がある。楚の文字は「楚系文字」、六国期の秦の文字を「秦系文字」とする。「楚簡」の使用については、基本的に引用文献が「楚簡」と記し

「心」を構成要素とし、「千」が声符である「忎」字もある。禤[9]によると、「身」と「千」の古音は通じるため、「**㤅**」と「忎」は異体字の関係となる。「型」は「形」である。禤[10]によると、楚簡では「現れる」意の〔形〕[11]を記す際に「型」の字形が常用される。「胃」は〔謂〕の意で使用されている。『古漢字発展論』[12]によると、「謂」は「胃」からの分化字[13]であり、春秋文字から現れた。下部の「肉（月（にくづき））」旁には「月（つき）」旁と区別するために、右上に飾点が加えられている。これは戦国期に楚以外に晋や燕でも見られる。「悳」は、「心」と「直」を構成要素とする。「直」は声符も兼ねる。「徳」の初文[14]である。

（2）義型（形）於內、胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內、胃（謂）之行。

「義」は、「羊」を構成要素とし、声符は「我」。

池田[15]は「五行」の配列の順序について、馬王堆『五行』経の第一章では「仁→知→義→禮→聖」であるが、郭店『五行』第一章では、これと異なって「**㤅**→義→豊→〔智〕→聖」であると馬王堆と郭店の差異を言う。

（3）豊（禮）型（形）於內、胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內、胃（謂）之〔行〕。

ている際には尊重してそのままとしている。中国語で記されている場合も特に手は入れていない。

9 禤二六三頁参照。

10 禤三五七頁参照。

11 以後、「字（使用される漢字の字形）」と「語（意味と音）」を区別するために「語」を示す字には〔　〕を付す。自明な場合には「　」を使用することもある。以下注記しない。

12 『古漢字発展論』三六九―三七〇頁及び四一九頁参照。

13 「分化字」とは、ある一つの字形（本字）が多くの役割を持った際に区別するために新しく作られた字のこと。

14 「初文」とは、ある語の字形の最も古い形を言う。

15 池田一三二頁（2）参照。

「豊」は「禮」の初文。日本では「豊」字と「豐」字を同じ字とするが、本来は別字である。中国では『説文』[16]以来、「豊」字は「禮」の初文、「豐」字は「丰」に作り、「豊か」の意とされてきた。本来、「豊（禮）」は「玨」と「壴」を構成要素とし、「豐」は「壴」を構成要素とし、声符は「丰」。欠字である部分には、馬王堆『五行』より「行」を補った。

（4）〔智型（形）〕於內、胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內、胃（謂）之行。

欠字の二字は、郭店簡注[17]に倣い「智型」を補った。

（5）聖型（形）於內、胃（謂）之悳（德）之行、不型（形）於內、胃（謂）之悳（德）之行。

「聖」については第参章第二節一を参照。

「仁・義・禮・智」の「不型（形）於內」の「行」の部分にはすべて「悳（德）之」がない。「聖」の「不型（形）於內」の「行」については「悳（德）之」があるが、郭店簡注[18]は衍文であるとする。池田は注において「ただし、改めてよく考えてみると、郭店『五行』と馬王堆『五行』とは完全に同じテキストであるとは限らないから、衍文[19]でない可能性もあるにはある。すなわち、両者ともに「型於內」は先天的な自然、「不型於內」は後天的な人為を意味するが、「聖」に関しては、馬王堆『五行』は他の「四行」と同じように考えるのに対して、郭店『五行』は後天的な人為をも根本的には自然であると考えている、という可能性である」と言う。待考とする。

（6）悳（德）之行五和、胃（謂）之悳（德）、四行和、胃（謂）之善。善、人道也。悳（德）、天道也。

「和」は郭店『五行』の字形は「咊」である。『古漢字発展論』[20]は、「咊」は「偏旁の位置の互換により形成される異体の併用」で、

---

16 『説文』とは、後漢の許慎が著した『説文解字』のこと。

17 郭店簡一五一頁〔二〕参照。

18 郭店簡一五一頁〔三〕参照。

19 「衍文（エンブン）」とは、「衍字」とも言い、書写や印刷の際に誤って混入した必要のない文字のこと。

20 『古漢字発展論』四五八頁参照。

「偏旁位置の交代によって形成された一字多形を示している」と言う。「逌」は、郭店『五行』以下楚簡によく見られる字形で現在の「道」である。『古漢字発展論』[21]も、「道」の会意偏旁の「首」は「頁」に変えられるものもあると言う。

第二章

原文

君子亡宙（中）心之[illegible]（憂）則亡（無）宙（中）心之智。亡宙（中）心之智則亡宙（中）心【五】〔之兌（悅）〕、亡（無）宙（中）心〔之兌（悅）則不〕安、不安則不[illegible]（樂）、不[illegible]（樂）則亡（無）悳（德）。

訓読

君子宙（中）心の[illegible]（憂）い亡（無）ければ、則ち宙（中）心の智亡（無）し。宙（中）心の智亡（無）ければ、則ち宙（中）心〔の兌（悅）び〕亡（無）し。宙（中）心〔の兌（悅）び〕亡（無）ければ、〔則ち〕安から〔ず〕。安からざれば、則ち[illegible]（樂）しまず。[illegible]（樂）しまざれば、則ち悳（德）亡（無）し。

口語訳

君子は心の内面に憂いがなければ、心の内面に智はない。心の内面に智がなければ、心の内面に〔悅び〕はない。心の内面に〔悅び〕がなければ、心に安らかさは〔ない〕。安らかさがなければ、楽しみはない。楽しみがなければ、徳はない。

注

（1）君子亡宙（中）心之[illegible]（憂）、則亡（無）宙（中）心之智。

---

[21] 『古漢字発展論』四五六頁参照。

「亡」は、本義[22]は「刀の先端」の意であるが、通仮して「無」の意で使用される。「[illegible]」は「宙」で「中」である。『古漢字発展論』[23]は、この加えられた「宀」を「増繁無義偏旁」[24]と呼び、「既存の字形に文字の音義とは関係のない偏旁を加えるもの」と言う。「[illegible]（悳・悳・憂）」は、「[illegible]（悳）」と字形が近いが「悳」とする。この「悳」は「憂」である。禤[25]は、「憂」は本来「悳」の分化字であると述べている。楚系文字では〔憂〕を表す際には「悳」字が使用される。

（2）亡宙（中）心之智、則亡宙（中）心〔之兌（悅）〕。

この部分には「則」の字以外に重文符号[26]が付されている。第六号簡冒頭の欠字部分二字には「之兌」を補う。ともに郭店簡釈文とその注[27]に従う。本簡の「兌」は〔悅〕の意であるが、以降の簡も〔悅〕の意で「兌」字が使用されるため、この字形とする。禤[28]によると、楚簡では〔悅〕の意で「兌」字が多用される、という。

（3）亡（無）宙（中）心〔之兌（悅）、則不〕安。不安、則不[illegible]（樂）。不[illegible]（樂）、則亡（無）悳（德）。

---

22 「本義」とは、ある漢字の本来の意味のことである。

23 『古漢字発展論』四二二頁参照。

24 『古漢字発展論』四二三頁参照。「増繁無義偏旁とは、既存の字形に文字の音義と関係のない偏旁を加えるもの」で、「主に装飾的な機能」のみがあり、また「字形類化の作用」があると考えられる。

25 禤三九四頁参照。

26 「重文符号」とは、繰り返して読む文字に付されている記号のことである。どのように繰り返すかは場合により異なる。

27 郭店簡一四九頁参照。注：一五一頁〔五〕参照。

28 禤四〇八頁参照。

「之兌」に続く二字の欠字には「則不」を補う。この部分の重文符号についても郭店簡釈文[29]に従う。「 」は「」であり、これは『古漢字発展論』[30]によると「艸」旁の一部が省略され「屮」に変化したもので、形符（ママ）の意味が近いため交換できるとされる。禤[31]は、「」は「樂」の繁構（繁雑な構造の字）であると述べる。

第三章

原文

五行皆型（形）于内、而（時）行【六】之、胃（謂）之君〔子〕。士又（有）忎（志）於君子道胃（謂）之（志）士。

訓読

五行皆な内に型（形）われて、時に之れを行う、之れを君〔子〕と胃（謂）う。士の君子道に志すこと又（有）る、之れを （時・志）士と胃（謂）う。

口語訳

五行のすべてがその内面に〔生まれつき〕形作られており、さらに適切な時にそれらを行う人のことを、君〔子〕と言う。士の身分の者で君子道に志す人のことを、志士と言う。

注

（1）五行皆型（形）于内、而（時）行之、胃（謂）之君〔子〕。

---

29 郭店簡一四九頁参照。

30 『古漢字発展論』四〇六頁参照。

31 禤一九二頁参照。

「[illegible]」は、「之」「日」「夂」から成る。郭店簡[32]釈文が「時」とするのに従う。「君」の下の欠字には「子」を補う。馬王堆『五行』を参考に郭店簡注[33]に従う。

（2）士又（有）忠（志）於君子道胃（謂）之[illegible]（志）士。

「又」は「有」である。「有」は「又」と「肉」を構成要素とする。「[illegible]（〈之心〉[34]忠）」は「志」である。『説文』によると「心」を構成要素とし声符は「之」。現在の「志」字の上部「士」は本来「之」であり、「之」は声符だけでなく「心の之（ゆ）くところ」という意符の役割も果たしている。「[illegible]（**時**）」は「志」とする。『古漢字発展論』[35]によると、「**時**」は「詩」の異体字であり、また一字多語であると言う。一字多語とは、一つの文字が同音の多くの語を表すことができることで、後世の「通仮」に当たると言う。「**時**」字は多義で、{志}、{時}、{持}、{詩}、{侍}、{恃}、{待}などの意で使用されることが明らかにされている。ここでは馬王堆『五行』に則り{志}とする。

第四章

原文

善弗為亡（無）近、悳（德）弗【七】之（志）不城（成）、智弗思不得。思不清（精）不[illegible]（**誓**・察）、思不倀（長）不型（形）、不型（形）不安、不安不[illegible]（樂）、不[illegible]（樂）【八】亡（無）悳（德）。

訓読

---

32 郭店簡一四九頁参照。

33 郭店簡一五一〔六〕頁参照。

34 ここでは〈　〉の中の字は一字と見る。

35 『古漢字発展論』四六〇―四六一、四六五頁参照。

善は為さざれば近づくこと亡（無）く、悳（德）は之（志）ざされば城（成）らず、智は思わざれば得ず。思うこと清（精）らかならざれば （譁・察）らかならず、思うこと倀（長）からざれば型（形）われず。型（形）われざれば安からず、安からざれば𡡉（樂）しまず、𡡉（樂）しまざれば悳（德）亡（無）し。

口語訳

善は実践しなければ、それに近づくことはできず、徳は志さなければ、それを成就することはできず、智は思わなければ、獲得することはできない。

ものを思う思い方が精細でなければ、〔善や徳や智を〕察［つまび］らかにすることはできず、思い方が長く〔積み重ねられ〕なければ、〔善や徳や智〕は現れない。これらが現れなければ、〔善や徳や智によって〕安らかになることはできない。安らかになることができなければ、〔善や徳や智を身につけて〕楽しむことはできない。楽しむことができなければ、徳を実現することはできないのである。

注

（1）善弗為亡（無）近、悳（德）弗之（志）不城（成）、智弗思不得。

「之」は、本来「志」の上部「士」と同じであり「之」と「志」は通仮[36]する。白於藍[37]も「志」と「之」両字の関係を通仮と認める。「 （城）」は「成」とする。「成」は甲骨文では「戌」「口」から成るものと「戌」「丁」から成るものの二つの字形があり、季旭昇[38]は「成」を「城」の初文としている。なお、「」は「成」「壬」から成るが、『古漢字発展論』[39]は「城」において「士」と「壬」が混同されることを認めている。「」は「智」とする。金文の「智」字である「」を見ると「大」「口」「子」から成ることがわか

---

36 「通仮」とは、同音や近い音の字を借りて、別の字の「語」を表記する意として使用する。『説文』が言う本字を持つ場合のみではなく、持たない場合にも使用する。

37 白於藍六十四頁参照。

38 『説文新證』一〇〇三頁参照。

39 『古漢字発展論』四三五頁参照。

る。「」では、「大」は「矢」に訛混（取り違え）され[40]、「子」は「于」に訛変[41]されている。さらに「口」を強調する「曰」が追加されている。「思」についてはその上部の「田」の部分は元々「囟」であり、これは「腦」のこととされる。「㝵」は「得」とする。古文では「彳」を省くものもある。『説文』は「㝵」を「得」の古文とする[42]が、甲骨金文では「見」が「貝」となっている。加藤常賢も「貝」に従う字が正しいとする。[43]

（2）思不清不察、思不倀不型。

「清」は「精」の通仮字である。『古漢字発展論』[44]は戦国期には「偏旁訛変」として「水」旁と「米」旁の混同があると言う。白於藍[45]も「清」「精」は通仮するという。「 （**誶**）」は、別途考察する。第参章第一節の一を参照。「倀」は「長」とする。禤[46]は楚簡では「君長」「統率」等の意味の｛長｝を表す場合は、「人」符を増やして「倀」とすることもあると言う。

（3）不型（形）不安、不安不（樂）、不（樂）亡（無）悳（德）。

「不型不安不」には一字ずつ重文符号が付されているが、ここの部分は郭店簡釈文[47]に従う。

---

40 劉釗『古文字構形學』（福建人民出版社、二〇一一年）四十六頁参照。
41 「訛変」とは、誤った改変をおこなった結果誤字となることである。
42 『古文異體關係整理與研究』一四二頁参照。
43 加藤常賢『漢字の起源』（角川書店、一九七〇年）七四三頁参照。
44 『古漢字発展論』四三六頁参照。
45 白於藍一一三七頁参照。
46 禤四一九頁参照。
47 郭店簡一四九頁参照。

第五章

原文

不𢘓（仁）、思不能清（精）。不智、思不能倀（長）。不𢘓（仁）不智、未見君子、憂心【九】不〈丕〉能惙惙、既見君子、心不〈必〉能兌（悅）。「亦既見𨑓（止）、亦既詢（覯）𨑓（止）、我心𥁕（則）【十】〔兌（悅）〕。」此之胃（謂）〔也。不〕𢘓（仁）、思不能清。不聖、思不能𦍒（輕）。不𢘓（仁）不聖、【十一】未見君子、憂心不〈丕〉能𢡟（忞・怿・忡）𢡟（忞・怿・忡）、既見君子、心不〈必〉能降。

訓読

𢘓（仁）ならざるは、思うこと清（精）らかなる能わざればなり。智ならざるは、思うこと倀（長）きこと能わざればなり。𢘓（仁）ならず智ならず。未だ君子を見ざれば、憂心惙惙たり。既に君子を見れば、心は必ず能く兌（悅）ぶ。「亦た既に見て、亦た既に詢（覯）［みあ］えば、我が心𥁕（則）ち〔兌（悅）ぶ〕。」とは、此れの胃（謂）い〔なり。〕

𢘓（仁）なら〔ざる〕は、思うこと清らかなる能わざればなり。聖ならざることは、思うこと𦍒（輕）やかなる能わざればなり。不𢘓（仁）𢘓（仁）ならず聖ならず。未だ君子を見ざれば、憂心𢡟（忞・怿・忡）𢡟（忞・怿・忡）たり。既に君子を見れば、心は必ず能く降る。

口語訳

仁を獲得することができないのは、仁を思う思い方が精細でないからであり、智を実現することができないのは、智を思う思い方が長く〔積み重ねられてい〕ないからである。こうして、仁も智も実現することができない状態に陥ってしまう。まだ君子を見ていない時は、憂いの心から思い悩み落ち着かないが、すでに君子を見た後は、私の心は必ず悦ぶことができる。〔『詩』に〕「すでに君子にお目にかかり、また君子にお会いした後は、私の心は〔悦びに変わる〕。」と言うのは、こういう意味〔である。〕

仁を獲得することが〔できない〕のは、仁を思う思い方が精細でないからであり、聖を実現することができないのは、聖を思う思い方が軽快でないからである。こうして、仁も聖も実現することができない状態に陥ってしまう。まだ君子を見ていない時は、憂いの心から心配で穏やかではないが、すでに君子を見た後は、私の心は必ず落ち着くことができる。

注

（1）不𢘓（仁）、思不能清。不智、思不〈丕〉能倀（長）。

「𢘓」は「智」とする。この「智」字は、「矢（大）」「于（子）」「口」「曰」から成る。

（2）不𢘓（仁）不智、未見君子、憂心不〈丕〉能惙惙。

「惙」字の右下部分に重文符号が付してあるため二字に読む。単字重文である。「惙」について『説文』は「憂也、从心叕声、詩曰憂心惙惙、一曰意不定也」と言う。「心」を構成要素とし声符は「叕」。郭店『五行』の「惙」を厳格に隷定すると、池田の言う通り「𢘓」になる。「未見君子、憂心不能惙惙」は、『毛詩』召南草蟲篇の「未見君子、憂心惙惙」とは語句に一部違いが見られる。馬王堆『五行』は「詩曰」を追加し、『毛詩』の原文に忠実であるが、郭店『五行』の成立時には経の意識が希薄であったかもしれない。あるいは、『詩』からの引用ではないのかもしれない。なお、『安徽大学蔵戦国竹簡（一）』にも『毛詩』召南草蟲篇が見られるがこの部分は欠損しているため字形の確認はできない。「𢘓」字は、郭店簡釈文[48]は「不」にするが、「丕」字の可能性もある。待考とする。

（3）既見君子、心不〈必〉能兌（悅）。

「𢘓」字は、郭店簡釈文[49]は「不」字とするが、池田[50]は「必」とする。前文の解釈が不確定でありこの文の解釈に影響があるため、決定できない。「丕」字の可能性もある。「既見君子、心不能兌（悅）」の部分は「既見」を除き『毛詩』召南草蟲篇には見られない。

（4）亦既見𢘓（止）、亦既詢（覯）𢘓（止）、我心𢘓（則）〔兌（悅）〕。此之胃（謂）〔也。〕

48 郭店簡一四九頁参照。
49 郭店簡一四九頁参照。
50 池田一四〇頁（3）参照。

「𨑓」は李零、劉釗、陳偉等[51]は「之」字に隷定するが、池田、劉信芳[52]は「止」字に隷定する。池田、劉信芳に従っておく。本字は、「之」と「止」から成る。またこの部分は、合文符号はないが合文と見ることができるのかもしれない。合文とは一見一字にみえるが、その実二字から構成されているものである。たとえば『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』昭王毀室・昭王與龔之脽[53]では、第一簡において[illegible]、第二簡において[illegible]、[illegible]、[illegible]の「之」「止」から成る合文が四箇所で見られる。それぞれについて見ていく。

①「[illegible]」について

𥡴(稚)人[illegible]（𨑓＝(止之)）

「𨑓」には合文符号が付されており、「止」「之」両字に読み為す。原文は「稚人止之」となり、『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』は、「寺人阻止他」[54]と解釈する。「[illegible]」の下部の「止」は「阻止」の意、上部の「之」は前述の人物「他」を指している。

②「[illegible]」について

「君王台(始)內(入)室、君之備(服)不可**㠯**(以)進。」不[illegible]（𨑓(止)）

「𨑓」には合文符号は付されていない。「止」に読み為す。原文は「不止」となり、『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』[55]は前文との関係から主語を補い「君子不停止歩伐」と解釈する。この「[illegible]」の意は「停止」である。『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』[56]注は、この「[illegible]」を「止」の繁文であると言う。

---

51 李零七十八頁、劉釗七十五頁、陳偉等四十八頁、参照。

52 池田一三八頁・一四一（4）、陳偉等五十二頁〔22〕参照。

53 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』（上海古籍出版社、二〇〇四年）図版三十三―四十二頁参照。釈文考釈、一八一―一九〇頁参照。

54 季旭昇主編『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』（萬卷楼図書股份有限公司、二〇〇七年）五十一頁参照。

55 『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』五十一頁参照。

56 『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』一八三頁参照。

③「[illegible]」について

尓必[illegible]（𨑓（止））少〓人〓（小人、小人）

「𨑓」には合文符号は付されていない。「止」に読み為す。原文は「尓必止小人」となり、『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』[57]は「倘若你要阻止小人」と解釈する。「[illegible]」は「止める」の意になる。

④「[illegible]」について

𨑓（稚）人弗敢[illegible]（𨑓（止））

「𨑓」には合文符号は付されていない。『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』及び『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』[58]ともに「止」に読み為す。原文は「稚人弗敢止」となり、『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』[59]は「寺人聽了之後便不敢阻止他」と解釈する。しかし、この部分は①の合文符号が付されているものと同じく「[illegible]」の下部の「止」は、「阻止」の意、上部の「之」は前述の人物「他」を指している。従って「[illegible]」は合文符号が付されていないが「之止」と読み為すべきである。

このように合文符号がなくとも合文と見ることもできるものもある。また合文符号がなくとも、合文と読む例は金文以来多数ある。そのため、郭店『五行』の「亦既見𨑓、亦既詢𨑓」の「𨑓」も「之」「止」両字とみることもできる。待考とする。

「詢」は「覯」とする。白於藍[60]も両字の通仮を認めている。劉釗[61]は、「詢」「覯」の古音はどちらも見紐侯部であり、音が通じると言う。「[illegible]」は一般の字形（例：郭店『五行』第六号簡「[illegible]（則）」）とは異なるが「則」とする。第十号簡最後の「我心則」に続く第十一号

---

57 『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』五十一頁参照。

58 『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』五十頁参照。『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』一八三―一八四頁参照。

59 『《上海博物館藏戰國楚竹書（四）》讀本』五十一頁参照。

60 白於藍二五九頁参照。

61 劉釗七十五頁参照。

簡冒頭の一字は「兌（悅）」を、「此之胃」の下の欠字一字には「也」を郭店簡注[62]により、それぞれ補った。

（5）〔不〕𢘅（仁）、思不能清。不聖、思不能𦍒（輕）。不𢘅（仁）不聖。

「𦍒」は「輕」である。禤[63]は、楚簡で｛輕｝は「𦍒」字ほかで表記されるとし、「𦍒」は「羽」と声符「巠」を構成要素とし、「軽重」の｛輕｝の専用字[64]であると言う。なお、｛輕｝の意の「輕」は秦系文字の可能性が高い。ここでは「軽快」の意として用いる。

（6）未見君子、憂心不〈丕〉能𢘅（忞・怿・忡）𢘅（忞・怿・忡）、既見君子、心不〈必〉能降。

「忞」は、『毛詩』召南草蟲篇の「未見君子、憂心忡忡」の「忡」の異体字である。白於藍[65]は「終」（「夂」は「終」の古い字体）と「忡」は通仮関係であることを言う。

第六章

原文

𢘅（仁）之思也清、清【十二】則察、察則安、安則恩（溫）、恩（溫）則兌（悅）、兌（悅）則𩫖（就・戚）、𩫖（就・戚）則新（親）、新（親）則𢘅（悉・愛）、𢘅（悉・愛）則玉色、玉色則型（形）、型（形）則𢘅（仁）。【十三】智之思也𢿱（長）、𢿱（長）則得、得則不亡（忘）、不亡（忘）則明、明則見臤（賢）人、見臤（賢）人則玉色、玉色則型（形）、型（形）【十四】則智。聖之思也𦍒（輕）、𦍒（輕）則型（形）、型（形）則不亡（忘）、不亡（忘）則𦖞（聰）、𦖞（聰）則𦖞（聞）君子道、𦖞（聞）君子道則玉音、玉音則型（形）、型（形）【十五】則聖。

---

62 郭店簡一五二頁〔一三〕参照。

63 禤二五六頁参照。

64 「専用字」とは、ある語（意味）を表す際に用いられる専用の字のことである。

65 白於藍九五六頁参照。

訓読

息（仁）を之れ思うや清（精）らかなり、清（精）らかなれば則ち察らかなり、察らかなれば則ち安らかなり、安らかなれば則ち恩（溫）やかなり、恩（溫）やかなれば則ち兌（悅）び、兌（悅）べば則ち**亯**（就・戚）しみ、**亯**（就・戚）しめば則ち新（親）しみ、新（親）しめば則ち**冬**（悉・愛）し、**冬**（悉・愛）すれば則ち玉色なり、玉色なれば則ち型（形）われ、型（形）わるれば則ち**息**（仁）なり。

智を之れ思うや倀（長）し。倀（長）ければ則ち得られ、得らるれば則ち亡（忘）れず、亡（忘）れざれば則ち明らかなり、明らかなれば則ち臤（賢）人を見、臤（賢）人を見れば則ち玉色なり、玉色なれば則ち型（形）われ、型（形）わるれば則ち智なり。

聖を之れ思うや**翌**（輕）やかなり、**翌**（輕）やかなれば則ち型（形）われ、型（形）わるれば則ち亡（忘）れず、亡（忘）れざれば則ち**聆**（聰）なり、**聆**（聰）なれば則ち君子道を聳（聞）き、君子道を聳（聞）けば則ち玉音し、玉音すれば則ち型（形）われ、型（形）わるれば則ち聖なり。

口語訳

仁を思う思い方は、精細でなければならない。思い方が精細であれば、〔仁が〕察らかになり、察らかになれば、〔仁によって心が〕安らかになり、安らかになれば、温やかになり、温やかになれば、〔心に〕悅びを感ずることができ、悅びを感ずれば、〔人と〕仲よくすることができ、仲よくすれば、〔人と〕親密になることができ、親密になれば、愛することができ、愛すれば、玉のように輝くことができ、玉のように輝けば、〔仁が〕現れ、現れれば、それが仁の完成である。

智を思う思い方は、長く〔積み重ね〕なければならない。長く〔積み重ね〕れば、〔智を〕得ることができ、得ることができれば、〔智を〕忘れ去ることがなく、忘れ去ることがなければ、明らかになり、明らかになれば、賢人を見ることができ、賢人を見ることができれば、玉のように光り輝き、玉のように光り輝けば、〔智が〕現れ、現れれば、それが智の完成である。

聖を思う思い方は、軽快でなければならない。軽快でなければ、〔聖が〕見えるようになり、見えるようになれば、〔聖を〕忘れ去ることがなく、忘れ去ることがなければ、聰くなり、聰くなれば、君子道を聞くことができ、君子道を聞けば、玉のように澄んだ美しい響きを発し、玉のように澄んだ美しい響きを発すれば、〔聖が〕現れ、現れれば、それが聖の完成である。

注

（1）𢘓（仁）之思也清、清則察、察則安、安則恩（溫）、恩（溫）則兌（悅）、兌（悅）則𦎫（就・戚）、𦎫（就・戚）則新（親）、新（親）則𢍏（悉・愛）、𢍏（悉・愛）則玉色、玉色則型（形）、型（形）則𢘓（仁）。

「清」「察」「安」「恩（溫）」「兌（悅）」「𦎫（就・戚）」「新（親）」「悉（愛）」「玉色」「型（形）」の一字目にはそれぞれ重文符号があるため、郭店簡釈文[66]に従い繰り返し読む。

「恩」は「溫」である。『説文』によると、「溫」は「水」を構成要素とし声符は「盈」。𥁕[67]は『説文』「盈」の項に見える「盈」を｛溫｝を表す本字であるとする。「盈」は囚人にすら食べ物を食べさせるような思いやりの気持ち「仁」に対する形容で温かい意としている。また、「盈」をつくる「囚」について、張政烺氏は「蘊」の初文であると言う[68]。楚簡は「囚（蘊）」で｛溫｝を記すと言う。さらに、「囚（蘊）」は「心」符を足して「囚心」さらにこの字の「人」を「大」に変えた「恩」が作られ、この「囚心」「恩」は楚簡では｛溫｝の専用字であるとしている。以上から、ここでは「恩」は「溫」であるとする。

「𦎫（就・戚）」は別途考察する。第参章第一節の二を参照。「𣪊」は「新」で「親」とする。白於藍[69]も「新」「親」の通仮関係を認めている。「𢍏」は「悉・愛」とする。『説文』は、「愛」は行く様で、「夂」と声符「悉」から構成されると言う。郭店『五行』の「𢍏」字は「夂」及び「心」から構成されていると考えておく。「玉色」は馬王堆『五行』では「王色」となっている。

（2）智之思也倀（長）、倀（長）則得、得則不亡（忘）、不亡（忘）則明、明則見臤（賢）人、見臤（賢）人則玉色、玉色則型（形）、型（形）則智。

池田、李零、劉釗、陳偉等[70]は「亡」を「忘」と読み為すが、『毛詩』邶風緑衣篇に「心之憂矣、曷維其亡」とあり、そもそも「亡」に

---

66 郭店簡一四九頁参照。
67 𥁕三三三―三三四頁参照。
68 張政烺《釋囚蘊》（『古文字研究』第一二輯、（中華書局、一九八五）七三―八三頁）（未見）
69 白於藍一二九五頁参照。
70 池田一四四頁（2）、李零七十九頁、劉釗七十六頁、陳偉等四十八頁参照。

〔忘〕の意がある。「臤」は「賢」である。『説文』に「又」及び声符「臣」から構成され、古文の「賢」字を表すと言う。禤[71]は、楚簡では〔賢〕を「臤」「掔」字で記すと言う。

（3）聖之思也翌（輕）、翌（輕）則型（形）、型（形）則不亡（忘）、不亡（忘）則聆（聰）、聆（聰）則聳（聞）君子道、聳（聞）君子道則玉音、玉音則型（形）、型（形）則聖。

「[illegible]」は「聆」で〔聰〕である。『古漢字発展論』[72]に「聡」の異体として「耳」を構成要素とし、声符は「兇」の「[illegible]」字が挙げられている。禤[73]は、楚簡では〔聰〕の意で「聆」字が使用され、これは〔聰〕の専用字であると言う。「聳」については第参章第一節の三を参照。

第七章

原文

「雯（淑）人君子、亓（其）義（儀）罷（一）也」。能為罷（一）、肰（然）句（後）能為君子、𢘅（慎）亓（其）[illegible]（𤔲・蜀（獨））也。【十六】「〔瞻望弗迖（及）〕、淵（泣）涕女（如）雨」。能[illegible]（遲または遲（差））沱（池）亓（其）翌（羽）、肰（然）句（後）能至哀。君子𢘅（慎）亓（其）【十七】〔蜀（獨）也。〕

訓読

「雯（淑）人君子は、亓（其）の義（儀）罷（一）なり」。能く罷（一）を為して、肰（然）る句（後）に能く君子と為る。〔君子は〕亓（其）の[illegible]（𤔲・蜀（獨））を𢘅（慎）むなり。

---

71 禤三四九頁参照。
72 『古漢字発展論』四五七頁参照。
73 禤七十三頁参照。

「〔瞻望弗〕**及**（及）ばず、**淶**（泣）涕すること雨の女（如）し」。能く亓（其）の翌（羽）を**[illegible]**（**遍**または**遲**（差））沱（池）して、肰（然）る句（後）に能く哀しみを至［きわ］む。君子は亓（其）の〔蜀（獨）を〕**誋**（慎）む〔なり。〕

口語訳

〔『詩』に〕「淑人たる君子は、その生き方に一貫するものがある。」とある。このように、生き方に一貫するものがあってこそ、始めて君子となることができるのである。〔君子とは〕、自分の獨を大切にする者である。

〔『詩』に〕「〔遙かに眺め見ても〕その姿はもう見え〔ず〕、涙が雨のように流れる。」とある。このように、なりふり構わず羽を羽ばたかせてこそ、始めて哀しみの感情を尽くすことができるのである。君子とは、自分の〔獨〕を大切にする者〔である。〕

注

（1）**雯**（淑）人君子、亓（其）義（儀）**䎽**（一）也。

この部分は『毛詩』曹風鳲鳩篇「淑人君子、其儀一兮」の引用である。「**雯**」は「淑」とする。金文では「淑」は「心」を構成要素として「弔」は声符。禤[74]は、楚簡では「弔」及び「口」旁を加えた「**𠯑**」で貞淑の〔淑〕や兄弟の長幼の序を言う〔叔〕を表したと言う。また、貞淑の〔淑〕は「**雯**」「**𠯑**」「**沔**」などでも記されたと言う。「亓」は「其」。「亓」は「其」の古字で、簡帛では「其」字は「亓」で記されることが多い。「義」は「儀」の本字[75]である。白於藍[76]も「義」「儀」の通仮関係を認めている。「**䎽**」は「一」である。『古漢字発展論』[77]は「**䎽**」の使い方は郭店簡中二種類あると言う。一つは、〔一〕の意で使用するもの、二つ目は〔能〕で使用するものである。「一」を「**䎽**」に作るのは、おそらく楚文字中の同音の交換使用であると言う。

---

74 禤二九六頁参照。
75 劉釗七十七頁参照。
76 白於藍四八五頁参照。
77 『古漢字発展論』四六二頁、四四〇頁参照。

（2）能為𦍒（一）、肰（然）句（後）能為君子、𢘅（慎）亓（其）蜀（𧊒・獨）也。

「肰」は「然」とする。『説文』は、「然」は「火」を構成要素とし、「肰」は声符。白於藍[78]は「肰」「然」の通仮関係を認めている。「句」は「后」で「後」の意である。「句」の左右を入れ替えた字形と「后」の字形は似ている。𥙿[79]は、「後」は「先后（後）」の〔后（後）〕の本字であると言う。また、楚簡では「先后（後）」「前后（後）」「后（後）代」の〔后（後）〕は「逡」に作られ、これは『説文』古文「𢓊」と同じであると言う。さらに、「而后（後）」の〔后（後）〕は「句」にも作られると言う。白於藍[80]は「句」「後」の通仮関係を認めている。「𢘅」は秦系文字の「慎」であろう。「慎」は、金文では「心」或いは「言」を構成要素とし、声符は「所」。楚系文字では、「言」（或いはさらに「心」）を構成要素とし、声符は「所」（或いは「所」の省声「斤」）。「幺」や「十（あるいは丨）」が加えられることがある。白於藍[81]は「慎」と「𢘅」の仮借関係を認めている。「𧊒（𧊒）」は隷定すると「蜀」で「獨」である。『説文』は、「獨」は「犬」を構成要素とし、「蜀」は声符。「蜀」の甲骨文は、「虫」「人」「目」から成る。𥙿[82]は、楚簡では未だ「獨」字は見られず、〔獨〕の意では皆「蜀」字を使用すると言う。

（3）〔瞻望弗𢓊（及）〕、𣶒（泣）涕女（如）雨。能𨔁（遲・差）沱（池）亓（其）羽（羽）、肰（然）句（後）能至哀。君子𢘅（慎）亓（其）〔蜀（獨）也。〕

第十七号簡冒頭の欠字三字半は、郭店簡注[83]に従い、「瞻望弗𢓊」を補う。「𢓊」は「及」とする。『古漢字発展論』[84]では増添意符[85]

---

78 白於藍一二〇七頁参照。
79 𥙿一三七頁参照。
80 白於藍二五二頁参照。
81 白於藍八三一頁参照。
82 𥙿九十―九十一頁参照。
83 郭店簡一五二頁〔一九〕参照。
84 『古漢字発展論』四〇八―四〇九頁参照。
85 「増添意符」とは、当該字にその字の意味と関係ある意符を追加することで、当該字の意味の範疇を強調するものである。

として、「及」に「辵」を加えた形を掲載する。「𣿅」は「泣」とする。『説文』は、「泣」は「水」を構成要素とし、声符は「立」と言う。禤[86]は、楚簡では〔泣〕意が「泣」字または「𣿅」字に作られると言う。「𣿅」については「水」「眔」を構成要素とし、「眔」は声符も兼ねる。陳斯鵬[87]は「眔」を〔泣〕の初文であると言う。「女」は「如」である。禤[88]は、早期古文字より、「女」は〔如〕の意で使用されており、それは戦国時代に至るまで続いていたと言う。楚簡では多く〔如〕の意で「女」字を用いる。また、「如」で〔如〕を表すのは、出土文献においては石鼓文や睡虎地秦簡等に見られると言う。「[illegible]」字は、隷定は「𨔁（郭店簡釈文、池田、劉釗）」または「𨔁（白於藍、陳偉等）」とされ、李零は「差」とする。『説文』は、「差」は「左」「丞」を構成要素とすると言う。「丞」字の要素は郭店『五行』のこの部分の「[illegible]」字右部分に表れている。白於藍[89]は「[illegible]（遲）」と「差」の通仮関係を認めている。「沱」は「池」と同字である。「也」と「它」は古音が同じで、古くから混同されていた。「𦐇」は「羽」とする。『古漢字発展論』[90]に双声字[91]として「𦐇」がある。「𦐇」は「羽」「于」共に声符であり、共に匣母魚部に属す。禤[92]は、楚簡では「羽毛」の意の〔羽〕と「和音階名（音階）」の音の一つである〔羽〕は、「羽」ないし「𦐇」で記されると言う。「𧩙」は「慎」である。白於藍[93]は「𧩙」「慎」の仮借関係を認めている。また、第十六号簡の「𧩙」字とここの「𧩙」字は同字であると言う。第十八号簡冒頭欠字二字には、郭店簡注[94]に従い、「蜀也」を補う。

この部分は『毛詩』邶風燕燕篇との関連性が深い。「瞻望弗𨔁、𣿅涕女雨」は、現行本「瞻望弗及、泣涕如雨」の引用で、「𨔁沱亓𦐇」は、現行本「差池其羽」の引用である。ここでは「慎獨」の思想について触れているが、これは『毛詩』が戦国期にどのように解釈されて

---

86 禤二四二―二四三頁参照。
87 陳斯鵬「“眔”為“泣”之初文説」（『古文字研究』第二十五輯二五六―二六一頁、中華書局、二〇〇四年）（未見）
88 禤二六八頁参照。
89 白於藍四六一頁参照。
90 『古漢字発展論』四四四頁、四四九頁参照。
91 「双声字」とは、本来の字形を基礎に声符を加えて形成されるものである。
92 禤四〇一頁参照。
93 白於藍八三三頁参照。
94 郭店簡一五二頁〔二〇〕参照。

いたかについての理解として重要な部分になる。

第八章

原文

〔君〕子之為善也、又（有）與𠂤（始）、又（有）與冬（終）也。君子之為悳（德）也【十八】〔又（有）與〕𠂤（始）、亡〔與〕終也。

訓読

〔君〕子の善を為すや、與［とも］に𠂤（始）まるもの又（有）り、與に冬（終）わるもの又（有）るなり。君子の悳（德）を為すや、〔與に〕𠂤（始）まるもの〔又（有）るも、與に〕終わるもの〔亡（無）き〕なり。

口語訳

〔君〕子が善を行う時は、その始まりがあり、その終わりがある。君子が徳を行う時は、〔その〕始まり〔はあるが〕、その終わり〔はない〕。

注

（1）〔君〕子之為善也、又（有）與𠂤（始）、又（有）與冬（終）也。

欠字一字には郭店簡注[95]に従い、「君」を補った。「𠂤」は「始」とする。『説文』は、「始」は「女」を構成要素とし、声符は「台」と言う。襾[96]は、「初始」の〔始〕の意で「始」字が使用されるのは出土文献では睡虎地秦簡等の秦系文字からであると言う。また、楚簡で

95 郭店簡一五二頁〔二一〕参照。

96 襾二八九頁参照。

は「初始」の〔始〕の意は、大部分「㠯」字で筆写されると言う。『古漢字発展論』[97]もこれを認めている。白於藍[98]は「㠯」「始」は之部司字声系であると言い、通仮関係を認めている。「冬」は「終」である。『説文』は、「冬」は「㐅」「夂」から構成され、「夂」は古文の終字であると言う。禤[99]は、〔終〕の初文は「（甲骨文の「冬」字）」に作ると言う。

（2）君子之為悳（德）也〔又（有）與〕訇（始）、亡〔與〕終也。

第十九号簡冒頭は郭店簡図版[100]では五字の欠字に見えるが、陳偉等[101]の再整理された図版を見ると残簡として「 （訇亡）」の二字が見える。従って欠字は第十七号簡冒頭二字と「終」字の前字一字である。それぞれ郭店簡注[102]に従い、「又（有）與」「與」を補った。「訇」は「㠯」と同字である。『古漢字発展論』[103]は「言」「口」の意符替換（交替）について言及がある。白於藍[104]は「訇」「始」は、共に之部司字声系であると言い、通仮関係を認めている。「終」字は「 」である。第十八号簡の「冬（終）」字は「」であり、違いがある。

第九章

97 『古漢字発展論』四四四頁参照。「台」は透母之部で、「司」は心母之部であると言う。韻部が互いに同じである。

98 白於藍二十四頁参照。

99 禤八十七頁参照。

100 荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社・一九九八年）『五行』篇の図版のこと。郭店簡三十二頁十九號簡参照。

101 陳偉等四十一頁「殘21　19」参照。

102 郭店簡一五二頁〔二二〕参照。漢字の隷定は陳偉等四十八頁に従った。

103 『古漢字発展論』四二七頁参照。

104 白於藍二十四頁参照。

原文

金聖（聲）而玉晨（振）之、又（有）悳（德）者也。金聖（聲）、善也。玉音、聖也。善、人【十九】道也。悳（德）、而〈天〉〔道也。唯〕又（有）悳（德）者、肰（然）句（後）能金聖（聲）而玉晨（振）之。

訓読

「金聖（聲）して之れを玉晨（㬎・振）す」とは、又（有）悳（德）者なり。金聖（聲）は、善なり。玉音は、聖なり。善は、人道なり。悳（德）は、〈天〉〔道なり。〕唯だ又（有）悳（德）者にしてのみ、肰（然）る句（後）に能く金聖（聲）して之れを玉晨（㬎・振）す。

口語訳

〔『孟子』に〕「金聲而玉晨之（鐘を鳴らせば、玉が震える）」とあるが、これは有徳者のことを言ったものである。「金聲」とは、善のことであり、「玉の音」とは、聖のことである。善は、人道であり、徳は、天〔道である〕。ただ有徳者であって始めて、鐘を鳴らし、玉器を打ってそれを締めくくることができる。

注

（1）金聖（聲）而玉晨（㬎・振）之、又（有）悳（德）者也。

「聖（聲）」については別途考察する。第参章第二節の二を参照。「晨」は「振」とする。『説文』は、「振」は「手」を構成要素とし、声符は「辰」と言う。「㬎（晨）」字は、厳格に隷定すると「㬎」である。禤[105]は、先秦出土文献で「振」字が見られず、楚簡では「㬎」字で「振奮（奮起する）」の〔振〕の意を筆写すると言う。

「金聖而玉晨之」は『孟子』萬章下の「孔子之謂集大成。集大成也者、金聲而玉振之也。金聲也者、始條理也。玉振之也者、終條理也。始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也」からの引用または影響が見られる。

105 禤四二三―四二四頁参照。

（2）金聖（聲）、善也。玉音、聖也。

「玉音」は、池田[106]、龐樸[107]は「玉振」とする。馬王堆『五行』は「王言」に作る。

（3）善、人道也。悳（德）、而〈天〉〔道也〕。

「而」は、字形は「[illegible]（而）」字であるが「[illegible]（天）」とする。郭店『五行』には「而」字と「天」字の混乱が見られる。「[illegible]（「而」郭店『五行』第二十号簡）」字と「[illegible]（「天」郭店『五行』第五号簡）」字はかなり似ている。「而」字は戦国期に筆写の仕方が多様化したことで、この時期の「而」字と「天」字は簡単に混乱してしまう。「而」字の下の欠字には郭店簡注[108]に従い「道也」を補う。

（4）〔唯〕又（有）悳（德）者、肰（然）句（後）能金聖（聲）而玉晨（脣・振）之。

欠字「道也」の二字に続く、半字の欠字には、郭店簡釈文[109]に従い、「唯」を補う。

第十章

原文

不聆（聰）不明、不聖不【二十】智、不智不悬（仁）、不悬（仁）不安、不安不樂、不樂亡悳（德）。

訓読

聆（聰）ならず明ならざれば、聖ならず智ならず。

---

106 池田一五〇頁冒頭参照。

107 陳偉等五十四頁〔45〕参照。

108 郭店簡一五二頁〔二四〕参照。

109 郭店簡一五〇頁参照。

智ならざれば𢘓（仁）ならず、𢘓（仁）ならざれば安からず、安からざれば樂しまず、樂しまざれば悳（德）亡（無）し。

口語訳

耳が聰くなく、また目が明らかでなければ、聖と智を実現することはできない。

智を実現しなければ、仁を実現することはできず、仁を実現できなければ、〔仁などの天道によって〕安らかな気持ちになることはできず、安らかな気持ちにならなければ、〔天道を身につけて〕楽しむことはできず、楽しまなければ、徳を完成させることはできない。

注

（1）不**聝**（聰）不明、不聖不智、不智不𢘓（仁）、不𢘓（仁）不安、不安不樂、不樂亡悳（德）。

「不智」「不𢘓」「不安」「不樂」にはそれぞれ重文符号が付されている。郭店簡釈文[110]に従って読む。「[illegible]（樂）」字の下部は「木」ではなく「大」または「矢」の字形に見える。

第十一章

原文

不弁不兌（悅）、不兌（悅）不**𡨦**（就・戚）、不**𡨦**（就・戚）不新（親）、不新（親）不悉（愛）、不悉（愛）不𢘓（仁）。

訓読

弁しまざれば兌（悅）ばず、兌（悅）ばざれば**𡨦**（戚）しまず、**𡨦**（戚）しまざれば新（親）しまず、新（親）しまざれば悉（愛）せず、悉（愛）せざれば𢘓（仁）ならず。

---

[110] 郭店簡一五〇頁参照。

口語訳

弁［たの］しまなければ悦びを感じることはできず、悦びを感じなければ仲良くすることはできず、仲良くすることができなければ親しむことはできず、親しむことができなければ愛することはできす、愛することができなければ仁を実現することはない。

注

（1）不弁不兌（悦）、不兌（悦）不**亯**（就・戚）、不**亯**（就・戚）不新（親）、不新（親）不悉（愛）、不悉（愛）不**㤅**（仁）。

「弁」については別途考察する。第肆章第一節を参照。「不兌」「不**亯**」「不新」「不悉」にはそれぞれ重文符号が付されている。郭店簡釈文[111]に従って読む。

第十二章

原文

不悳（直）不**遙**（肆）、不**遙**（肆）不果、不果【二十一】不柬（簡）、不柬（簡）不行、不行不義。

訓読

悳（直）ならざれば**遙**（肆）ならず、**遙**（肆）ならざれば果ならず、果ならざれば柬（簡）ばず、柬（簡）ばざれば行わず、行わざれば義ならず。

口語訳

まっすぐな心を抱くことがなければ、〔心が〕自由になることはできず、自由でなければ、迷わず果断に振る舞うことはできず、果断に振る舞わなければ、適切に選択することはできず、適切に選択できなければ、実際に行うことはできず、実際に行わなければ、義を実現する

---

111 郭店簡一五〇頁参照。

ことはできない。

注

（1）不悳（直）不遙（肆）、不遙（肆）不果、不果不柬（簡）、不柬（簡）不行、不行不義。

「不遙」「不果」「不柬」「不行」にはそれぞれ一字ずつ重文符号が付されている。郭店簡釈文[112]に従って読む。「[illegible]（悳）」は、字形は「[illegible]（徳）」と同じであるが「直」に読む。これは馬王堆『五行』の該当箇所が「不直」に読んでいるためである。郭店簡釈文、池田、李零、劉釗、陳偉等[113]も「直」と読む。白於藍[114]は「悳」「直」の通仮関係を認めている。「遙（肆）」は別途考察する。第参章第一節の四を参照。「柬」は「簡」とする。『説文』は、「柬」は分別して選ぶことで、「束」「八」から構成されると言う。また、「八」は「分別」の意と言う。禤[115]は、楚簡では「柬」を用いて「簡易」「簡大」の意の｛簡｝を表すと言う。また、『汗簡』『古文四声韻』では、古文では「簡」字を「柬」字に作るとする。さらに、『漢書』高惠高后文功臣表の顔師古注では晋灼を引いて、「柬」は古い「簡」字であると言う。ここでは、「柬」は古い「簡」字とし、意味は分別して選ぶ意とする。

第十三章

原文

不**賸**（遠）不敬、不敬不嚴、不嚴不**障**（尊）、不**障**（尊）不共（恭）、不共（恭）亡豊（禮）。

訓読

---

112 郭店簡一五〇頁参照。

113 郭店簡釈文一五〇頁、池田一五三―一五四頁、李零七十九頁13、劉釗七十九頁、陳偉等四十八頁参照。

114 白於藍五九八頁参照。

115 禤一六二―一六三頁参照。

賡（遠）からざれば敬せられず、敬せられざれば嚴ならず、嚴ならざれば隣（尊）ばれず、隣（尊）ばざれば共（恭）しからず、共（恭）しからざれば豊（禮）亡（無）し。

口語訳

人は遠慮の心がなければ、自分が尊敬されることはできず、尊敬されなければ、威厳が身につくことはできず、威厳がなければ、尊厳が身に具わることはできず、尊厳が具わらなければ、恭しく振る舞うことはできず、恭しくなければ、禮を実現することはできない。

注

（1）不賡（遠）不敬、不敬不嚴、不嚴不隣（尊）、不隣（尊）不共（恭）、不共（恭）亡豊（禮）。

「賡」は「遠」である。劉釗[116]は、「賡」字は「見」を構成要素とし、声符は「袁」で、「遠」字とする。白於藍[117]は、「賡」「遠」の通仮関係を認めている。「敬」字について『古漢字発展論』[118]は、「敬」字の偏の「苟」上部の「艸（くさかんむり）」の形体は下部「口」の影響で「口」と同形になると言う。「嚴」字は厳格に隷定すると「嚴」であろう。『説文』は、「嚴」は「Ⅲ」を構成要素とし、声符は「厰」と言う。この郭店『五行』の「嚴」字には「厂」が脱落しているのであろう。「隣」は「尊」である。劉釗[119]は「隣」字は「尊」字の初文であると言う。郭店『五行』の「隣」字は厳格に隷定すると「隣」である。「尊」字の下部は甲骨文字より「廾(両手の形に象る)」または「又」を使用しており、「寸」が使用されるのは漢帛書以降である。禤[120]は、楚簡では{尊}の意で「𢍏」

116 劉釗八十頁参照。
117 白於藍一二四三頁参照。
118 『古漢字発展論』四六七頁参照。
119 劉釗八十頁参照。
120 禤四五五―四五六頁参照。

や「𨻰」字を使用すると言う。「共」は「恭」である。劉釗[121]は「共」は「恭」とする。白於藍[122]は「共」と「恭」の仮借関係を認めている。

ここでは「不敬」「不嚴」「不𨻰」「不共」にそれぞれ重文符号が付されている。郭店簡釈文[123]に従って読む。

第十四章

原文

未尚（嘗）【二十二】聳（聞）君子道、胃（謂）之不（聰）聈。未尚（嘗）視（見）臤（賢）人、胃（謂）之不明。聳（聞）君子道而不智（知）【二十三】亓（其）君子道也、胃（謂）之不聖。視（見）臤（賢）人而不智（知）亓（其）又（有）悳（德）也、胃（謂）之不智。【二十四】見而智（知）之、智也。聳（聞）而智（知）之、聖也。明明、智也。虩（赫）虩（赫）、聖也。明明才（在）下、虩（赫）虩（赫）【二十五】才（在）上、此之胃（謂）也。

訓読

未だ尚（嘗）て君子道を聳（聞）かざる、之れを聈（聰）ならずと胃（謂）う。未だ尚（嘗）て臤（賢）人を視（見）ざる、之れを明ならずと胃（謂）う。君子道を聳（聞）くも亓（其）の君子道なるを智（知）らざるや、之れを聖ならずと胃（謂）う。臤（賢）人を視（見）るも亓（其）の又（有）悳（德）なるを智（知）らざるや、之れを智ならずと胃（謂）う。見て之れを智（知）るは、智なり。聳（聞）きて之れを智（知）るは、聖なり。明明は、智なり。虩（赫）虩（赫）は、聖なり。「明明として下に才（在）り、虩（赫）虩（赫）として上に才（在）り。」、此の胃（謂）いなり。

---

121 劉釗八十頁参照。

122 白於藍一〇〇〇頁参照。

123 郭店簡一五〇頁参照。

口語訳

まだ君子道を聞いたことがないのを、耳が聰くないと言う。まだ賢人を見たことがないのを、目が明らかでないと言う。君子道を聞いてもそれが君子道であることが分からないのを、聖でないと言う。賢人を見てもそれが有徳であることが分からないのを、智でないと言う。

それ〔賢人〕を見て〔それが有徳であることを〕知るのが、智である。それ〔君子道〕を聞いて〔それが君子道であることを〕知るのが、聖である。〔『詩』の〕「明明」とは、智のことであり、「赫赫」とは、聖のことである。〔『詩』に〕「明明として下に在り、赫赫として上に在る。」とは、こういう意味である。

注

（1）未尚（嘗）聳（聞）君子道、胃（謂）之不聆（聰）。

「尚」は「嘗」である。『説文』は、「嘗」は「旨」を構成要素とし、声符は「尚」と言う。白於藍[124]は「尚」字と「嘗」字の仮借関係を認めている。池田[125]は、「古典的諸文献によく登場する常訓である」と言う。

（2）未尚（嘗）視（見）臤（賢）人、胃（謂）之不明。聳（聞）君子道而不智（知）亓（其）君子道也、胃（謂）之不聖。視（見）臤（賢）人而不智（知）亓（其）又（有）悳（德）也、胃（謂）之不智。

「視（見）」字については別途考察する。第参章第二節の一を参照。ここの「[illegible]」字と「[illegible]」字が、「視」字であるか「見」字であるかについては郭店簡注[126]でも議論されている。

（3）見而智（知）之、智也。聳（聞）而智（知）之、聖也。明明、智也。赫（赫）赫（赫）、聖也。明明才（在）下、赫（赫）赫（赫）才（在）上、此之胃（謂）也。

---

124 白於藍一〇七〇頁参照。
125 池田一五七頁参照。
126 郭店簡一五三頁〔三一〕参照。

「明」「虩」にはそれぞれ重文符号が付されている。郭店簡釈文[127]に従って読む。「虩」は「赫」とする。劉釗[128]は、「虩」字と「赫」字の古音はどちらも曉紐鐸部にあり通じると言う。白於藍[129]は「虩」字と「赫」字の通仮関係を認めている。「才」は「在」とする。『説文』は、「在」は「土」を構成要素とし、声符は「才」と言う。『古漢字発展論』[130]は『甲骨文字詁林』を引いて、「才」と「在」はもと同源であり、「在」は後に造られた存在を示す専用字である（『甲骨文字詁林』三三九七頁）と言う。また、字の成り立ちについて二つの説を挙げている。一つは、「商代の資料に「在」という字は見られず、存在の意味を表すときはすべて「才」が使用された」とするもの、もう一つは、「「才」に声符の「土」（『説文』の「土」は「士」の誤りと推測）が加えられ、「在」字が分化した」というものである。甲骨文字より楚文字に至るまで多くの用例があるため、「才」は「在」と読み為して問題ない。「明明才下、虩虩才上」は『毛詩』大雅文王之什大明篇の「明明在下、赫赫在上」からの引用である。

第十五章

原文

眚（聞）君子道、**聑**（聰）也。眚（聞）而智（知）之、聖也。聖人智（知）而〈天〉【二十六】道也。智（知）而行之、義也。行之而時、悳（德）也。見臤（賢）人、明也。見而智（知）之、【二十七】智也。智（知）而安之、**㤅**（仁）也。安而敬之、豊（禮）也。聖智（知）、豊（禮）**𤔲**（樂）之所**[illegible]**（**𩰫**・**𩰫**・由）生也、五【二十八】〔行之所和〕也、和則**𤔲**（樂）、**𤔲**（樂）則又（有）悳（德）、又（有）悳（德）則邦**家**（家）**𢦏**（舉）。文王之見也女（如）此。「文【二十九】〔王才（在）上、於昭〕于而〈天〉。」此之胃（謂）也。

訓読

---

127 郭店簡一五〇頁参照。
128 劉釗八十―八十一頁参照。
129 白於藍七一八頁参照。
130 『古漢字発展論』二九七頁参照。

君子道を聞（聞）くは、聰（聰）なり。聞（聞）きて之れを智（知）るは、聖なり。聖人は〈天〉道を智（知）るなり。智（知）りて之れを行うは、義なり。之れを行いて時なるは、悳（德）なり。

臤（賢）人を見るは、明なり。見て之れを智（知）るは、智なり。智（知）りて之れに安んずるは、息（仁）なり。安んじて之れを敬うは、豊（禮）なり。

聖智（知）は、豊（禮）樂（樂）の[illegible]（鼓・鼓・由）りて生ずる所なり。五〔行の和する所〕や、和すれば則ち譽（樂）しみ、譽（樂）しめば則ち悳（德）又（有）り、悳（德）又（有）れば則ち邦家（家）舉（舉）こる。文王の見わるるや此くの女（如）し。「文〔王上に才（在）り、ああ〕〈天〉に〔昭らかなり〕。」とは、此れの胃（謂）いなり。

口語訳

君子道を聞くことができるのが、耳の聰さである。それ〔君子道〕を聞いて知るのが、聖である。聖人は、天道を知ることができる。それ〔君子道〕を知って行うのが、義である。それ〔君子道〕を時宜に応じて行うのが、徳の完成である。

賢人を見ることができるのが、目の明らかさである。それ〔賢人〕を見て知るのが、智である。それ〔賢人〕を知って安らかな気持ちになるのが、仁である。安らかになってそれ〔賢人〕を敬うのが、禮である。

聖と智は、禮楽の生まれてくる源である。五〔行が一つに調和・統一されるならば〕、〔人はそれによって〕楽しむことができる。楽しむことができれば、それが徳の完成である。徳が完成すれば、国家は興隆するに至る。文王はこうして世に現れたのである。〔『詩』に〕「文〔王が上位に君臨して、ああ〕、その徳は天に〔輝く〕。」とあるのは、こういう意味である。

注

（1）聞（聞）君子道、聰（聰）也。聞（聞）而智（知）之、聖也。聖人智（知）而〈天〉道也。智（知）而行之、義也。行之而時、悳（德）也。

「[illegible]（而）」字は「天」字の誤りで「天」とする。第九章注（3）参照。「義也」は、馬王堆『五行』経では「聖也」に作る。池田[131]

[131] 池田一五九頁（1）参照。

は、馬王堆『五行』経「聖也」が、郭店『五行』のこの部分（「義也」）が出土したことによって明確となったと述べている。

（2）見臤（賢）人、明也。見而智（知）之、智也。智（知）而安之、息（仁）也。安而敬之、豊（禮）也。聖智（知）、豊（禮）嶽（樂）之所[illegible]（𩰫・𩰫・由）生也、

[illegible]（𩰫・𩰫）は「由」とする。「[illegible]」字について、池田[132]は郭店簡注[133]に従い「𣪘」、李零[134]は「由」、劉釗[135]は「𩰫」、陳偉等[136]は竹簡の図版を載せた上で「由」とそれぞれ隷定している。禤[137]は、「繇」字が｛由｝の本字であるとしている。『説文』は、「繇」は「系」を構成要素とし、声符は「𦍒」と言う。また、楚以外から出土した簡文では多く、「繇」の分化字である「[illegible]」字（或いは省体「[illegible]」）が｛由｝の意で用いられる。さらに禤も、郭店『五行』の「[illegible]」字に言及しており、この字を「𩰫」に作った上で、珍しく奇異な字形であるとし、裘錫圭の「𢆶」字の誤写説を挙げている。

（3）五〔行之所和〕也。和則𤔲（樂）、𤔲（樂）則又（有）悳（德）、又（有）悳（德）則邦𡨦（家）𢆶（舉）。

---

132 池田一五九―一六〇頁参照。
「「𣪘」の字は、よく分からない」とした上で、郭店簡注〔三四〕の裘錫圭の案語が「正しいかもしれない」と述べている。
133 郭店簡一五三頁〔三四〕参照。裘錫圭の案語が「𢆶」字の誤写ではないかと述べている。
134 李零七十九頁、八十一頁十七章、八十三―八十四（三）参照。釈文で「𢆶」字の変体ではないかと述べている。
135 劉釗八十一頁参照。
136 陳偉等四十九頁、五十五―五十六頁〔61〕参照。
137 禤三九六―三九七頁参照。

第二十九号簡冒頭の欠字四字は郭店簡注[138]に従い、「行之所和」を補う。「𦥑」は「樂」である。裒[139]は、楚簡では〔樂〕を「𦥑」に作ることもあると言い、「樂」や「𦥑」の「木」旁を「言」旁に変えることもあると言う。「𨚕（邦）」字は、金文「邦」字と同じく「丰」と「邑」を構成要素とする。「𡨦」は「爪」が加わった「家」字である。『古漢字発展論』[140]は、この字は「家」字に「爪」を加えた「増繁無義偏旁」であると言う。「𢍰」は「舉」である。『説文』は、「舉（𦥑）」は「手」を構成要素とし、声符は「與」と言う。「與（𦥑）」については「舁」と「与」を構成要素とし、「舁（𦥑）」は古文の「與」であると言う。裒[141]は、「與」は〔舉〕の初文で、四つの手（舁）は「共舉」の意を表し、「與」字上部中央の「与（説文：𦥑）」は本来「牙（説文：𦥑）」字であり、音符であると言う。また、「與」に「手」旁を増やした「舉」字は出土文献中では睡虎地秦簡等で見られ、秦系文字であると言う。さらに楚簡では〔舉〕は「𢍰」字で記すと言う。「𢍰」は、「與」と「止」構成要素とする。「𢍰」は「舉」が「手」に従うのと同工異曲とし、〔舉〕の専用字であると言う。「𦥑」「又悳」に重文符号が付されている。郭店簡釈文[142]に従って読む。

（4）文王之見也女（如）此。

「文王之見也女比」は、馬王堆『五行』では欠字五字の箇所に該当し、馬王堆『五行』裘錫圭[143]は、この欠字部分に「文王之見也」を補っている。池田[144]は郭店『五行』のこの部分の出土によって、馬王堆『五行』の作者が文中の「文王」を有徳者と理解していたことが

---

138 郭店簡一五三頁〔三五〕参照。
ここの欠字部分は三字であるか四字であるかはっきりしておらず、現在のところは暫定的に四字を補うこととしている。三字の場合は「行所和」を補うのではないかと整理者は述べている。
139 裒一九一―一九二頁参照。
140 『古漢字発展論』四二二頁参照。
141 裒一八三頁参照。
142 郭店簡一五〇頁参照。
143 馬王堆『五行』裘錫圭六十七頁〔六九〕参照。
144 池田一六〇頁（4）参照。

明らかになったと述べている。

（5）「文〈王才（在）上、於昭〉于而〈天〉。」此之胃（謂）也。

第三十号簡冒頭の欠字五字は郭店簡注[145]に従い、「王才上於昭」を補う。この部分は『毛詩』大雅文王之什文王篇の「文王在上、於昭于天」の引用である。そのため「而」字は「天」字の間違いと見て、「天」に読み為す。

第十六章

原文

見而智（知）之、智也。智（知）而安之、息（仁）也。安【三十】而行之、義也。行而敬之、豊（禮）也。息（仁）義、豊（禮）所[illegible]（[illegible]・[illegible]・由）生也、四行之所和也。和【三十一】則同、同則善。

訓読

見て之れを智（知）るは、智なり。智（知）りて之れに安んずるは、息（仁）なり。安んじて之れを行うは、義なり。行いて之れを敬うは、豊（禮）なり。

息（仁）義は、豊（禮）の[illegible]（[illegible]・[illegible]・由）りて生ずる所なり、四行の和する所や、和すれば則ち同じ、同ずれば則ち善なり。

口語訳

見て知るのが、智である。知って安らかな気持ちになるのが、仁である。安らかになって行うのが、義である。行って敬うのが、禮である。

仁と義は、禮の生まれてくる源である。四行が一つに調和・統一されるならば、それらは自分の心と一つになり、心と一つになれば、そ

---

145 郭店簡一五三頁〔三七〕参照。

れが善となる。

注

（1）見而[illegible]（智・知）之、[illegible]（智）也。[illegible]（智・知）而安之、**㤅**（仁）也。安而行之、義也。行而敬之、豊（禮）也。**㤅**（仁）義、豊（禮）所[illegible]（鼉・鼉・由）生也、四行之所和也。和則同、同則善。

「[illegible]」は、他の「智」字（[illegible]・[illegible]）とは異なり下部の「甘」の形が複雑化しているが、「智」字とする。「智」字の甲骨文「[illegible]」は「大」「口」「子」から成り、沈培は大人が子どもに知識を与える意とする。西周金文「[illegible]」では多くの字形が「大」「口」「于」そして下部に「甘」を加えた構成となっている。「于」は「子」字の訛変である。字形によっては「[illegible]」のように「大」字が「矢」字に訛変しているものもある。「同」には重文符号が付されている。郭店簡釈文[146]に従って読む。

第十七章

原文

顔色伀（容）伋（貌）[illegible]（恩・溫）弁也。以亓（其）宇（中）心與人交、兌（悅）也。宇（中）心兌（悅）**番**（播）**䢅**（**䢅**・遷）

【三十二】於兄弟、**豪**（就・戚）也。**豪**（就・戚）而信之、新（親）〔也〕。新（親）而簹（篤）之、悉（愛）也。悉（愛）父、宇亓（其）[illegible]（**秶**・稽）悉（愛）人、**㤅**（仁）也。

訓読

顔色伀（容）伋（貌）の恩（溫）やかなるは、弁［たの］しむなり。亓（其）の宇（中）心を以て人と交わるは、兌（悅）ぶなり。宇（中）心番（焉）れを兌（悅）び、兄弟に**䢅**（遷）すは、**豪**（戚）むなり。**豪**（戚）しみて之れを信にするは、新（親）しむ〔なり〕。新（親）しみて之れを簹（篤）くするは、悉（愛）なり。父を悉（愛）し、亓（其）の人を悉（愛）するに**秶**（稽）［およ］ぶは、**㤅**（仁）

146 郭店簡一五〇頁参照。

なり。

口語訳

顔色や容貌が温やかであることが、楽しむことである。心の中に楽しむ気持ちをもって人と交際することが、悦びを感ずることである。心の内に抱いた悦びを、兄弟に及ぼすことが、〔兄弟同士が互いに〕仲よくすることである。〔兄弟の〕仲のよさを誠実なものにすることが、親しみ〔である〕。〔兄弟の〕親密さを重んじ堅実なものにすることが、愛することである。自分の父を愛し、世の人々を愛するに及ぶことが、仁の完成である。

注

（1）顔色伀（容）仪（貌）恩（溫）弁也。

「[illegible]」には合文符号が付されており、郭店簡注[147]と『古漢字発展論』[148]に従い、「顔色」と読み為す。金文の「[illegible]（顔）」字は「面」を構成要素とし、声符は「产」。楚文字の「[illegible]（顔）」字は「色」を構成要素とし、声符は「产」。「色」の本義は顔色、気色である。「伀」は「容」である。禤[149]は「容貌」の〔容〕の本字は本来「頌」であるが、伝世文献では多くが「容（「容」の本字「宖」に作る）」に仮借されて使用されてきたとし、馬王堆『五行』もこの習慣に従い「容」に作ると言う。しかし、先秦期の楚簡の〔容〕の用字習慣は『説文』と合致していたと言う。『説文』は、「[illegible]（頌）」について「頌、皃也。从頁、公聲」と言い、容貌の意とした上でこの字が「[illegible]（頁）」を構成要素とし、声符は「[illegible]（公）」と言う。禤は、郭店『五行』の「[illegible]（伀）」字について「頁」旁が「人」旁に変化した字形としている。また、郭店『五行』の「[illegible]（伀）」字は、『説文』に見える「伀、志及衆也」の「伀」字とは異なると言う。「仪」は「貌」とする。「貌」字は古くは「皃」に作り、また「貌」にも作る。前述の「伀」字と同じく「頁」旁が「人」旁に変化したと禤[150]は考える。『説

147 郭店簡一五三頁〔三九〕参照。
148 『古漢字発展論』四七一頁参照。
149 禤二六五―二六六頁参照。
150 禤二六六頁参照。

文』は、「皃、頌儀也、从人、白象人面形」と言い、「皃」は頌儀（外に現れた顔の形）の意であり、「人」を構成要素とし、「白」は人の顔「頁」の訛変に象ると言う。「頌」字について『説文』は「頌、皃或从頁、豹省聲、貌、籀文皃从豹省」と言い、「皃」あるいは「頁」に従い「豹」の省略形を声符として構成されていると言う。禤[151]は、楚簡では｛貌｝は「仪」に作ると言う。「仪」は「人」を構成要素とし、声符は「爻」と分析し、「容貌」の｛貌｝の専用字であるとしている。「弁」については別途考察する。第肆章第一節を参照。

（2）以亓（其）宇（中）心與人交、兌（悅）也。宇（中）心兌（悅）𤰈（焉）𨗨（𨗨・遷）於兄弟、𧶠（就・戚）也。

「𤰈」は「播」である。郭店簡注[152]では裘錫圭の案語を引き郭店『唐虞之道』の「禪」とする字と同字とし仮借して「旃」に読み為すとする。池田[153]は「焉」の異体字とする。李零[154]は釈文で「旃」字にしているが、注でこの字は「里」「采」から成るとし、その意味として「廛」を挙げている。劉釗[155]は、「𥝢」と作り声符は「采」とした上でこれを「播」字とし、「遷播」「流布」の意とする。白於藍[156]は、郭店『五行』のこの部分を挙げ「𤰈」と「然」が通仮すると言う。陳偉等[157]は「𤰈」に作る。その上で、注に王引之『経伝釈詞』の「然、猶「焉」也」と『礼記』檀弓篇「穆公召縣子而問然」の鄭玄注「然之言焉也」を引く。池田に従っておく。「𨗨（𨗨）」は「遷」である。『説文』で「遷」は「辵」を構成要素とし、声符は「罨」とする。劉釗[158]は「𨗨」は「遷」の古文と言う。禤[159]は、「罨（罨）」が｛遷｝の初文と言う。さらに｛遷｝は、戦国秦系文字では「罨（罨）」字が多く用いられると言う。秦印、里耶秦簡には「遷」字が見られ

---

151 禤二一一―二一二頁参照。
152 郭店簡一五三頁〔四〇〕参照。
153 池田一六三頁（2）参照。
154 李零、釈文八十頁、注八十一頁十九章参照。
155 劉釗八十二頁参照。
156 白於藍一四一七頁参照。
157 陳偉等、釈文四十九頁、注五十六頁〔70〕参照。
158 劉釗八十二頁参照。
159 禤二四三―二四四頁参照。

ると言う。楚簡では「[illegible]」字を用いて〔遷〕を記す。「止」を構成要素とする「[illegible]」字と、「辵」を構成要素とする「遷」字があるのは同じ原理によると言う。「[illegible]」には合文符号が付されており、郭店簡注[160]に従い「兄弟」とする。

（3）[illegible]（就・戚）而信之、新（親）〔也〕。新（親）而簹（篤）之、悉（愛）也。

「新」には重文符号が付されている。郭店簡注[161]に従って読む。「新」字の下は欠字ではないが文章の流れより「也」を補っている。郭店簡注[162]の説「「新」字に重文符号が付されているため、「新」は下の句の冒頭の文字になる。そのため「也」を省いた」に同意しつつ、補うか補わないかについてはどちらでもよいとしておく。「簹」は「篤」とする。『説文』は「簹、厚也。从亯、竹聲。讀若篤」と言い、「簹」は厚い意で、「亯」を構成要素とし、声符は「竹」で「篤」と読むと言う。なお「篤」について『説文』は、「馬行頓遲」と言い、馬の歩行が遅々たる様を言うとする。

（4）悉（愛）父、亓（其）[illegible]（[illegible]・稽）悉（愛）人、[illegible]（仁）也。

「[illegible]（[illegible]）」は「稽」とする。郭店簡、池田[163]は「[illegible]」、李零[164]は「繼」、劉釗[165]は「[illegible]」、陳偉等[166]は竹簡の図版のみ、馬王堆『五行』で劉釗[167]は「[illegible]」にそれぞれ隷定する。「[illegible]」字は「禾」「攴」「人」から成るので、馬王堆『五行』裘錫圭の隷定「[illegible]」に従

---

160 郭店簡一五三頁〔四〇〕参照。
161 郭店簡一五三頁〔四一〕参照。
162 郭店簡一五三頁〔四一〕参照。「因「新」字加重文號，兼用作下句首字，故省去其下「也」字」
163 郭店簡一五三頁〔四二〕、池田一六四（4）参照。
164 李零八十頁参照。
165 劉釗八十二頁参照。「[illegible]」字は「稽」の初文であると言う。
166 陳偉等四十九頁参照。
167 馬王堆『五行』裘錫圭六十五頁〔四九〕参照。

うこととする。郭店簡注で、裘錫圭[168]が「馬王堆『老子』甲本の「稽」字の寫筆が、「稽」の異体字と思われる。これを「繼」と読み為す。「稽」「繼」の古音はかなり近い」と言い、後世の学者もこれに従い、「稽」を「繼」に通仮するとする。しかし、「稽」と「繼」の通仮を検討する必要はないと考える。「稽」字については、『荘子』内篇逍遙遊[169]に「大浸稽天而不溺（大浸、天に稽れども溺れず）」とあり、これに対する章炳麟の『荘子解故』は「稽借為詣、同従旨声也。説文、詣、候至也。故司馬訓至」と言う。これにより「稽」には「及ぶ、いたる」の意があることがわかる。この意味でここを解釈すると「父を愛することが、人を愛することに及ぶ、それが仁である」となり、意味として通じる。本論文では「繼」に通仮する説は採用せず「稽」字のまま読むこととする。

第十八章

原文

宰（中）心【三十三】詖（辨）肰（然）而正行之、植（直）也。悳（德）而述（遂）之、遙（肆）也。遙（肆）而不畏彊（強）語（禦）、果也。不【三十四】以少（小）道𡨦（害）大道、柬（簡）也。又（有）大皐（罪）而大𢿱（誅）之、行也。貴貴、亓（其）定（等）障（尊）臤（賢）、義也。【三十五】

訓読

宰（中）心肰（然）るを詖（辨）えて、正しく之れを行うは、植（直）なり。悳（德）にして之れを述（遂）ぐるは、遙（肆）［ほしいまま］にするなり。遙（肆）にして彊（強）語（禦）を畏れざるは、果なり。少（小）道を以て大道を𡨦（害）せざるは、柬（簡）なり。大皐（罪）又（有）りて大いに之れを𢿱（誅）するは、行なり。貴を貴び、亓（其）の定（等）ぎに臤（賢）を障（尊）ぶは、義なり。

口語訳

---

168 郭店簡一五三頁〔四二〕「裘按」参照。

169 池田知久『荘子』釈文四十七頁、注三六五頁八六参照。

心の内面でものごとを判断して、それを正しく行うことが、まっすぐな心を抱くことである。まっすぐな心を基にして、それを成し遂げていくことが、心が自由になることである。心が自由になって乱暴者をも畏れないのが、迷わず果断に振る舞うことである。小道にこだわって大道を害わないことが、的確に選び出すことである。大罪を犯した者があれば大いにそれを罰することが、真の行いである。貴い地位にある者を貴び、その次に能力のある賢人を尊ぶことが、義の実現である。

注

（1）宀（中）心𧻚（辨）肰（然）而正行之、植（直）也。

「𧻚」は「辨」とする。『説文』は、「辨」について「刀」を構成要素とし、声符は「辛」と言い、「辯」について「言」と「辛」から成り「言」が「辛」の間にあると言う。𥂴[170]は、{辨}{辯}は「𠬝」字に仮借して記されていたと言う。この「𠬝」字は{鞭}の古文である。さらに、この「𠬝」に「言」旁を足した「𧻚」は、{辨}{辯}の専用字と見ることができると言う。その上で、{辨}{辯}は恐らく同じ一語の分化であり、そのため楚簡の中で用いる字が同じであると言う。ここでは「辨」とする。「植」は「直」とする。『説文』直の項に見える「𢘅（𢘅）」は「直」の古文と言う。𥂴[171]は、出土文献の「直」「悳」「德」は皆「德」字で表すことができると言う。そのため楚簡では「正直」の{直}の意を表す際には「植」に作ると言う。また『説文』古文「𢘅」字は「植」字の変形であると言う。

（2）悳（德）而述（遂）之、𨑓（肆）也。𨑓（肆）而不畏彊（強）語（禦）、果也。

「述」は「遂」である。𥂴[172]は、{遂}は先秦古文字では皆「述」に作ると言う。「朮」と「㒸」は音が近く、金文においても「述」字は「遂」字や「墜」字として使用される。「𨑓（肆）」は既出。「畏（『説文』は「鬼」と「卜」を構成要素とする）」はここでは「𢘅」に筆写されているが、これは「卜」が「止」形に訛変したものである。「彊」は「強」とする。𥂴[173]は、「彊」は「強弱」の{強}

170 𥂴四十七―四十八頁参照。
171 𥂴四二九頁参照。
172 𥂴三一四―三一五頁参照。
173 𥂴二四七―二四八頁参照。

の本字であると言う。また、「彊」字に「力」旁を足した「彊」も〔強〕を表し、郭店『五行』においては「弱」で記されていると言う。「弱」字については、甲骨文〔強〕の意の「弘」字を、楚文字が継承しそれに飾筆をつけた「弘」に「力」旁を足したものと言う。「語」は「禦」である。劉釗[174]は「語」「禦」の古音はどちらも疑紐魚部にあるため、通仮することができると言う。白於藍[175]も「語」と「禦」の通仮関係を認めている。「不畏強禦」は『毛詩』大雅蕩之什烝民篇「維仲山甫、柔亦不茹、剛亦不吐、不侮矜寡、不畏疆禦」からの引用である。

（3）不以少（小）道𡨦（害）大道、柬（簡）也。

「𡨦」は「害」とする。季旭昇[176]は、裘錫圭が〔害〕の甲骨文が「𧊒」字で作られていることを指摘し、「𧊒」が「傷害」の〔害〕の本字となったと言う。〔害〕が「𡨦」に作られるのは睡虎地秦簡や馬王堆帛書で見られる。また、郭店『五行』の「𡨦（害）」字については「𧊒」字の古い形或いは「夌」であると言う。郭店簡[177]も「夌」に隷定する。劉釗[178]は「𡨦」字を「𡨦」と隷定する。劉釗に従う。白於藍[179]は郭店『五行』のこの部分を引用し「𡨦」「害」の通仮関係の実例とする。

（4）又（有）大辠（罪）而大𢦏（誅）之、行也。貴貴、亓（其）𧻚（等）𨺅（尊）臤（賢）、義也。

「辠」は「罪」とする。『説文』の「罪」の項には「捕魚竹网、从网、非、秦以罪爲辠字」と、「罪」が本来魚を捕る網の意であり、「网」と「非」を構成要素とすることを言い、秦が「罪」字を用いて「辠」字の意を表したと言う。裘[180]は、先秦出土文献において〔罪〕は皆

174 劉釗八十三頁参照。
175 白於藍三六五頁参照。
176 『説文新證』四八四―四八六頁参照。
177 郭店簡釈文一五〇頁、注一五三頁〔四五〕参照。
178 劉釗八十二頁参照。
179 白於藍八一一―八一二頁参照。
180 裘四五五頁参照。

「辠」字を用いて記されたと言う。睡虎地秦簡も同様に「辠」字を用いる。出土文献において「罪」字をもって〔罪〕を表したのは馬王堆帛書が最初と言う。「𢼸」は「誅」である。禤[181]は、「誅殺」の〔誅〕は楚簡では「戈」を構成要素とし、声符は「豆」の「戉」、または「攴」を構成要素とし、声符は「豆」の「𢼸」で記すと言う。また、「戈」と「攴」は意味が近い形符のため、常に通用して交換することができると言う。「[illegible]（貴）」には合文符号が付されており、「貴貴」に読む。「𨑓」は「等」とする。劉釗[182]は、「𨑓」は「之」声のため、「等」とすると言う。白於藍[183]も「𨑓」と「等」の通仮関係を認めている。「等」には「段階」の意があるため、「つぎ」とここでは訓じる。待考とする。

第十九章

原文

以亓（其）外心與人交、遠也。遠而𤓰（莊）之、敬也。敬而不𠧪（懈）、嚴也。嚴而畏【三十六】之、𨻰（尊）也。𨻰（尊）而不喬（驕）、共（恭）也。共（恭）而尃（博）交、豊（禮）也。

訓読

亓（其）の外心を以て人と交わるは、遠ざかるなり。遠ざかりて之れを𤓰（莊）にするは、敬せらるるなり。敬せられて𠧪（懈）らざるは、嚴なり。嚴にして之れを畏すは、𨻰（尊）ばるるなり。𨻰（尊）ばれて喬（驕）らざるは、共（恭）しきなり。共（恭）しくして尃（博）く交わるは、豊（禮）なり。

口語訳

---

181 禤四四三―四四四頁参照。
182 劉釗八十三頁参照。
183 白於藍七十六頁参照。

外面に向かう心によって人と交際することが、遠慮の心である。遠慮の心があってそれを荘重にするのが、人から尊敬されることである。尊敬されるようになってそれを怠らないことが、威厳が身につくことである。威厳が身についてさらに人々を威れさせるのが、尊厳が身に具わることである。尊厳が身に具わっても威張らないのが、恭しい振る舞いである。恭しく振る舞って幅広く人々と交際するのが、禮の実現である。

注

（1）以亓（其）外心與人交、𨗨（遠）也。𨗨（遠）而𤣥（荘）之、敬也。

「遠（𨗨・𨗨）」字について、郭店簡注[184]が「遠」字の「袁」旁の中部が「目」に訛変するのは、郭店『五行』の作者が常に書き間違えていたためではないかと言う。「𤣥」は「荘」とする。𤣥[185]は、伝世文献では「荘敬」の意の｛荘｝は「荘」字を用いていたが、これは本義ではないと言う。その上で、楚簡では「荘敬」の意の｛荘｝で用いる字形が多数あると言う。ここで用いられている「𤣥」は楚簡における｛状｝の専用字「𤣥」を仮借して｛荘｝を記していると言う。白於藍[186]も「𤣥」と「荘」の通仮関係を認めている。

（2）敬而不[illegible]（𠨘・懈）、嚴也。嚴而畏（第三十六号簡）之、𨺅（尊）也。

「[illegible]」字は、隷定は「𠨘」で「懈（怠る）」意である。郭店簡注[187]が引用する裘錫圭の案語はこの字は恐らく書き手が字を誤ったのではないかと述べ、「待考」としている。李零[188]は注において郭店『五行』の第三十六号簡原物を実見した際に第三十六号簡背面に「解」字を発見したと言う。この字は「𠨘」字の誤りを正したものではないかと述べている。また、陳偉等[189]は、李家浩が「𠨘」字を古文

---

184 郭店簡一五三頁〔四六〕参照。
185 𤣥四五一―四五二頁参照
186 白於藍一〇六四頁参照。
187 郭店簡注一五三頁〔四八〕参照。
188 李零八十二―八十三（四）参照。
189 陳偉等、図版四十四頁、注五十七頁〔80〕参照。

「解（懈）」の別体と推測していることを挙げる。さらに、図版で第三十六号簡背面の「[illegible]」字を載せた上で、注の結論でこの「[illegible]」が「懈」字であるとしている。

（3）**𨻰**（尊）而不[illegible]（喬・驕）、共（恭）也。共（恭）而專（博）交、豊（禮）也。

「[illegible]」は「喬」で「驕」とする。𤣥[190]は、「驕」字によって「驕矜（驕り高ぶること）」の｛驕｝を表すのは出土文献では睡虎地秦簡、馬王堆帛書等で見られると言う。楚簡では「喬」字で｛驕｝を表すと言う。「喬」は「高」の分化字。一般的には「高」に上部に「走」か「夭」（「走」と「夭」は混同している）を加えて作るが、郭店『五行』の「[illegible]」は上海簡に見られる「九」及び「高」で構成された「[illegible]」と同形にも見える。実際のところ、上部が「九」なのか「又」なのか「夭」なのかはっきりしない。形に混同があると思われる。季旭昇[191]によると、上部は指示符号或いは「屮」「止」「又」「九」形に作られている字が見え、東漢では「夭」形に作っている字が見られるという。意味は「驕り高ぶる」である。「專」については、『古漢字発展論』[192]第六章戦国文字の書き損じの項には、「上部の「父」を誤り、「屮」形に作る」とあり、「偏旁の誤り」としている。金文「專」にはもともと「敷布」の意があるため、ここは「博」に直さなくてもよい。

第二十章

原文

不東〈柬（簡）〉、不行。不匿、不[illegible]（[illegible]・察）【三十七】於道。又（有）大辠（罪）而大[illegible]（誅）之、東〈柬（簡）〉也。又（有）少（小）辠（罪）而亦（赦）之、匿也。又（有）大辠（罪）而弗大【三十八】[illegible]（誅）也、不行也。又（有）少（小）辠（罪）而弗亦（赦）也、不[illegible]（[illegible]・察）於道也。東〈柬（簡）〉之為言猷（猶）練【三十九】也、大而晏（罕）者也。匿之為言猷（猶）匿匿也、少（小）而訪〈診（軫）〉者也。東〈柬（簡）〉、義之方也。匿、【四十】[illegible]（仁）之方也。[illegible]・[illegible]（剛）、義之方。矛（柔）、[illegible]（仁）之方也。不[illegible]・[illegible]（強）

190 𤣥一六八頁参照。
191 『説文新證』八〇〇―八〇一頁参照。
192 『古漢字発展論』四七三頁参照。

不梂（絿）、不弱・彊（剛）不矛（柔）、此之胃（謂）【四十一】也。

訓読

東〈柬（簡）〉ばざれば行わず、匿さざれば道を𢍰（察）せず。大辠（罪）又（有）りて大いに之れを𢦏（誅）するは、東〈柬（簡）〉ぶなり。少（小）辠（罪）又（有）りて之れを亦（赦）すは、匿すなり。大辠（罪）又（有）りて大いに𢦏（誅）せざるや、行わざるなり。少（小）辠（罪）又（有）りて亦（赦）さざるは、道を察せざるなり。

東〈柬（簡）〉の言為るや、猷（猶）お練のごときなり、大にして晏（罕）なる者なり。匿の言為るや、猷（猶）お匿匿のごときなり、少（小）にして訪〈診（軫）〉き者なり。東〈柬（簡）〉は、義の方なり。匿は、𢘓（仁）の方なり。弱・彊（剛）は、義の方なり。矛（柔）は、𢘓（仁）の方なり。「弱・彊（強）ならず梂（絿・急）ならず、弱・彊（剛）ならず矛（柔）ならず。」とは、此の胃（謂）いなり。

口語訳

〔大罪を〕選び出すことができなければ、実際に行ったことにはならず、〔小罪を〕匿してやることができなければ、しっかり選択・判断したことにはならない。大罪を犯した者には大いにそれを罰するのが、簡（選び出すこと）である。些細な罪を犯した者にはそれを許すのが、匿（かくす）ということである。それゆえ、大罪を犯してもしっかり罰しないならば、真の行いとは言えない。些細な罪を犯した際に許さないならば、道に通じているとは言えない。

「簡」ということばは、選択する、判断するという意味であり、大きいけれども頻繁には起こらない事について〔判断することを〕言う。「匿」ということばは、かくすという意味であり、小さくて頻繁に起こる事件について〔匿すことを〕言う。〔大罪を〕選び出すことは、義を実現するための方法であり、〔小罪を〕匿すということは、仁を実現するための方法である。また、剛は義を実現するための方法であり、柔は仁を実現するための方法である。〔『詩』に〕「無理に勉めず急ぎもせず、剛くもなく柔らかくもない」と言うのは、こういう意味である。

注

（1）不 （東・柬（簡））、不行。不匿、不 （𢍰・察）於道。

「[illegible]」について、池田・陳偉等[193]は「東」に隷定し、劉釗[194]は「柬（簡）」に隷定する。『説文』は「柬、分別簡之也。従束従八、八分別也」とし、意味は聞き分けて選ぶことで、「束（＝たばねる）」と「八」から構成される。「八」には本来「分」の意であり、この「柬」字の本来の意味は「分ける・分別する」で、禤[195]は「柬」は「簡」の古字と言う（『漢書』高惠高后文功臣表、顔師古注引晋灼）。池田・陳偉等は「柬」を「束」の誤りとしているが、最終的には劉釗と同じく「簡」としている。実際の字形が「東」であるか、「柬」であるかはわからないとし両字には字形の混同がみられるとする。ここでは「東」に隷定し、「柬」の誤写とみなし、意味は「簡（えら）ぶ」とする。「匿」について、『説文』によると本義は「躲藏（逃げ隠れる・身を隠す）」の意。ここでもその意である。「[illegible]（𦍒）{察}」は別途考察する。第参章第一節の一を参照。池田[196]は馬王堆『五行』によって「辨」または「辯」の異体字としているが、劉釗[197]は「𦍒（察）」とする。李零[198]は一応「辯」とするが、解説の部分において待考としている。郭店簡注[199]が引く裘錫圭の案語は「察」字ではないと言う。この「[illegible]（𦍒）{察}」字について、李零[200]と禤[201]は、楚系文字では「𦍒（原文ママ）」を構成要素とする「謀」「戠」「𢦏」等の字の「𦍒」は、本来は「察」とは何の関係もなく、「𠫑（[illegible]）」字の訛変した字形とする。禤の言う「𦍒」を構成要素とする「謀」「戠」「𢦏」の三つの字形は楚簡では{察}として使われている。ここでは「𦍒」と隷定し{察}の意としておく。

（2）又（有）大辠（罪）而大戠（誅）之、東〈柬（簡）〉也。又（有）少（小）辠（罪）而亦（赦）之、匿也。又（有）大辠（罪）而弗

---

193 池田一六九―一七〇頁（1）、陳偉等四十九頁参照。
194 劉釗八十四頁参照。
195 禤一六二―一六三頁参照。
196 池田一六九―一七〇頁（1）参照。
197 劉釗八十四頁参照。
198 李零釈文八十頁、注八十三頁（五）参照。
199 郭店簡注一五四頁〔五〇〕参照。
200 李零「読清華簡筆記：𠫑与窃」（『清華簡研究』第一輯、中西書局、二〇一二年、第三三〇―三三二頁）（未見）
201 禤五十五―五十六頁参照。

大𢦏（誅）也、不行也。又（有）少（小）辠（罪）而弗亦（赦）也、不𡨦（𡨦・察）於道也。

「亦」は「赦」とする。『説文』は、「赦」は「攴」を構成要素とし、声符は「赤」、「赦」の別体として「赦」字を挙げ、この字は「亦」を構成要素とすると言う。金文の「赦」は声符・意符を兼ねる「亦」と「攴」とを構成要素としている。白於藍[202]は「亦」「赦」の通仮関係を認めている。「亦」は「赦免」の意である。

（3）東〈東（簡）〉之為言猷（猶）練也、大而晏（罕）者也。匿之為言猷（猶）[illegible]（匿匿）也、少（小）而訪〈診（軫）〉者也。

「猷」は「猶」とする。『説文』は、「猷」「猶」両字のどちらも「犬」を構成要素とし、声符は「酋」と言う。「猷」と「猶」は本来同字である。「練」は、戦国期の主要な意味として「えらぶ」がある。池田[203]は「練」は「練」の錯字と言うが、「練」「練」は同字とすべきである。「晏」は「罕」とする。劉釗[204]は「晏」と「罕」は音が近く通用できると言う。劉釗に一応従うが、待考。どちらの漢字も上古音では元部に属している。白於藍[205]も馬王堆『五行』を根拠に「晏」「罕」の通仮関係を認めている。「匿」字には「[illegible]」と重文符号が付されているため「匿匿」とする。「訪（[illegible]）」は「診」の書き間違えであろう。「方」は普通右向きだが、郭店『五行』の作者は、すべて左向き（「[illegible]」郭店『五行』第四十号簡）につくる。この字が「訪」であるなら、「方」を「[illegible]」に作るはずである。そのため、池田[206]などが言うように、「診」の書き間違えと判断する。第四十三号簡の「軫（[illegible]）」とここの「診」は共に声符が「彡」で古音が真部である。「軫」は『淮南子』巻十五・兵略訓の「殷軫」の「軫」は「軫は（積み荷の）盛んなさま」であり、また『史記』律書第三が「軫者、言萬物益大而軫軫然」と言うように「軫」は、「萬物が盛んなさま」を表す。

（4）東〈東（簡）〉、義之方也。匿、[illegible]（仁）之方也。[illegible]（强・强・剛）、義之方。矛（柔）、[illegible]（仁）之方也。不[illegible]（强・强・強）

202 白於藍六九〇頁参照。
203 池田一七〇頁（3）参照。
204 劉釗八十四頁参照。
205 白於藍一二五九頁参照。
206 池田一七〇頁（3）参照。

不梂（絿）、不[illegible]（弱・彊・剛）不矛（柔）、此之胃（謂）也。

「不弱不梂、不弱不矛」は『毛詩』商頌長發篇「不競不絿、不剛不柔」からの引用である。「[illegible]・[illegible]」は厳格に隷定すると「弱」となり現在の通行字体では「彊（[illegible]）」である。またこの字は通仮して「剛」となる。白於藍[207]は「彊」と「剛」の通仮関係を認めている。禤[208]は、「剛」字の古文は「[illegible]」に作り、これは「[illegible]」の訛形であり、「[illegible]」を借りて「剛」としているという裘錫圭[209]の説を引いた上で、これは郭店『五行』の用字に正に呼応すると言う。「[illegible]」は厳格に隷定すると「弱」であり、これは「[illegible]」となる。郭店『五行』第三十四号簡と同じく「強」となる。馬王堆『五行』裘錫圭[210]は、「[illegible]」は『説文』によると、「彊」の古文であり、「彊」と「競」は音が近く通じると言う。白於藍[211]も「[illegible]」と「競」の通仮関係を認めている。「梂」は「絿」である。『説文』は、「梂」について意符「木」と声符「求」からなるとし、「絿」について意符「糸」と声符「求」からなると言う。白於藍[212]は「梂」「絿」の通仮関係を認めている。「絿」の意は、『毛伝』は「急也」とし、『朱熹集伝』は「緩也」と言う。別途考察する。「矛」は「柔」である。『説文』は、「柔」は意符「木」と声符「矛」からなると言う。劉釗[213]は、「矛」は「柔」の省文と言う。白於藍[214]も「矛」と「柔」の通仮関係を認めている。この（4）における漢字の通仮関係はこの部分が『毛詩』からの引用であることにより解明されたと考える。内容については第肆章第二節参照。

第二十一章

---

207 白於藍一〇八九頁参照。
208 禤二四八頁参照。
209 裘錫圭「釈“弘”“强”」（『古文字論集』、中華書局、一九九二年、第五十八頁、李家浩を引く）（未見）
210 馬王堆『五行』裘錫圭六十八頁〔八四〕参照。
211 白於藍一〇八六頁参照。
212 白於藍一八三頁参照。
213 劉釗八十四頁参照。
214 白於藍一三八頁参照。

原文

君子集大城（成）。能進之為君子、弗能進也、各**定**（止）於亓（其）里。大而【四十二】晏（罕）者、能又（有）取安（焉）。少（小）而軫者、能又（有）取安（焉）。疋盧盧達者（諸）君子道、胃（謂）之臤（賢）。君【四十三】子智（知）而與（舉）之、胃（謂）之**隮**（尊）臤（賢）、智（知）而事之、胃（謂）之**隮**（尊）臤（賢）者也。後、士之**隮**（尊）臤（賢）者也。【四十四】

訓読

君子は集めて大城（成）す。能く之れに進めば、君子と為る。進むこと能わざれば、各々亓（其）の里に**定**（止）まる。大にして晏（罕）なる者は、能く安（焉）れに取る又（有）り。少（小）にして軫き者は、能く安（焉）れに取る又（有）り。疋（胥）［うかが］うこと儘儘として、君子道に達す、之れを臤（賢）と胃（謂）う。君子智（知）りて之れを與（舉）ぐ、之れを臤（賢）を**隮**（尊）ぶと胃（謂）う。智（知）りて之れに事う、之を臤（賢）を**隮**（尊）ぶ者と胃（謂）う。後は、士の臤（賢）を**隮**（尊）ぶ者なり。

口語訳

君子は一つに集めて大きく完成させる。〔端緒である仁・義などを〕進めることができれば君子となることができるが、それらを進めることができなければそれぞれの里〔能力に応じた自分の立場〕に止まる。大きいけれども頻繁には起こらない事件に対する態度〔義〕から、端緒をつかみ取って拡充を行うこともできる。小さくて頻繁に起こる事件に対する態度〔仁〕から、端緒をつかみ取って拡充を行うこともできる。それらを見る姿勢がひたむきであれば、君子道に到達することができるが、このような者を賢人と呼ぶ。

君子が賢人を知って登用することが、賢人を尊ぶことである。また、〔士が〕賢人に従って師事することも、賢人を尊ぶことである。後者は、士が賢人を尊ぶ尊び方である。

注

（1）君子集（集）大城（成）。能進之為君子、弗能進也、各**定**（止）於亓（其）里。

「集」は「集」に「宀」を加えた「**集**」[215]である。「宀」は飾筆ないし「増繁無義偏旁」で特に意味に影響はない。「**定**」はここでは「止」とする。「里」については「五行」の最終地点である「聖」に至るまでの「仁」「義」「禮」「智」を指すと考える。

（2）大而晏（罕）者、能又（有）取安（焉）。少（小）而軫者、能又（有）取安（焉）。疋盧盧達者（諸）君子道、胃（謂）之臤（賢）。

「安」は「焉」とする。白於藍[216]は「安」と「焉」の通仮関係を認めている。「疋」は別途考察する。「疋」は「胥」とし、意味を「見る」とする。第参章第一節の五を参照。「盧盧」は、「𠂤」に重文符号が付されている。「虍」と「胃」で構成されている。「胃」の上部「田」に関しては「目」との混同が西周・春秋・戦国期に見られる。この字は「膚膚」となるが、劉釗[217]のように『荀子』非十二子篇の「勞苦事業之中、則憶憶然、離離然、偷儒而罔、無廉恥而忍諉詬、是學者之鬼也」を根拠としこの「努力しない貌」を表す「憶憶」から引申して「容易である」とする説と、池田[218]のように「盧盧」を「犬を呼ぶ声」とし「「君子道」を熱心に求める様子」とする説がある。池田に従っておく。「者」は「諸」とする。金文では「者」を用いて「諸」を表していた。白於藍[219]は「者」と「諸」は通仮関係にあると言う。

（3）君子智（知）而與（舉）之、胃（謂）之**𨺅**（尊）臤（賢）、智（知）而事之、胃（謂）之**𨺅**（尊）臤（賢）者也。

「與」は「舉」とする。『説文』は、「舉」が「手」を構成要素とし、声符は「與」と言う。「與」は｛舉（推挙）｝の意味を表す字の初文であるとされる[220]。（本論文の第弐章訳注篇第二十五号簡該当箇所参照。）

（4）後、士之**𨺅**（尊）臤（賢）者也。

---

215 『古漢字発展論』四二二頁参照。
216 白於藍一二五四頁参照。
217 劉釗八十五頁参照。
218 池田一七二頁（2）参照。
219 白於藍三二三頁参照。
220 禤一八三頁参照。

池田[221]は馬王堆『五行』を根拠にして「前、王公之**障**（尊）臤（賢）者也。」を追加している。

第二十二章

原文

耳（官・目）鼻（鼻）口手（手）足（足）六者、心之**返**（役）也。心曰唯（唯）、莫敢不唯、如（諾）、莫敢不如（諾）【四十五】進、莫敢不進、後、莫敢不後、宋（深）、莫敢不宋（深）、**澹**（澹・淺）、莫敢不**澹**（澹・淺）。和則同、同則善。【四十六】

訓読

耳（官・目）鼻（鼻）口手（手）足（足）の六者は、心の**返**（役）なり。心唯（唯）せよと曰えば、敢えて唯せざる莫し。如（諾）せよといえば、敢えて如（諾）せざる莫し。進めといえば、敢えて進まざる莫し。後けといえば、敢えて後かざる莫し。宋（深）くせよといえば、敢えて宋（深）くせざる莫し。**澹**（澹・淺）くせよといえば、敢えて**澹**（澹・淺）くせざる莫し。和すれば則ち同じ、同ずれば則ち善なり。

口語訳

人間の身体の耳目鼻口手足の六者は、心に使われる召使いである。心が服従せよと命じたならば、服従しないと思うことはない。〔心が〕承知せよと命じたならば、承知しないと思うことはない。〔心が〕進めと命じたならば、進まないことはない。〔心が〕退けと命じたならば、退かないことはない。〔心が〕深くせよと命じたならば、深くしないことはない。〔心が〕浅くせよと命じたならば、浅くしないことはない。〔耳目鼻口手足の六者と心が〕調和・統一されるならば、それらは一体となり、一体となれば、それが善となる。

注

221 池田一七三頁参照。

（1）耳（官・目）（鼻）口（手）（足）六者、心之（役）也。心曰（唯）、莫敢不唯、如（諾）、莫敢不如（諾）。

「」は「目」の上に「宀」を加えた「官」[222]に作る。「目」の異体字とみる。「」は「鼻」で、下部が「火」に見える。「矢」が変形したものか検討する必要があるが、隷定としては「鼻」で問題ないと考える。「」は『説文』の「手」の項に見える古文の「（孥）」と同じである。「」は「足」で、第四十三号簡の「（疋）」に似ているが、「口」と「○（円形）」の違いがあり、それぞれ「足」「疋（胥）」とする。「」は「役」とする。劉釗[223]は「」は「辵」と「」を構成要素とし、「」は「殳」の錯体と言う。「（唯）」は「口」が「隹」の下にあり「售」のように見えるがこれは「唯」の異体であり、「唯」とする。『古漢字発展論』[224]に、「「隹」と「唯」の使用時期は前後しているため、両者が分化関係をもつ可能性もあり、その場合二字は古今字の関係である」とあることにも留意されたい。「如」について郭店簡釈文、池田、李零、劉釗、陳偉等[225]は「諾」の通仮字とする。意味は「承諾」。しかし「如」には、『説文』に「如、從隨也」とあり、この字自身が「従う」の意を持つ。通仮字とせずともこの「従う」の意で郭店『五行』のこの部分も解釈できる。「敢」の古文は「𢽾」である。小篆や楚系文字には「𢽾」の字形が見えているが、秦系文字では「敢」の字形に従っている。そのため「敢」は秦系文字である可能性もある。『古漢字発展論』[226]は、「敢」字について、秦の詛楚文に見られる「敢」字の字体は西周金文の字体を基本的に継承していると言い、『説文』の小篆にある「𢽾」の字体は楚系文字に基づくものであろうと述べている。

（2）進、莫敢不進、後、莫敢不後、宋（深）、莫敢不宋（深）、（澎・淺）、莫敢不（澎・淺）。和則同、同則善。

「進」は「前進」の意、「後」は「後退」の意である。「宋」は「深」とする。『古漢字発展論』[227]に、「宋」は「深」で、意符「宀」と

---

222 劉釗八十五―八十六頁参照。

223 劉釗八十六頁参照。

224 『古漢字発展論』二九九頁参照。

225 郭店簡釈文一五一頁、池田一七四頁（1）、李零八十頁、劉釗八十五―八十六頁、陳偉等五十頁参照。

226 『古漢字発展論』六二〇頁参照。

227 『古漢字発展論』四五八頁参照。

声符「水」からなる会意文字であると言う。「[illegible]・[illegible]」は「澨」と隷定する。「澨」は「淺」字である。禤[228]は、楚簡では〔淺〕は、多く「[illegible]」「[illegible]」に作ると言う。また、楚簡〔察〕〔窃〕などの音義で使用される字は「[illegible]」を構成要素とするが、「[illegible]・[illegible]」の右部分はこの「[illegible]」とは少し違うと言う。第二十章注（1）で述べたように「[illegible]」は「㾓」の訛変である。禤は「㾓」の変化について「[illegible]（㾓）」→「[illegible]」→「[illegible]」となっていることを言う。詳細は第参章第一節の一を参照。

第二十三章

原文

目而智（知）之胃（謂）之進之。

訓読

目して之れを智（知）るは、之れを之れを進むと胃（謂）う。

口語訳

比較対照することによって対象を知ることができるのを、進めると言う。

注

（1）目而智（知）之胃（謂）之進之。

「目」の意は劉釗[229]に従って「比較対照する」意とする。後の「**窗**」「辟」と関係する。

---

228 禤二四六―二四七頁参照。

229 劉釗八十六頁参照。

第二十四章

原文

窗〈喻〉而智（知）之胃（謂）之進之。

訓読

窗〈喻〉して之れを智（知）るは、之れを之れを進むと胃（謂）う。

口語訳

はっきりと諭して知ることができるのを、進めると言う。

注

（1）**窗**〈喻〉而智（知）之胃（謂）之進之。

「**窗**」は「喻」とする。池田[230]は「**窗**」は郭店簡釈文を参照の上、「俞（喻）」の錯字としている。劉釗[231]は「**窗**」は「宀」「剖」から構成されており、「剖」は「喻」字の変体と似ており、「喻」と読み為すと言う。意味は「曉喻（はっきりとさとす）」と言う。

第二十五章

原文

辟（譬）而智（知）之胃（謂）之進之。【四十七】

---

230 池田一七六―一七七頁（1）参照。

231 劉釗八十六頁参照。

訓読

辟（譬）えて之を智（知）るは、之を之を進むと謂う。

口語訳

譬えを用いて対象を知ることができるのを、進めると言う。

注

（1）辟（譬）而智（知）之胃（謂）之進之。

「辟」は『礼記』中庸篇の「君子之道、辟如行遠必自邇、辟如登高必自卑」と同じで「たとえる」の意である。「譬」（『説文』さとす。意符「言」と声符「辟」からなる。）と通仮[232]する。

池田[233]は、第二十三章「目」、第二十四章「喻」第二十五章「辟」を墨家の論理学と関係するとしている。特に「目」については『墨子』小取篇「侔也者、比辭而俱行也」の使用法と同じ意としており、また「辟」は同じく『墨子』小取篇「辟（譬）也者、舉也（他）物而以明之也」と同じ意とする。墨家集団と郭店『五行』の関係については待考としたい。

第二十六章

原文

幾而智（知）之、天也。「上帝𢍰（𢍰・賢）女（汝）、毋戌（貳）尒（尓）心」、此之胃（謂）也。

---

232 白於藍七二五頁参照。

233 池田、一七五―一七六頁（1）、一七六―一七七頁（1）、一七七―一七八頁（1）参照。

訓読

幾して之れを智（知）るは、天なり。「上帝女（汝）を𢍰（𢍰・賢）とす、尒（尓）［なんじ］の心を戍（貳）つにする毋かれ。」、此れの胃（謂）いなり。

口語訳

ものごとが兆した段階でそれを知ることができるのは、天である。〔『詩』に〕「上帝があなたを賢者にするのだから、あなたは心を二つにしてはならぬ。」とあるのは、こういう意味である。

注

（1）幾而智之、天也。

「幾」は、『説文』に「微也、殆也、从幺从戍」とあり、「かすかな前ぶれ・きざし」、「あやうい」等の意があり、「幺（＝かすか）」と「戍」で構成されると言う。意味は、『周易』繫辞下に「君子見幾而作」とありその孔類達の注が「機微」と言うように、「きざし」の意である。

（2）「上帝𢍰（𢍰・賢）女（汝）、毋戍（弍・貳）尒（尓・爾）心」、此之胃（謂）也。

「𢍰」字は『古漢字発展論』[234]に「賢」の増繁同形であると言う。「賢」字の下部「貝」がここでは「子」になっていることについて、禤[235]は、楚簡では〔賢〕は「臤」や「孯」を用いて記すと言う。この部分を『毛詩』大雅文王之什大明篇「上帝臨女、無貳爾心」からの引用と考え、郭店簡注の裘錫圭[236]をはじめとして「𢍰」は「臨」の誤写とするが、「賢」字と見てよいのではないか。仁義などの兆しを

---

234 『古漢字発展論』四一六―四一七頁参照。「増繫同形とは、追加したある偏旁や筆画と追加された元の字形が持つ偏旁や筆画とが同じであり、かつ該当字の記す音義に何の変化も生じなかった現象をさす」と言う。

235 禤三四八―三四九頁参照。

236 郭店簡一五四頁〔六四〕参照。裘按「恐らく「臨」の誤写だろう」以降の学者はこれに従う。

捕まえて第四十三号簡などに見える「賢」者となることを指すと考える。郭店『五行』の作者が、この『詩経』の本文の「臨」を「賢」に意図的に書き換えたとすれば、経書を絶対視する考えは希薄である。「**戌**」は「弍」で「貳」とする。「戌」字は斧鉞の形を象るが、これは「戈」字と同じ武器であるため、「戌」「戈」の偏旁は通用することができる。『説文』は、「貳」は「貝」を構成要素とし、声符は「弍」、「弍」は「二」の古文であると言う。「尒」は「尔」の古字で、両字とも「爾」の上部の構成要素である。「尒」「尔」と「爾」は本来同じ字である。古くから「汝」と通仮したが、春秋期以降「汝」は主として主語・目的語に「尒（尔・爾）」は主として他の名詞を修飾する際に使用されるようになった。現在「尔」は「爾」の簡体字である。

第二十七章

原文

大**𡉚**（施）者（諸）亓（其）人、天也。亓（其）【四十八】人**𡉚**（施）者（諸）人、**儘**也。

訓読

大いに亓（其）の人に**𡉚**（施）すは、天なり。亓（其）の人、人に**𡉚**（施）すは、**儘**なり。

口語訳

しっかりとその人にこれ〔仁・義などの五行〕を賦与することは、天である。その人が他の人々にこれ〔仁・義などの五行〕を施すことは、**儘**（習）である。

注

（1）大**𡉚**（施）者（諸）亓（其）人、大也。

「𡑞」は「施」と読む。禤[237]は〔施〕は楚簡では「貽」（「貝」と声符「它」が構成要素）に作り、これは「施予（ほどこす）」意の専用字であると言う。また〔施〕は楚簡で「它」に直接仮借して作るものも見られると言う。郭店『五行』の「𡑞」は楚系文字では本来〔地〕の意で用いられる字であると言う。しかしここでは「施」の通仮字[238]である。「𡑞」「施」はともに声母は歌部である。「大」は馬王堆『五行』を根拠に「天」の錯字とする説[239]があるが、「大」字のままで意味が通るため取らない。

（2）亓（其）人𡑞（施）者（諸）人、 （𠊱）也。

「 」字について、李零[240]は「狎」とする。「人」「𠊱（「甲」古字）」「皿」で構成されているとし、音が近いため「狎」とすると言う。また「狎」「習」は音義が近く、古くは常にこの二字は互訓していたと言う。劉釗[241]は、「𠊱」は「𠊱」をその要素とすると言い、この「𠊱」は「皋甲」の「甲」で、「狎」と読み為し、その意味は「習」であると推測している（「狎」訓為「習」）。馬王堆『五行』裘錫圭[242]は、郭店『五行』の「 」字を「𧊒」に隷定する。

第二十八章

原文

聳（聞）道而兌（悅）者、好 （仁）者也。聳（聞）道而畏者、好【四十九】義者也。（聳・聞）道而共（恭）者、好豊（禮）者也。聳（聞）道而𤔲（樂）者、好悳（德）者也。【五十】

---

237 禤二八六―二八七頁参照。

238 白於藍四四九―四五〇頁参照。

239 池田一八〇頁（1）参照。

240 李零八十一―八十二頁二十七章参照。

241 劉釗八十七頁参照。

242 馬王堆『五行』裘錫圭六十九頁〔一〇三〕参照。

訓読

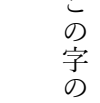
道を聳（聞）きて兌（悅）ぶ者は、𢘓（仁）を好む者なり。道を聳（聞）きて畏（威）ある者は、義を好む者なり。道を聳（聞）きて共（恭）しき者は、豊（禮）を好む者なり。道を聳（聞）きて𤔲（樂）しむ者は、悳（德）を好む者なり。

口語訳

道を聞いて悅ぶのは、仁を好む者である。道を聞いて威厳があるのは、義を好む者である。道を聞いて恭しく振る舞うのは、禮を好む者である。道を聞いて楽しむのは、徳を好む者である。

注

（1）聳（聞）道而兌（悅）者、好𢘓（仁）者也。聳（聞）道而畏者、好義者也。 （聳・聞）道而共（恭）者、好豊（禮）者也。聳（聞）道而𤔲（樂）者、好悳（德）者也。

「 」の隷定は「聳」で「聞」としておく。郭店『五行』に見える「聳」の中でこの字のみ「采」「亦」で構成されている。李零[243]は「  」の上部は乱雑に筆写しており、下部は「亦」字に似ていると言う。

▼「者」字について

郭店『五行』において「者」字は様々な字形で記されている。たとえば「 （第十九号簡）」「 （第二十号簡）」「 （第四十三号簡）」「 （第四十五号簡）」「（第四十九号簡）」等である。『古漢字発展論』[244]は、「楚系文字の「者」字には多くの形体があり、地域的特徴がある」と言う。

---

243 李零八十四頁（五）参照。

244 『古漢字発展論』五〇八―五〇九頁参照。

第参章　漢字の隷定における問題点

本章では、先秦期における漢字使用の実態に即しつつ、現在における漢字体系からは理解しにくい文字でかつその解釈が諸家により統一されていないものを取り上げ、郭店『五行』における解釈をどう考えるべきかについて検討する。そもそも漢字の発展の歴史の中では、一字多語の問題がある。戦国期にあってはこれ以外にも漢字の字数が現在ほど豊富ではなく、また引伸義や仮借字・異体字の問題もあり、その字がどういう意味か確定しにくい場合がある。例を挙げると、『論語』学而第一において、「子曰、學而時習之、不亦說乎」があり、この中の「說」はここでは「よろこぶ」という意味で使われている。この「兌」「說」「悅」の系統の字は、古くは「兌」字によって「悅（よろこ）ぶ」「說（はな）す」などの意味を表していた。しかし「說」が作られ「悅（よろこ）ぶ」「說（はな）す」を表すようになり、さらに漢代には「悅」字が作られ「よろこぶ」意の専字になった。『論語』成立時点では「悅」字がないので「說」が使われている。なお、楚簡では「悅（よろこ）ぶ」意は「兌」や「攸（敓）」などで表される。現行本『論語』が「悅（よろこ）ぶ」意の「說」字を使用しているのは、字が改められているのか、あるいは『論語』の成立が新しいからであろう。

このような漢字の字語問題、つまりある語（音と意味）にどの漢字を当てるかという問題、具体的には｛悅｝（よろこぶ）について「兌」、「說」、「悅」、「敓」のどの字（字形）を選択するかという問題は秦の文字統一の際にも課題でもあった。我々が使用する漢字体系における字語関係は先秦期とは大きく異なるため、この差異が先秦期のテキストの読解を困難にしている。本章においては、現状における出土資料の字語関係に関する先行研究を最大限利用して郭店『五行』の問題の箇所について検討を行い、当時の実態に即した解釈を明らかにしたい。

第一節では、文字統一により使用されなくなり淘汰された字の中から、郭店『五行』の諸注釈が混乱しているものを取り上げ、その字の変遷と郭店『五行』における意味について検討する。

第二節では、郭店『五行』において体の器官、具体的には「目」や「耳」に関係する会意文字について一群の同源関係にある字を取り上げ、その使用実態について検討する。

第一節　楚系文字の淘汰（文字統一と秦系文字の出現）

先秦期には、漢字の字形に地域性が見られた。本稿で取り扱う郭店『五行』には竹簡の出土量が最も多い「楚」の国の文字が使われている。他の六国にもそれぞれ特色ある文字が使われていた。秦は統一後、文字統一を行ったが、それは各国で様々に分化した字を統一しなければ国の運営が立ち行かなくなったためである。その文字は小篆と呼ばれ、さらに小篆を簡略化した秦隷も作られ、この秦隷が漢代の隷書に発展していく。この節では、楚簡に見える文字中、文字統一の後使われなくなった文字で解釈が混乱しているものについて、秦系文字と比較しつつその変遷の道筋をたどっていくものとする。

たとえば、「聞」について見てみると、甲骨文では「 」に作り人が耳をそばだてる様をかたどり、これをうけて金文も「 」に作る。楚文字になると音符の「釆（蒲莧切）」を加えて「（聳ないし聳）」に作るものが登場する。しかし、秦の文字統一によりこの音符「釆（蒲莧切）」も放棄され、音符「門」が採用され「（聞）」が主流となり、現在に至るまでこの字が使用されている。「 」の上部の「米」状の偏旁が「釆」であることは加藤常賢が三体石経を基につとに指摘していたが、楚系文字の出現によって再確認されたかたちである。本節では文字統一により淘汰された文字で様々な郭店『五行』の注釈が混乱しているものについて取り上げ、その変遷と郭店『五行』における意味について検討する。

一　察（ （楚系文字）・察（秦系文字）

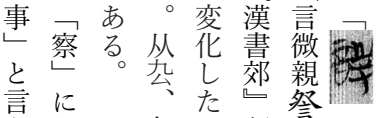
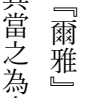
「 （）」と「 （ ・ （辛））」は、前漢期の馬王堆『五行』経の同じ個所が「察」に作るので、「察」の仮借字または異体字とされている。郭店『五行』では〔察〕を表す字は以下の四箇所で使用されている。

1、思不清不（・察）、思不倀（長）〔不得、……【第八号簡】

2、（仁）之思也清、清則（・察）、（）察則安、安則恩（溫）、……【第十二号簡・第十三号簡】

3、不東〈柬（簡）〉、不行。不匿、不（・（辛））（察）於道。【第三十七号簡・第三十八号簡】

4、又（有）少（小）辠（罪）而弗亦（赦）也、不（・（辛））（察）於道也。【第三十九号簡】

「  （譥）」字は徐在国『戦国文字字形表』（上海古籍出版社、二〇一七年）では「𧶠」とされる。「𧶠」字は『説文解字』では「言微親𧶠也。従言察省声（言微かなるに親から察らにするなり。言に従い察の省声）」と不明な点を明らかにすることを言うとされ、『漢書郊』祠志の注が「張揖曰、𧶠古察字」と言うように「察」の古文とされている。旁を構成する「𦍒（辛）」は襑[245]によれば「𠯑」の変化したものとされる。「𠯑」は説文では「蟲也。从厶、象形」とあり、その古文は説文によれば「  」に作る。同じく説文が「蟲也。从厶、象形」と言う「萬」字の訛変とされる。確かに「𠯑（）」の古文「」と「（萬）」は形が近い。なお「𦍒」とは別字である。

「察」については、徐鍇『説文解字繫傳』は「察覆審也、従宀祭声」と言い、『爾雅』釈詁も「察、審也」と言い、「繰り返し詳しく調べる事」と言う。『荀子』不苟篇「君子行不貴苟難、說不貴苟察、名不貴苟傳、唯其當之為貴。」の「察」の久保愛の増注も「察、精察也」と言い、詳細な分析検討の意と言う。なお、金文では弭叔師察簋に見える「」が唯一「察」とされるが、字形は「宀」に「帛」で郭店『五行』が表す〔察〕の字形とは異なる。「察」字は秦系文字であろう。

二　（（楚系文字）・就（秦系文字））

「」は、劉釗は「」に隷定する。この「」は『説文解字』の「就」の項に「就高也。従京従尤。尤、異于凡也。就籀文就」に見える「就」の籀文「就」の偏側とおおむね一致する。襑は、郭店『五行』に見える「」について「多将字之上下両部分簡化糅合」と述べ、「」の簡略字体とする。朱徳熙「釋」（『朱徳熙古文字論集』中華書局、一九九五）も「是就字」と言う。これに従う。「（）」字は、秦系文字である「就」字の戦国期以前の字体とする。「（）」は、郭店『五行』では以下の三箇所で使用されている。

---

[245] 襑　五十六頁参照。

1、𢘓（仁）之思也清、清則察、察則安、安則恩（溫）、恩（溫）則兌（悅）、兌（悅）則𠂔、𠂔則新（親）、新（親）則𠂔（愛）、𠂔（愛）則玉色、玉色則型（形）、型（形）則𢘓（仁）。【第十二号簡・第十三号簡】

2、不弁、不兌（悅）、不兌（悅）不𠂔、不𠂔不新（親）、不新（親）不悉（愛）、不悉（愛）不𢘓（仁）。【第二十一号簡】

3、宀（中）心兌（悅）𨑓（播）𨑓・𨑓（遷）於兄弟、𠂔也。𠂔而信之、新（親）。新（親）而𥫔（篤）之、悉（愛）也。【第三十二号簡・第三十三号簡】

郭店『五行』が「𠂔」に作る箇所は、馬王堆『五行』は「戚」に作っている。「𠂔（𠭯）・就」と「戚」の通仮については、古くは朱德熙が「卜辭用𠭯為地名、𠭯應讀為戚、就是公孫敖與晉襄公相会的戚」と甲骨文における通仮を述べ、白于藍も両字の通仮を認めている。問題は「戚」字の意味である。「戚」字は1では、仁を思う思い方が精細であれば仁があきらかとなり、仁が明らかとなれば心が安らかとなり、心が安らかになれば容貌がおだやかとなり、容貌がおだやかになれば喜びを感じる、に続く部分にあり、「戚」であれば親密になると続く部分に使用されている。2および3においても、1と同じく悅びと親しみの中間に位置する状況で使用されている。『孟子』告子下篇に「固哉、高叟之為詩也。有人於此。越人關弓而射之、則己談笑而道之。無他、疏之也。其兄關弓而射之、則己垂涕泣而道之。無他戚之也。小弁之怨、親親也。親親仁也。固矣夫、高叟之為詩也」とありこの「戚」について趙起注が「戚親也」と言うように、「戚」は親しむ意とする。なお、『尚書』金縢編に「既克商二年、王有疾、豫。二公曰、「我其為王穆卜。」」周公曰、「未可以戚我先王。」」とあり、「戚」に対する孔安国の傳の「近」も参考になる。

郭店『五行』に見える「𠂔」は秦系文字である「就」の戦国期の楚文字の字形で、卜辭や金文に見える「𠭯」を継承する簡略字体で、楚簡においては{戚（親しむ）}意を表す。

三　聞（𦔻）（𦔻、実際は「𦔻」、以後すべて「𦔻」にする[246]）（楚系文字）・聞（秦系文字））

---

246 季旭昇『説文新證』（福建人民出版社、二〇一〇年）八十六頁参照。

「采」字について「戰國秦漢以後與“米”字字形混淆」と、戦国秦漢以降「采」と「米」が混淆したことを言う。

「聞」は、『説文』によれば「知聞也、従耳門声」と「耳」を構成要素とし、声符は「門」の形声文字である。しかし、郭店『五行』の〔聞〕は以下の通り「米」状の偏旁をその構成要素とするものが多い。

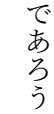
1、聰則聳（聞）君子道、（聳（聞）君子道）則玉音、玉音則型（形）、型（形）則聖。【第十五号簡・第十六号簡】
2、未尚（嘗）聳（聞）君子道、胃（謂）之不聰（聰）。【第二十二号簡・第二十三号簡】
3、聳（聞）君子道而不智（知）亓（其）君子道也、胃（謂）之不聖。【第二十三号簡・第二十四号簡】
4、見而智（知）之、智也。聳（聞）而智（知）之、聖也。
5、聳（聞）君子道、聰（聰）也。聳（聞）而智（知）之、聖也。聖人智（知）而〈天〉道也。【第二十六号簡・第二十七号簡】
6、聳（聞）道而兌（悅）者、好息（仁）者也。
7、聳（聞）道而畏者、好義者也。【第四十九号簡・第五十号簡】
8、 （聳・聞）道而共（恭）者、好豊（禮）者也。【第五十号簡】
9、聳（聞）道而𦤎（樂）者、好悳（德）者也。【第五十号簡】

以上8を除きすべて「米」状の偏旁に従っている。郭店簡注[247]は、この字形は『汗簡』の「聞」字、『古文四聲韻』の『古老子』や『古尚書』の「聞」字と同じと言う。聞（聳（聳））は郭店『五行』においては、文脈的にはすべて「道を聞く」「君子道を聞く」など理想的なあり方について聞くと言う意味で使用されている。「聞」について見てみると、甲骨文は「 」に作る。人が耳をそばだてる様をかたどり、隷定すれば「𦣞」となろうか。金文も「 」に作る。金文期まではこの字そのものには音を表す部分がなく、春秋期以降になると音符を加えて形声文字化する傾向が高まり、楚文字においても音符の「昏（昏）（呼昆切、あるいは彌鄰切）」「釆（蒲莧切）」を加えた「 」「聳（聳）」に作られるようになる。しかし、秦の文字統一により音符「釆（蒲莧切）」を要素とする〔聞〕を表す文字が放棄され、声符「門（莫奔切）」を要素とする「 （聞）」となり、現在に至るまでこの字が使用されている。「聳」の上部の「米」状の偏旁が「釆」であるこ

247 郭店簡一五二頁〔一六〕参照。

とは加藤常賢[248]が （三体石経）を基につとに指摘していたが、楚系文字の出現によって再確認されたかたちである。

四　 （遙（楚系文字）・肆（秦系文字））

李零は「遙」字を「肆」と隷定する。劉釗もこれに従う。「肆」は、『説文』は「肆、極陳也、从長、隷聲」と言い、極めるおよび、陳列する意とする。この字は甲骨金文では「希」を要素とする「肆（肆）」に作る。「肆（肆）」は『説文』は「肆（肆）、習也、从聿、希聲。……肆、篆文肆」と言う。「肆」と「肆（肆）」は本来同一字の異体関係にあるのであろう。郭店『五行』が「希」を構成要素とし「遙」に作っているのも「肆（肆）」の要素が「希」であることと一致する。李零に従う。その後「遙」「肆」は、傳世文献においては秦系文字である「肆」に置き換えられていると考えられる。ただ馬王堆『五行』はこの箇所を「肆」に作らず「迣」とする点については音が近いからであろうが、今後の課題とする。「  」は、郭店『五行』では以下の二箇所で使用されている。

1、不悳（德）不遙（肆）、不遙（肆）不果、不果不柬（簡）、不柬（簡）不行、不行不義。【第二十一号簡・第二十二号簡】

2、宰（中）心詖（辨）肰（然）而正行之、植（直）也。悳（德）而述（遂）之、遙（肆）也。遙（肆）而不畏彊（強）語（禦）、果也。不以少（小）道害（害）大道、柬（簡）也。又（有）大辠（罪）而大戠（誅）之、行也。貴貴、亓（其）𨑓（等）𨺅（尊）叡（賢）、義也。【第三十三号簡―第三十五号簡】

「肆」は傳世文献では「殺」・「祭」・「蔡」などの意として使用される。『廣雅』釋詁は、「肆、殺也」と言い、『毛詩』大雅・皇矣篇の「是伐是肆」の「肆」は『鄭箋』が「犯突（立場を犯す）」と言うように「伐」とほぼ同意。また『毛詩』小雅楚茨篇の「濟濟蹌蹌、絜爾牛羊、以往烝嘗。或剝或亨、或肆或將」の「肆」は『毛傳』が「陳」と言うように「（殺して）陳列する」意、『論語』憲問篇の「肆

248 加藤常賢『漢字の起源』（角川書店、一九七〇年）八三四頁参照。形声文字である「聞」が声符「采」を「門」に交換することに関して、「「無分切」（ブン）である。「門」「」「采（はん）」「昏」がこの声を表す。この声の表す意味は、「采」（弁別する）字が最もよく意味を表している。」と言う。

諸市朝」の「肆」について皇侃の疏も「肆、殺而陳尸也」と言う。『毛詩』小雅信南山篇の「祭以清酒、從以騂牡、享于祖考」の「祭」にも祭祀を行う意の中に供物を陳列する意を含む。「祭」「蔡（＝殺）」及び秦系文字である「肆」は祭祀にあたり供物を殺し陳列する意は共通する。「蔡」及び「殺」の古文がともに「（希）」であることをもこれを傍証する。これ以外に、金文においては「肆（肆）」字は「恣縱・放肆（勝手気ままに振る舞う）」の意があるとともに、語気助詞としても使用されている。1では「直（まっすぐな気持ちを持つことが）」「遙」につながるとされる。また、2でも「直」を基礎にしてそれを完成させることが「遙」につながるとされる。「遙」の意味は勝手気ままに行うと言うよりは、まっすぐな気持ちが自由に考えることにつながると考えているとしておく。「 」字は、秦系文字である「肆」字の戦国期以前の字体でその意味は「自由に行動すること」とする。

五　胥

第四十三号簡に「（疋）」が見える。

君子集大城（成）。能進之為君子、弗能進也、各止於丌（其）里。大而晏（罕）者、能又（有）取安（焉）。少（小）而軫者、能又（有）取安（焉）。疋盧盧達者（諸）君子道、胃（謂）之臤（賢）。君子智（知）而與（舉）之、胃（謂）之**隮**（尊）臤（賢）、智（知）而事之、胃（謂）之**隮**（尊）臤（賢）者也。後、士之**隮**（尊）臤（賢）者也。【第四十二號簡―第四十五号簡】

「（疋）」は「（足）」と似ているが、「口」と「○（円形）」の違いがあり、それぞれ「足」「疋（胥）」とする。甲金文の「足」と「疋」は同字である。戦国文字から分化が始まった。季旭昇は、「足」の上部は「口」形に作り、「疋」字の上部は円形または「マ」形に作ると言う。『説文』は「疋、足也。上象腓腸、下从止。『弟子職』曰、問疋何止。古文以爲『詩』大疋字、亦以爲足字、或曰胥字。一曰、疋、記也。凡疋之屬皆从疋」と言う。

郭店『五行』第四十三号簡「疋」をどう読むかは諸氏で意見が割れている。池田[249]は、「疋」が「疏」の省字または異体字で、「搜」に

[249] 池田一七二頁参照。

「仮借（原文ママ）」して読む。李零[250]は、「胥」とする。劉釗[251]は「疋」とする。白於藍[252]は馬王堆『五行』経を根拠に「索」、または馬王堆『五行』の説を根拠に「衡」とすると言う。裘錫圭[253]は、これらの「疋」「索」「衡」は古音が近いためそれぞれ通じることができると言う。また、郭店『五行』の「疋」とは関係はないが、一説として、禤[254]は、楚簡では「疋」字を用いて〔疏〕を記し、また「疋」字は「胥吏（小役人）」の意で〔胥〕をも表すとも言う。さらに関連して、『釈名』は「疏、策也」と言い、「疏」を「索」の意とする。このように、「疋」は①「捜」②「胥」③「疋」④「索」⑤「衡」⑥「疏」等の説がある。李零の「胥」に従う。「疋」と「胥」は異体字の関係にある。

『毛詩』大雅生民之什公劉篇に「篤公劉、于胥斯原、既庶既繁、既順迺宣、而無永歎、陟則在巘、復降在原、何以舟之、維玉及瑤、鞞琫容刀」とある。毛伝は「胥、相」と言い、これは「視察する」「うかがう」という意である。郭店『五行』第四十三号簡では、この意を用いて解釈する。同じ楚簡の中では、『清華大学蔵戦国竹簡（三）』芮良夫毖篇で「疋（胥）收（糾）疋（胥）由、疋（胥）𣪘（穀）疋（胥）垕（均）」とあり、注釈で『爾雅』釋詁の「胥、相也」を引く。

第二節　字の隷定

第二節では、郭店『五行』において体の器官、具体的には「目」や「耳」に関係する会意文字について一群の同源関係にある字の使用実態について検討する。具体的には、「見」「視」及び「聖」「聲」「聽」についてその使用実態を検討していく。

---

250 李零八十頁参照。
251 劉釗八十五頁参照。
252 白於藍三二一頁参照。
253 馬王堆『五行』裘錫圭六十八頁〔八七〕参照。
254 禤二九七頁参照。

一 （見）と（視）

郭店『五行』には「見」字と「視」字が混同して用いられている。「」「」「」といった形である。甲骨文において、「（見）」は、「目」と「卩」から構成され、「座って見る」ことである。「（視）」は、「目」と「人」から構成され、「立って見る」ことで「見」よりも積極的に注意深く見ることである。また『説文』は、「（見）」について「視也。从儿从目。凡見之屬皆从見」と言い、甲骨文と違い「見」は「儿（＝人）」から構成されている。「（視）」については「瞻也。从見示。眡、古文視。眂、亦古文視」と言い、「示」が追加されている。「視」について『説文』と同じ字形が確認できるのは、出土文献では『睡虎地秦簡』の「」である。また、『上海博物館蔵戦国竹簡』には、楚系文字「（視）」字に「示」が追加された「」が見える。如上のことから楚系文字では「見」と「視」が混同されていたことが推測される。例外はあるが楚系文字「視」は甲骨文「視」字と同じく「目」と「人」から構成された「貝人」字であり、「示」が追加されておらず「見」と区別しにくかったためであろうか。秦系文字では「示」を追加した「視」字を用いていたため「見」と「視」の混同がなくなり、秦の文字統一に際してはこの「示」を追加した「視」字が採用された。なお、郭店『五行』第二十三・二十四号簡に見える「」「」字は、上部が変わった形をしているが、恐らく「囧」字が「四」または「目」に訛変する[255]ことと関係があるだろう。

二 （聖）と（聲）

第九章の原文は次の通りである。

金聖（聲）而玉晨（振）之、又（有）悳（德）者也。金聖（聲）、善也。玉音、聖也。善、人道也。悳（德）、而〈天〉〔道也。唯〕又（有）悳（德）者、肰（然）句（後）能金聖（聲）而玉晨（振）之。【第十九号簡・第二十号簡】

ここでは「聖」字が〔聲〕の意で用いられている。郭店『五行』注の「聖」字はこの部分の「聲」字と全く同じである。

255 『古漢字発展論』三五一頁参照。

「聖」と「聲（声）」について、裘[256]は、秦系文字を用いる『睡虎地秦簡』において「聲」字を用いて｛声｝の意を表し、楚簡では「聖」字を用いて｛声｝の意を表したと言う。『古漢字発展論』[257]は、次のように言う。「「聽」の初文「耶」は、「耳」と「口」を構成要素とし、合わせて口で話し、耳で聞くと言う意味を表す。西周に至りさらに分化して「聖」字が現れるが、「聖」は「聽」の派生語であり、本義はまさに「聡」に近かったはずである[258]。「声」もまさに「耶」の同源分化字であり、おそらく聴覚が聡敏であることを「聖」と言い、そして耳で聴くものを「声」としたのであろう[259]」と言う。また、「この種の文字が多くの同源分化語を表すことに対する考察は、戦国期の用字の複雑性を解明することに寄与し、同時にまた漢語語彙の伝統系統を認識することに大きな意義を持つ」とも言う。『古漢字発展論』においても、裘錫圭[260]を引用し、「「聖」と「聽」は、同じ字から分化したもの」であると言い、さらに、「｛聖｝という語は｛聽｝という語から派生してきた語と考えられ、その本義はおそらく｛聡｝という語に近いと考えられる」と言う。以上により、郭店『五行』において「聖」と「聲」が同形であることは現在から見ると奇異であるが当時の文字使用としては全く問題ないと言える。

256 裘二八一頁参照。
257 『古漢字発展論』四六四―四六五頁参照。
258 裘錫圭『文字学概要』（商務印書館、一九八八年）一三二頁参照。
259 陳斯鵬『楚系簡帛中字形与音義関係研究』（中国社会科学出版社、二〇一一年）七十三頁参照。（未見）
260 裘錫圭著／稲畑耕一郎・崎川隆・萩野友範訳『中国漢字学講義』（東方書店、二〇二二年）二三七―二三八頁参照。

第肆章　思想史上における問題点

本章では、第弐章訳注篇での検討を踏まえ、従来とは解釈を変える必要がある点について議論していく。第三節では郭店『五行』と諸子百家の関係について議論していく。

第一節　「 （弁）」に関わる解釈

「弁」は、『説文解字』において見出し字に存在しない。ただ、「」字の項に或体（別体）の「（説文或體）」として登場している。「」字について『説文』は、「冕也。周曰、殷曰吁、夏曰收。従皃、象形、皮變切。（舁）籀文、従廾、上象形。（弁）或字」と言う。「」は「冕（かぶりもの）」の意で、「弁」は「」の異体字とされる。

郭店『五行』で、「弁」字に隷定される字は二箇所にある。一つ目は第二十一号簡「」字、二つ目は第三十二号簡「」字である。楚系文字において、「弁」字は上部「卜」「日」「八」、下部「又」から成る「」の字形が用いられている。「廾」字の省略した形が「又」である。たとえば、「」「」（包山簡）「」「」（郭店簡）「」「」「」「」（上海簡）等がそれである。この字形は、「史」「吏」「事」「使」の楚系文字である「」字とも字形が近い。たとえば「」「」（「史」包山簡）「」「」（「史」郭店簡）「」「」（「史」上海簡）（「吏」上海簡）「」（「事」包山簡）「」（「事」郭店『五行』第四十四号簡）「」「」（「事」上海簡）「」「」（「使」上海簡）等がそれである。『上海博物館蔵戦国楚竹書』文字篇[261]では、これらの字形が近いことについて次のように言う。「「吏（史）」と「弁」は同形である」「楚系文字で、「吏」「史」「使」は未だ分化していない」「楚では「使令」の「使」は多く「」に作る」「楚簡では「」字と「吏」は混同している」「「」字は皆隷定して「」に作る」等である。また禤[262]は、

---

261 李出奎、曲冰、孫偉龍編『上海博物館蔵戦国楚竹書（一―五）文字篇』（二〇〇七年、作家出版社）

262 禤二八八頁、四十六―四十七頁参照。

古文字で「史」「吏」「使」は本来一字で後に分化したと言う。また楚系文字では「[illegible]」字を用いて〔変〕を表しており、「[illegible]」字は「弁」字の古い形であるとも言う。李零[263]は、「変」字は〔使〕の意で用いられる「吏」字とは少し違いがあり、これは「[illegible]」「[illegible]」の二点があるかないかであるが、ただこの点は混乱が見られるとも言う。『金文形義通解』[264]は、「史」、「吏」、「事」、「使」等の字は本来一字で後に分化したと言う。これらをまとめると、次のようになる。「史」「吏」「使」及び「事」は元々同じ字であったが、後に分化していき、それぞれの字形が確立された。楚系文字で「弁」字と「史」「吏」「使」「事」はほぼ同じ形に見えるが、これは字形の変遷過程でたまたま同形になっただけであろう。

郭店『五行』の「[illegible]・[illegible]（弁）」字の箇所に戻る。ここでは「[illegible]・[illegible]（弁）」の意味が焦点となる。まずは、第二十一号簡「[illegible]」について見ていく。この箇所の原文は次の通りである。

不[illegible]不兌、不兌不[illegible]、不[illegible]不新、不新不悉、不悉不[illegible]

「[illegible]」以外の字について第弐章訳注篇第十一章を参照されたい。「兌」は「悅ぶ」、「[illegible]」は「戚しむ」、「新」は「親しむ」、「悉」は「愛する」、「[illegible]」は「仁」である。

「[illegible]」字について、池田[265]は「[illegible]」と作り、郭店簡注に従い「變」の仮借字とする。意味は「戀慕する」意とする。馬王堆『五行』でここは「[illegible]」に作る。李零[266]は「變」字に作る。劉釗[267]は「[illegible]」に作り「弁」とした上で「勉」の意とする。「勉」の意は「勉励（はげむ、力を尽くす）」とする。陳偉等[268]は釈文で「弁」に作り「變」と読み為す。注では、陳偉が「弁」は「弁」字そのままでも読むことが

---

263 李零八十一頁参照。
264 『金文形義通解　上』（中文出版社、一九九四年）六六五頁参照。
265 池田一五二―一五三頁参照。
266 李零七十九頁参照。
267 劉釗七十九頁参照。
268 陳偉等、釈文四十八頁、注五十四―五十五頁参照。

でき、或いは「昇」の省略形と考えてもよく、「喜楽貌（喜楽の様子）」と解釈できると言う。諸氏の間で見解が一致しない。

次に第三十二号簡「[illegible]」について見ていく。原文は次の通りである。

顔色伀仪恩[illegible]也。以亓宀心與人交、兌也。宀心兌重𤇾於兄弟、𡨦也。𡨦而信之、新。新而𥫔之、悉也。悉父、宀亓秡悉人、息也。

「[illegible]」字以外についての詳細は第弍章訳注篇第十七章を参照されたい。「伀仪」は「容貌」、「恩」は「溫やか」であり、「重」は「然」または「焉」、「𤇾」は「遷す」、「𥫔」は「篤い」、「秡」は「稽（およ）ぶ」である。

「[illegible]」字についてはそれぞれ第二十一号簡と同じく解釈している。池田[269]は「𠬝」に作り「變」として「戀う（思い慕う）」意としている。李零[270]は「變」とする。劉釗も「𠬝」に作り「弁」とした上で「勉」の意とする。「勸勉（導き励ます、励みつとめる）」の意で、勸勉の際容色は必ず温和で平易なものになると言う。陳偉等[271]は釈文で「弁」に作り「變」と読み為す。第二十一号簡の注で、この第三十二号簡も同じく、「弁」は「弁」字そのままで読むか、或いは「昇」の省略形であり、「喜楽貌（喜楽の様子）」と解釈できると言う。

以上のように「[illegible]・[illegible]（𠬝）」（弁）字は、「戀」「變」「勉」「弁」の四つの方向性がある。これについて、馬王堆『五行』裘錫圭[272]注は、

原注：「本篇二三三行解說部份作『不變不說』，磐從般聲，與變音近通假。」「磐」原从「攴」，以下不再說明。郭簡本「磐」作「𠬝（弁）」（簡21。參看《郭簡》釋文注釋一五二頁注〔二六〕）。關於「磐／變／𠬝（弁）」的含義，學者多有討論。陳偉（2003：54—55）指出「弁」、「般」及从它們得聲之字多有喜樂之義，並引《說文・七上・日部》「昇，喜樂貌」，段玉裁注謂《詩・小雅・小弁》「弁彼鸒斯」

269 池田一六二—一六三頁参照。
270 李零八十頁参照。
271 陳偉等釈文四十九頁参照。
272 馬王堆『五行』裘錫圭六十三頁〔三四〕参照。本文中の「原注」や「本編」が指すのは馬王堆『五行』である。

毛傳「弁，樂也」，「弁」即假借爲「昪」、《詩・衛風・考槃》「考槃在澗，碩人之寬」，王先謙《詩三家義集疏》「三家『槃』作『盤』。……《釋詁》：『般，樂也。』毛傳本之、訓『槃』為『樂』」等材料，認爲「簡書中的『弁』可如字讀，或者看作『昪』之省，訓喜樂貌。帛書本中的『𣪘』、『䜌』」（引者按：當作『變』）則是其假借字」。龐樸（2000：46）引上文「仁之思也……溫則悅，悅則戚，戚則親，親則愛，愛則……仁」，李家浩《注釋》注〔七六〕指出，「彼以溫、悅、戚、親、愛、仁爲序，此以弁、悅、戚、親、愛、仁爲序，兩相對照，此處的『弁』無疑相當彼處的『溫』，……訓爲『和善』的『溫』與訓爲『喜樂』的『弁』，意思相同。」今按：陳、李說「𣪘／變／𠂤（弁）」有喜樂義，於文義較長。訓「喜樂」之「弁／昪」，後亦寫作「忭」。

と言う。『毛詩』小雅小旻之什小弁篇に、「弁彼鸒斯、歸飛提提」とあり、『毛伝』は「弁、樂也」と言う。『説文』は「昪、喜樂貌」と言うので、『毛伝』は「弁」は「昪」の仮借であり、「樂」と解釈しているのであろう。以上のことから、陳偉、馬王堆『五行』裘錫圭に従い、「弁」を「樂（たのしむ）」と解釈する。

以上を踏まえ、第二十一号簡「𠂤」について再度検討してみる。原文は、

不弁不兌、不兌不𠂤、不𠂤不新、不新不悉、不悉不𢘅

である。ここでは「弁→悅→戚→親→愛→仁」と「仁」に至るまでの段階を表している。「弁」を「たのしむ」と読むことで、初歩的な感情から高度な「仁」に至るまでの道筋がうまく機能すると解釈でき、全体を整合的に理解できる。「戚」と「親」はどちらも「したしむ」であるが、そのレベルに差がある。「戚」は『毛詩』大雅生民之什行葦篇に「戚戚兄弟」とある。「戚戚」は、毛伝に「戚戚は内親しむなり」、集伝に「戚戚は親しむなり」とある。また「親」は、『孟子』告子下に「無他戚之也。小弁之怨、親親也。親親仁也」とある。また同じく『孟子』尽心上篇に「親親仁也」とある。この「親」は「肉親、特に親と親しむ」ことであり、さらに「親親仁也」と「親」が「仁」と展開しうることを言う。「戚」と「親」には同じ「したしむ」であっても、その「したしむ」感情が誰に向かっているのかでレベルの違いがあるのであろう。従って、訓読は、

弁しまざれば兌（悦）ばず、兌（悦）ばざれば**亳**（戚）しまず、**亳**（戚）しまざれば新（親）しまず、新（親）しまざれば悉（愛）せず、悉（愛）せざれば**息**（仁）ならず。

となる。また解釈は、

弁（たの）しまなければ悦ばない、悦ばなければ戚しまない、戚しまなければ親しまない、親しまなければ愛さない、愛さなければ仁ではない。

（弁（たの）しまなければ悦びを感じることはできず、悦びを感じなければ仲良くすることはできず、仲良くすることができなければ親しむことはできず、親しむことがなければ愛することはできす、愛することができなければ仁を実現することはない。）

となる。

第三十二号簡「[illegible]」について再度検討してみる。原文は、

顔色伝**仪**恩弁也。以亓**宇**心與人交、兌也。**宇**心兌蚤**䢅**於兄弟、**亳**也。**亳**而信之、新。新而簅之、悉也。悉父、**宇**亓　**秡**悉人、**息**也。

である。この「[illegible]（弁）」を「たのしむ」と読むことで、次文「以亓**宇**心與人交、兌也」の「亓」が「たのしむ」を指すこととなり、通じる。ここでも第十七章と同じく、初歩的な感情から高度な「仁」に至るまでの道筋がうまく機能すると理解すれば全体を整合的に理解できる。「溫」は『毛詩』小雅桑扈之什賓之初筵篇に「賓之初筵、溫溫其恭」とあり、鄭箋は「溫溫は柔和なり」と言う。第十七章は第十一章をさらに詳しく説明するものである。従って訓読は、

顔色伝（容）**仪**（貌）の恩（溫）やかなるは、弁しむなり。亓（其）の**宇**（中）心を以て人と交わるは、兌（悦）ぶなり。**宇**（中）

心蚤（焉）れを兌（悅）び、兄弟に**䙴**（遷）すは、**豪**（戚）むなり。**豪**（戚）しみて之れを信にするは、新（親）しむなり。新（親）しみて之れを簅（篤）くするは、悉（愛）なり。父を悉（愛）し、亓（其）の人を悉（愛）するに**秡**（稽）ぶは、**息**（仁）なり。

となる。また、解釈は、

顔色や容貌が温やかであることが、楽しむことである。心の中に楽しむ気持ちをもって人と交際することが、悅びを感ずることである。心の内に抱いた悅びを、兄弟に及ぼすことが、〔兄弟同士が互いに〕仲よくすることである。〔兄弟の〕仲のよさを誠実なものにすることが、親しみである。〔兄弟の〕親密さを重んじ堅実なものにすることが、愛することである。自分の父を愛し、世の人々を愛するに及ぶことが、仁の完成である。

となる。

この節では、「弁」を「たのしむ」と読むことで、『郭店』五行の「弁→兌（悅）→**豪**（戚）→新（親）→悉（愛）→**息**（仁）」に至る過程がより明瞭になるのではないかと考えた。心の中に抱く感情が「弁（たのしむ）」であることが「仁」に至るきっかけであると解釈するほうが全体の理解が説得的になる。

『孟子』告子下及び『孟子』尽心上篇に「親親仁也」とある。『孟子』における「仁」の説明は多々あるが、「親親仁也」は郭店『五行』と同じく感情の発露から「仁」を説明するものである。『孟子』では「親親仁也」と「親と親しむことが仁である」と一段階で仁に至ることができるが、郭店『五行』は「弁→悅→戚→親→愛→仁」と五段階を経て「仁」に至ることがわかる。これは「仁」に至る根幹の説明が『孟子』よりも細分化されていることになる。この点は郭店『五行』のひとつの特徴と言えるだろう。

『論語』では「仁」が最も重要であるとされるが、郭店『五行』ではそうではない。郭店『五行』第一号簡から説明される「仁・義・禮・智・聖」という順番が一つヒントとなる。また、郭店『五行』第四号簡には「悳（德）之行五、和胃（謂）之悳（德）、四行和胃（謂）之善」とある。「五行之和」は「德」となり、「四行之和」は「善」となる。ではこの「四行」とは何を指すのであろうか。郭店『五行』第三十号簡に「見而智（知）之、智也。智（知）而安之、**息**（仁）也。安而行之、義也。行而敬之、豊（禮）也。**息**（仁）義、豊（禮）所

𩞁（由）生也、四行之所和也。和則同、同則善」とあり、「仁・義・禮・智」が「四行」であり、これが調和すれば「善」となるとされる。第五号簡に「善、人道也。悳（德）、天道也」とあるため、「善」よりも「德」の方がより重要とされることがわかる。「德」に至るには「四行」の「仁・義・禮・智」にさらに「聖」を追加した「五行」である必要がある。『論語』や『孟子』では「仁」が最高の德目とされるのとは違い、郭店『五行』の最も重要視されているのは「聖」である。これも郭店『五行』の特徴と言えるだろう。また、「五行」が調和、統一されることで「德」となるが、前述した通り「悳（德）、天道也」と言い、「德」が最高の概念であることは間違いなさそうである。「德」について次の箇所を挙げたい。

第五号簡：君子亡中心之憂則亡中心之智、亡中心之智則亡中心〔之兌〕、亡中心〔之兌則不〕安、不安則不𡚁、不𡚁則亡悳

第八号簡：思不清不察、思不倀不型、不型不安、不安不𡚁、不𡚁亡悳

第二十号簡：不**𦖞**聰不明、不聖不智、不智不**息**、不**息**不安、不安不樂、不樂亡悳

第二十八号簡：五〔行之所和〕也、和則**𦖞**、**𦖞**則又悳、又悳則邦**家 𡚁**

第五十号簡：𢓊道而**𦖞**者、好悳者也

ここから「君子」は「德」を持つものであり、「德」を持つと国が興隆するとされる。また、「德」を得るためには「𡚁」「**𦖞**」が必要であるとされる。この「𡚁」「**𦖞**」は「樂」であり、「たのしむ」ことである。一方、「弁→兌（悦）→**𦖞**（戚）→新（親）→悉（愛）→**息**（仁）」に至る過程にやはり「弁（たのしむ）」が必要とされている。郭店『五行』の作者は「たのしむ」を表す字に微妙な意味の違いを持たせているが、この「たのしむ」という感情を重要視している点が特徴である。

第二節　郭店楚墓竹簡『五行』第二十章の解釈について

郭店『五行』第二十章では、「剛」と「柔」の関係の読み取りが「義」と「仁」の理解につながる。また、郭店『五行』が戦国期の『詩』解釈だとすれば、この部分と関連する『毛詩』商頌長發篇「不競不絿、不剛不柔」の理解に役立つ可能性がある。

「剛」と「柔」は、対になる語である。「剛」が何を指し、「義」が何を指しているかの理解は内容と密接に関係している。もう一度第弐章訳注篇第二十章を確認する。原文は、

不東、不行。不匿、不**𢍰**於道。又大辠而大**戉**之、東也。又少辠而亦之、匿也。又大辠而弗大**戉**也、不行也。又少辠而弗亦也、不**𢍰**於道也。東之為言猷練也、大而晏者也。匿之為言猷匿匿也、少而訪者也。東、義之方也。匿**𢘅**之方也。彊、義之方。矛、**𢘅**之方也。不彊不梂、不彊不矛、此之胃也。

である。訓読は、

東〈柬（簡）〉ばざれば行わず、匿さざれば道を**𢍰**（察）せず。大辠（罪）又（有）りて大いに之れを**戉**（誅）するは、東〈柬（簡）〉ぶなり。少（小）辠（罪）又（有）りて之れを亦（赦）すは、匿すなり。大辠（罪）又（有）りて大いに**戉**（誅）せざるや、行わざるなり。少（小）辠（罪）又（有）りて亦（赦）さざるは、道を察せざるなり。

東〈柬（簡）〉の言為るや、猷（猶）お練のごときなり、大にして晏（罕）なる者なり。匿の言為るや、猷（猶）お匿匿のごときなり、少（小）にして訪〈診（軫）〉き者なり。東〈柬（簡）〉は、義の方なり。匿は、**𢘅**（仁）の方なり。**彊**・彊（剛）は、義の方なり。矛（柔）は、**𢘅**（仁）の方なり。「**彊**・彊（強）ならず梂（絿・急）ならず、**彊**・彊（剛）ならず矛（柔）ならず。」とは、此れの胃（謂）いなり。

となる。解釈は、

〔大罪を〕選び出すことができなければ、実際に行うことはできず、匿してやることができなければ、道を見抜くことはできない。大罪を犯した者には大いにそれを罰するのが、簡（選び出すこと）である。些細な罪を犯した者にはそれを許すのが、匿（かくす）ことである。それゆえ、大罪を犯してもしっかり罰しないならば、真の行いとは言えない。些細な罪を犯した際に許さないならば、道に通じているとは言えない。

「簡」ということばは、選択する、判断するという意味であり、大きいけれども頻繁には起こらない事について〔判断することを〕言う。「匿」ということばは、かくすという意味であり、小さくて頻繁に起こる事件について〔匿すことを〕言う。〔大罪を〕選び出すことは、義を実現するための方法であり、〔小罪を〕匿すということは、仁を実現するための方法である。また、剛は義を実現するための方法であり、柔は仁を実現するための方法である。〔『詩』に〕「無理に勉めず急ぎもせず、剛くもなく柔らかくもない」と言うのは、こういう意味である。

となる。

「剛」と「柔」の関係について劉釗[273]は次の図を提示している。

剛――簡――大而少――義
柔――匿――小而多――仁

この図自体は正しいが、第二十章最後には、『毛詩』「不彊不梂、不弸不矛、此之胃也」を引用する。この詩との整合性を考える次のような図にもなりうる。

273 劉釗八十四頁参照。

剛（＝不柔）　簡――大而少――義
柔（＝不剛）　匿――小而多――仁

『毛詩』の引用を考慮に入れると、詩の順番と劉釗の図は整合的ではない。しかし次のように解釈すると考えると劉釗の図は詩の順番とも整合的になる可能性がある。

「不彊不梂、不弼不矛」は『毛詩』商頌長發篇「不競不絿、不剛不柔」からの引用である。この「不」字については以前より「丕」字と解釈する説がある。林義光は『詩経通解』で「不、發聲詞」と言う。この「發聲詞」とは「丕」のことである。「不競不絿、不剛不柔」は、「丕競丕絿、丕剛丕柔」となり、「能競能絿、能剛能柔」となる。そもそも「丕」字は「不」字の分化字の一つであり、金文の時代からその使用は混乱していた。戦国竹簡においてもこの混乱は存在しており、『清華大学蔵戦国竹簡（三）』周公之琴舞篇では、「不（丕）承不（丕）暴（顯）」と「不」字を用いて「丕」の意を表している箇所がある。このように「不」字を「丕」字として解釈すると、次のような図になる。

剛（丕剛）――簡――大而少――義
柔（丕柔）――匿――小而多――仁

このように読むことで詩の順番と本文の内容の整合性を取ることができ、かつ全体の文意としても問題なくなる。「丕彊丕梂、丕弼丕矛、此之胃也」は、「「丕いに彊し丕いに梂す、丕いに弼し丕いに矛す」とは、此の胃いなり」と訓読され、「「大いに勉み大いに急ぐ、とても剛くとても柔らかい」と言うのは、こういう意味である」と解釈するのが妥当であろう。

第三節　郭店楚墓竹簡『五行』と諸子百家

郭店『五行』には『詩経』と関連すると思われる箇所が多くある。具体的には次の通りである。

『毛詩』召南草蟲篇「未見君子、憂心惙惙」「未見君子、憂心忡忡」
『毛詩』曹風鳲鳩篇「淑人君子、其儀一兮」
『毛詩』邶風燕燕篇「瞻望弗及、泣涕如雨」「差池其羽」
『毛詩』大雅文王之什大明篇「明明在下、赫赫在上」
『毛詩』大雅文王之什文王篇「文王在上、於昭于天」
『毛詩』大雅蕩之什烝民篇「維仲山甫、柔亦不茹、剛亦不吐、不侮矜寡、不畏彊禦」
『毛詩』商頌長發篇「不競不絿、不剛不柔」
『毛詩』大雅文王之什大明篇「上帝臨女、無貳爾心」

『詩』を引用することは儒家的な特徴と言えなくもない。「仁義礼智聖」の五行は儒家の重要な徳目であり、その実現を巡る諸問題を検討する郭店『五行』は龐樸[274]が思孟子学派の著述と考えたように、確かに儒家的な著作ではある。しかし『詩経』からの引用では、『詩経』の原文をそのまま用いているのではなく、『毛詩』によれば「上帝臨女、無貳爾心」とされる大雅文王之什大明篇の「臨」を「賢」に修正したり、『毛詩』によれば「未見君子、憂心惙惙」とされる召南草蟲篇の後半を「憂心不能惙惙」に改変したりしており、郭店『五行』の著述時点においては、漢代のような確立された儒教経典としての『詩経』と言う意識が希薄であること、また戦国期の『詩』に対する意識が比較的自由であったと言う『詩』に対する当時の人々の実際の意識に迫ることができる可能性がある。また、『毛詩』大雅生民之什公劉篇「篤公劉、于胥斯原、既庶既繁、既順迺宣、而無永歎、陟則在巘、復降在原、何以舟之、維玉及瑤、鞞琫容刀」に対する『毛伝』の訓詁「胥、相也」（「胥」は「うかがう」意）、及び『毛詩』小雅小旻之什小弁篇「弁彼鸒斯、歸飛提提」に対する『毛伝』の訓詁「弁、樂也」

274　龐樸「馬王堆帛書解開了思孟五行説古謎」（『文物』、一九七七年、第十期）（未見）

（「弁」を「たのしむ」意とする）などから、『毛伝』の訓詁が漢代的な新しいものではなく、戦国期の訓詁を踏まえている部分がある点も明らかになっている。もちろん改編されているものもある。郭店『五行』は『詩経』の成立を考えるにあたってさまざまな材料を提供している。ただ『詩経』以外の『書経』や『易経』などからの引用が見られず、この点は『孟子』『荀子』等の他の儒家系の諸子の文献とは異なる点も多い。

一方で先述した『荀子』非十二子篇の、

略法先王、而不知其統、猶然而材劇志大、聞見雑博、案往舊造説、謂之**五行**、甚僻違而無類、幽隱而無説、閉約而無解。案飾其辭而祇敬之、曰此真先君子之言也。子思唱之、孟軻和之。世俗之溝猶瞀儒、嚾嚾然不知其所非也、遂受而傳之、以為仲尼子弓為茲厚於後世。是則子思孟軻之罪也。

において、孔子の正統後継者とは見なされず批判される子思や孟軻等の儒家系の諸子からも郭店『五行』への影響はかなり濃厚である。郭店『五行』第九章には「金聖而玉晨之」とあり、これは『孟子』萬章下の「孔子之謂集大成。集大成也者、金聲而玉振之也。金聲也者、始條理也。玉振之也者、終條理也。始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也」からの影響であることは確実であろう。また、郭店『五行』第六章には「仁之思也精、精則察、察則安、安則溫、溫則悅、悅則戚、戚則親、親則愛、愛則玉色、玉色則形、形則仁」とあり「親」と「仁」との関連が主張されているが、『孟子』告子下「無他戚之也。小弁之怨、親親也。親親仁也」の「親」を「仁」に関連づける点とかなり似ており、やはり儒家系の『孟子』からの影響が濃厚であるといえよう。このように、後世儒家の正統とされる『孟子』の影響が濃厚であり、あるいは後世に儒教経典として確立される『詩経』からの引用が多いことなど、郭店『五行』は後世の儒家とされる諸文献との関係が深いことはまちがいない。

次に、第肆章第一節で郭店『五行』においては「聖」と「徳」が特別視されていることを指摘した。特に、「徳」を特別視することについては道家の影響が考えられる。『馬王堆漢墓帛書』には、現在の『老子』とほぼ同一のテキストが発掘されているが、書名については『道経』『徳経』と記されている。後世道家とされる『荘子』や『老子』は漢代中期においても書名が確定していないわけであるが、これら道家と後世言われる学派が「徳」を重要視していたことは確認される。「道」や「徳」は『論語』においては多用されているが、『孟子』ではそうではない。郭店『五行』においては「聖」と「徳」が特別視されていること、特に「徳」が重要視されていることは、道家系の著作の影響

を受けていることもまた確実であろう。

また、本稿第弐章でも述べたが、池田[275]は、第二十三章「目」、第二十四章「喻」第二十五章「辟」を墨家の論理学と関係するとしている。特に「目」については『墨子』小取篇「侔也者、比辭而俱行也」の使用法と同じとしており、また「辟」は同じく『墨子』小取篇「辟（譬）也者、舉也（他）物而以明之也」の「辟」と同じ意としている。墨家の影響とも考えられるが、この点については指摘するのみとし、後日記したいと思う。

また、『論語』や『孟子』では「仁」を最重要視するが、郭店『五行』において「仁」は重要視されるが五つの徳目の一つにすぎず「聖」の方が最重要視されている。ここに郭店『五行』の特徴がある。「聖」については、『論語』や『孟子』にも見えるが、一方『墨子』『荘子』『老子』『韓非子』『管子』などにも見える語である。馬王堆『五行』、郭店『五行』には「見てわかるのが智」であり「聞いてわかるのが聖」と主張している。さらにこれを解説して「君子の道を聞いてそれが天の道であることがわかるのが聖である」と述べる。これは金文から使用法であり、「聖」はある意味では特定の学派ではなく広く普遍的に伝統的価値があるとされてきたものである。その意味で郭店『五行』は普遍的な価値を持つ「聖」を最重要視しており、この点からは特定の学派への所属意識がなかったとも言いうる。

郭店『五行』において、「君子」は生まれつき「徳」（そのものあるいはその可能性）を持つものであり（郭店『五行』第十五章に「五行之所和也、和則樂、樂則有德、有德則邦家舉。文王之見也如此」とある。「文王」は「君子」であり、「君子」は徳を持つこととなる）、その徳を実現するためにはさまざまな実践が必要であるとされる。先天的にあるものだけでなく後天的な努力も必要とされる。これは先天的に持つ良いものを発揮させようとする『孟子』の性善説的な側面と、後天的な努力により良い方向へ行くよう努力する『荀子』の性悪説的な側面を併せ持つといってもよいだろう。

以上のことから、郭店『五行』は戦国期の諸子百家のさまざまな側面を持つ雑家的な思想であると言える。先秦の諸子百家とは後世命名されたものであり、当時の諸子百家がある特定の学派と自覚していたかどうかについてははっきりしない点もあるが、郭店『五行』が後世諸子百家となる様々な要素が含まれていることは確かである。

---

[275] 池田、一七五―一七六頁（1）、一七六―一七七頁（1）、一七七―一七八頁（1）参照。

第五章　結語

第一節　本研究の成果

本研究の成果としては、まず第弐章に位置する最新の漢字研究の成果を踏まえた郭店『五行』の訳注を完成させたことである。また、この郭店『五行』訳注を作成するにあたって、いくつかの漢字について新知見を加えたこと、さらにこれを踏まえて郭店『五行』の解釈について一部修正したことが挙げられる。特に字語関係の検討から、楚系文字の特徴について「[illegible]」（弁）「[illegible]（聳）」（聞）等いくつかの文字について新しい指摘ができたことは大きな成果であったと考えている。加えて、「弁（たのしむ）」が「仁」に至るための最初のきっかけであり、郭店『五行』においては「たのしむ」ことを重視する姿勢が濃厚であること、また他の儒家経典で重要視される「仁」が郭店『五行』においては最重要徳目ではないことを確認できたことなども、郭店『五行』の未解明の特徴を見つけたこととなり、成果として挙げられると考える。また郭店『五行』において『詩経』の引用が多いが、この点について『詩経』の原文をそのまま用いているのではなく、一部変更したり、説明的であったりするところから、郭店『五行』の著述時点においては、漢代のような確立された儒教経典としての『詩経』と言う意識が希薄であることや当時の『詩』の実像について迫ることができたと考える。

以上が本研究の成果である。

第二節　本研究の課題

本研究の課題は多くある。

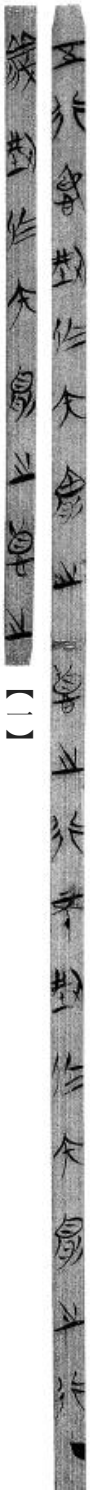
特に、『荀子』非十二子篇で言われる「五行」と郭店『五行』の関係について言及することができなかった。加えて、郭店『五行』が戦国期のどの学派の影響を最も大きく受けているかについては一定程度指摘することができたが、郭店『五行』が、『荀子』の批判する「五行」であるのであれば、『荀子』は郭店『五行』の何を批判しているかについてもう少し具体的に指摘したかった。

郭店『五行』の内容については「五行」である「仁・義・禮・智・聖」について、その本文の記述をグループ分けし、細分化してそれぞれの関係についても突っ込んで考えるべきであった。さらに、いくつかの漢字について待考とした点も時間の制約はあったが心残りである。

以上を本研究の今後の課題とする。

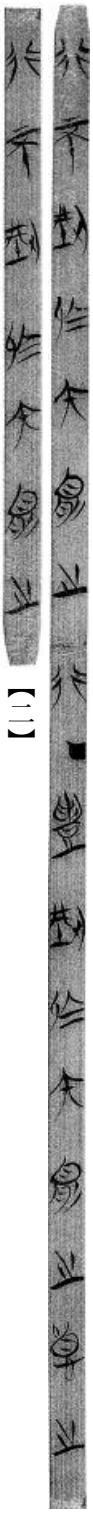
【資料篇】

『郭店楚墓竹簡』五行篇の竹簡の図版と本論文第弐章訳注篇で確定した漢字について対応させて提示する。図版は、武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戰國簡冊合集（一）郭店楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一一年）を使用した。



【一】

五行**息**（仁）型（形）於內胃（謂）之悳（德）之行不型（形）於內胃（謂）之行。
義型（形）於內胃（謂）之悳（德）之

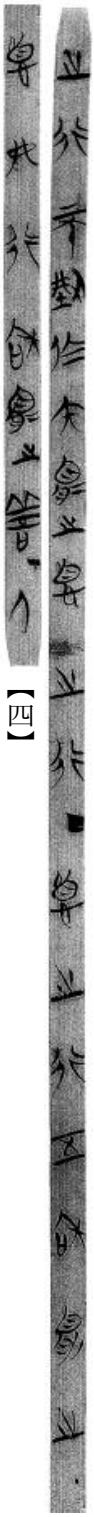


【二】

行不型（形）於內胃（謂）之行。豊（禮）型（形）於內胃（謂）之悳（德）之
行不型（形）於內胃（謂）之

【三】

〔行智型（形）〕於內胃（謂）之悳（德）之行不型（形）於內胃（謂）之行。
聖型（形）於內胃（謂）之悳（德）

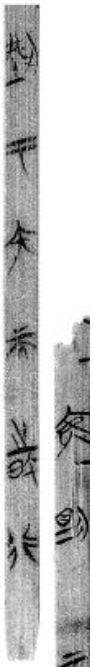


【四】

之行不型（形）於內胃（謂）之悳（德）之行。悳（德）之行五和胃（謂）之悳（德）四行和胃（謂）之善善人

【五】

道也悳（德）天道也。君子亡宇（中）心之憂則亡（無）宇（中）心之智亡宇（中）心之智則亡宇（中）心



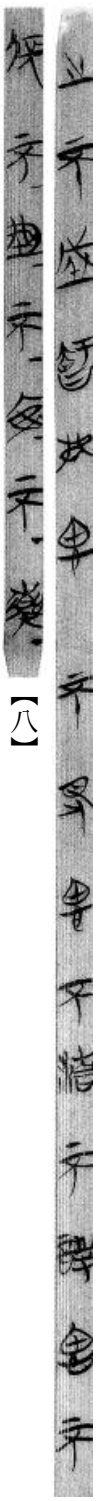
【六】

〔之兌（悅）〕亡（無）宇（中）心〔之兌（悅）則不〕安不安則不𡢁（樂）不𡢁（樂）則亡（無）悳（德）。五行皆型（形）于內而時行

之胃（謂）之君〔子〕士又（有）忠（志）於君子道胃（謂）之志士

善弗為亡（無）近悳（德）弗

【七】



之（志）不城（成）智弗思不得思不清（精）不**誖**（察）思不

倀（長）不型（形）不型（形）不安不安不**㠯**（樂）不**㠯**（樂）

【八】

亡（無）悳（德）。不**息**（仁）思不能清（精）不智、思不能倀（長）不**息**（仁）

不智未見君子憂心

【九】

【十】

不〈丕〉能惙惙既見君子心不〈必〉能兌（悅）亦既見**定**（止）亦既詢（觀）**定**（止）我心**𢘅**（則）

【十一】

〔兌（悅）〕此之胃（謂）〔也丕〕**息**（仁）思不能清不聖思不能**翌**（輕）不**息**（仁）不聖

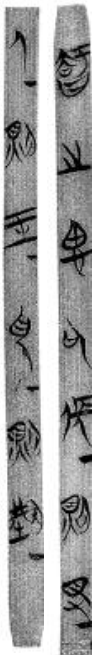
【十二】

未見君子憂心不〈丕〉能**忞**（怵・忡）**忞**（怵・忡）既見君子心不〈必〉能降。**息**（仁）之思也清清

則察察則安安則恩（溫）恩（溫）則兌（悅）兌（悅）則熹（戚）熹（戚）則新（親）新（親）則悉（愛）悉（愛）

則玉色玉色則型（形）型（形）則息（仁）。

【十三】



智之思也倀（長）倀（長）則得、得則不亡（忘）不亡（忘）則明明則見臤（賢）

人見臤（賢）人則玉色玉色則型（形）型（形）

【十四】

則智。聖之思也翌（輕）翌（輕）則型（形）型（形）則不亡（忘）不亡（忘）則聝（聰）聝（聰）則聳（聞）君

子道聳（聞）君子道則玉音玉音則型（形）型（形）

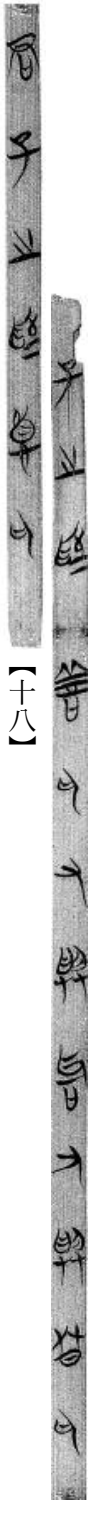
【十五】

【十六】

則聖。雯（淑）人君子亓（其）義（儀）𩁹（一）也能為𩁹（一）肰（然）句（後）能為君子𢘅（慎）亓（其）𧊒（蜀・獨）也。

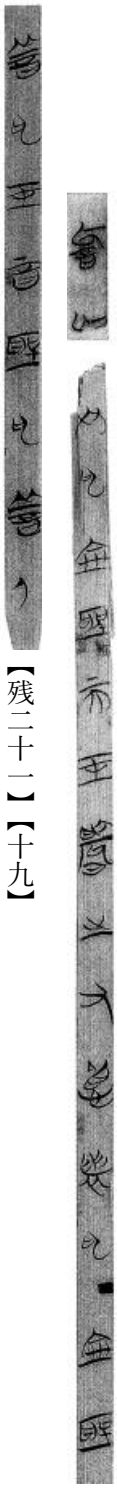
【十七】

〔瞻望弗𢓊（及）〕深（泣）涕女（如）雨能𨘋（遲・差）沱（池）亓（其）羿（羽）肰（然）句（後）能至哀君子𢘅（慎）亓（其）



【十八】

〔蜀（獨）也君〕子之為善也又（有）與𠙵（始）又（有）與冬（終）也君子之為悳（德）也



【殘二十一】【十九】

〔又（有）與〕訂（始）亡〔與〕終也金聖（聲）而玉晨（振）之又（有）悳（德）者也。金聖（聲）善也玉音聖也善人

【二十】

道也悳（德）而〔天〕〔道也。唯〕又（有）悳（德）者肰（然）句（後）能金聖（聲）而玉晨（振）之不**脫**（聰）不明不聖不

【二十一】

智不智不**息**（仁）不**息**（仁）不安不安不樂不樂亡悳（德）。不弁不兌（悅）不兌（悅）不**㝵**（戚）不**㝵**（戚）不新（親）不新（親）不悉（愛）不悉（愛）不**息**（仁）。不悳（直）不**遙**（肆）不**遙**（肆）不果不果

【二十二】

不柬（簡）不柬（簡）不行不行不義。不**賡**（遠）不敬不敬不嚴不嚴不**隮**（尊）不**隮**（尊）不共（恭）不共（恭）亡豊（禮）。未尚（嘗）

【二十三】

聳（聞）君子道胃（謂）之不（聰）**聰**未尚（嘗）視（見）臤（賢）人胃（謂）之不明

聳（聞）君子道而不智（知）

【二十四】

亓（其）君子道也胃（謂）之不聖。視（見）臤（賢）人而不智（知）亓（其）

又（有）悳（德）也、胃（謂）之不智。

【二十五】

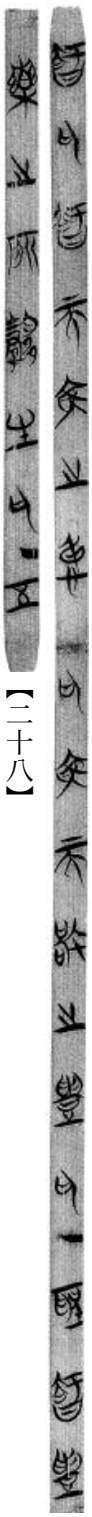
見而智（知）之智也。聳（聞）而智（知）之聖也。明明智也。虩（赫）虩（赫）聖也。明明才（在）下虩（赫）虩（赫）

【二十六】

才（在）上此之胃（謂）也。聳（聞）君子道、聰（聰）也聳（聞）而智（知）之聖也。聖人智（知）而〈天〉

【二十七】

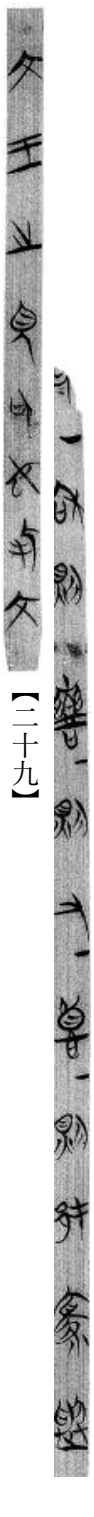
道也智（知）而行之義也行之而時悳（德）也。見臤（賢）人明也見而智（知）之



【二十八】

智也智（知）而安之𢘅（仁）也安而敬之豊（禮）也。聖智（知）豊（禮）

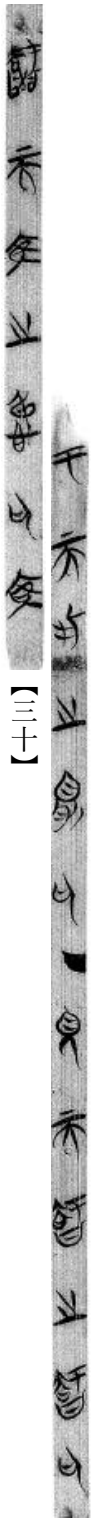
𤔲（樂）之所𩰫（𩰫・由）生也。五



【二十九】

〔行之所和〕也和則𤔲（樂）𤔲（樂）則又（有）悳（德）又（有）悳（德）則邦𡨦（家）𢍰（舉）

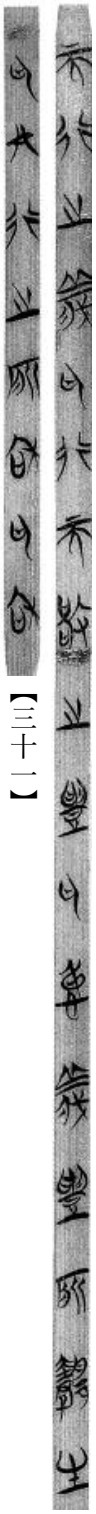
文王之見也女（如）此文



【三十】

〔王才（在）上於昭〕于而〈天〉此之胃（謂）也。見而智（知）之智也

智（知）而安之𢘅（仁）也安



【三十一】

而行之義也行而敬之豐（禮）也**㤅**（仁）義豐（禮）所**𩠐**（**𩠐**・由）生也四行之所和也和

【三十二】

則同同則善。顏色伀（容）**仪**（貌）恩（溫）弁也以亓（其）**宇**（中）心與人交兌（悅）也**宇**（中）心兌（悅）**蚤**（播）**𨾊**（**𨾊**・遷）

【三十三】

於兄弟**𧶠**（戚）也**𧶠**（戚）而信之新（親）〔也〕新（親）而**筲**（篤）之悉（愛）也悉（愛）父**宇**亓（其）**𥨊**（稽）悉（愛）人**㤅**（仁）也。**宇**（中）心

【三十四】

詨（辨）肰（然）而正行之植（直）也悳（德）而述（遂）之遙（肆）也遙（肆）而不畏彊（強）語（禦）果也。不

【三十五】

以少（小）道𡨦（害）大道柬（簡）也。又（有）大辠（罪）而大𢿱（誅）之行也。貴貴亓（其）**𨑓**（等）**𨸏**（尊）臤（賢）義也。

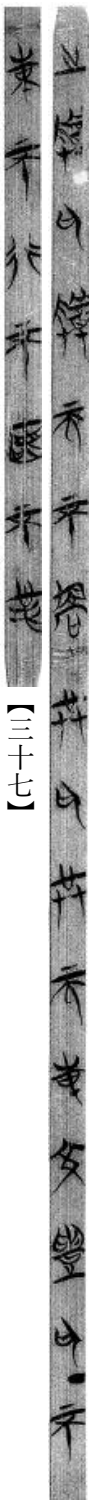
【三十六】

【三十六背】

以亓（其）外心與人交遠也遠而**𦬊**（莊）之敬也。敬而不

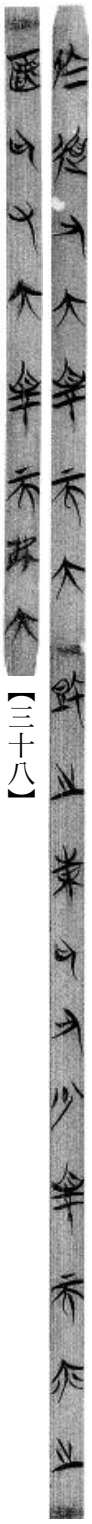
𢡟（懈）嚴也嚴而畏

𢡟（懈）



【三十七】

之**障**（尊）也**障**（尊）而不喬（驕）共（恭）也共（恭）而專（博）交豊（禮）也。不東〈柬（簡）〉不行不匿、不**奚**（察）

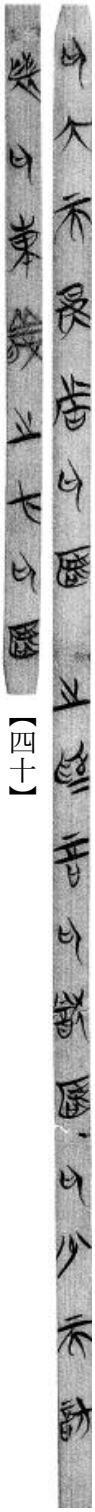


【三十八】

於道又（有）大辠（罪）而大**豉**（誅）之東〈柬（簡）〉也又（有）少（小）辠（罪）而亦（赦）之匿也又（有）大辠（罪）而弗大

【三十九】

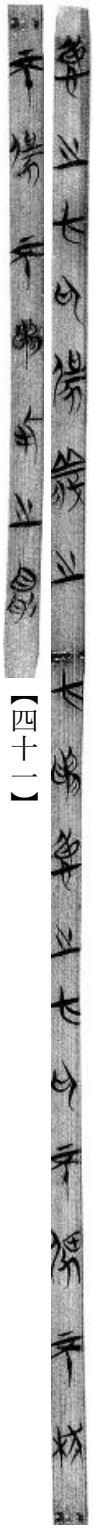
豉（誅）也不行也。又（有）少（小）辠（罪）而弗亦（赦）也不**奚**（察）於道也。東〈柬（簡）〉之為言猷（猶）練



【四十】

也大而晏（罕）者也匿之為言猷（猶）匿匿也少（小）而訪〈診（軫）〉

者也東〈柬（簡）〉義之方也匿



【四十一】

息（仁）之方也**强**・**强**（剛）義之方矛（柔）**息**（仁）之方也不**强**・**强**（強）不**㝵**（絿）

不**强**・**强**（剛）不矛（柔）此之胃（謂）

【四十二】

也。君子集大城（成）能進之為君子弗能進也

各**定**（止）於亓（其）里大而

【四十三】

晏（罕）者能又（有）取安（焉）少（小）而軫者能又（有）取安（焉）疋盧盧達者（諸）君子道胃（謂）之臤（賢）君

【四十四】

子智（知）而與（舉）之胃（謂）之**隮**（尊）臤（賢）智（知）而事之胃（謂）之**隮**（尊）臤（賢）者也後士之**隮**（尊）臤（賢）者也。

【四十五】

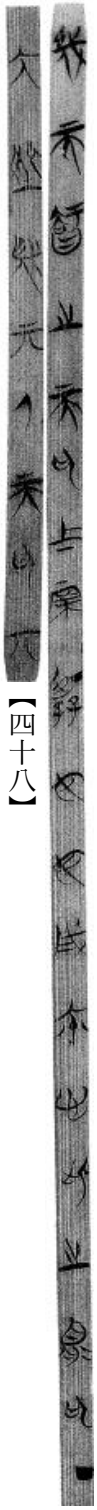
耳（官・目）鼻口手足六者心之**返**（役）也心曰唯莫敢不唯如（諾）莫敢不如（諾）

【四十六】

進莫敢不進後莫敢不後宋（深）莫敢不宋（深）澨（淺）莫敢不澨（淺）和則同同則善。

【四十七】

目而智（知）之胃（謂）之進之窬〈喻〉而智（知）之胃（謂）之進之辟（譬）而智（知）之胃（謂）之進之

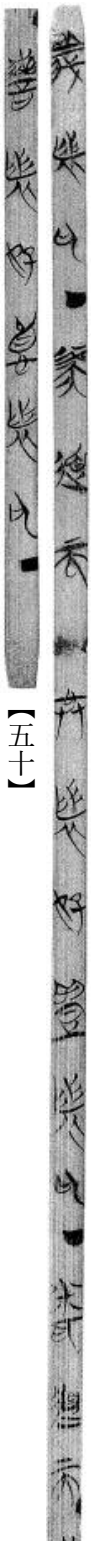


【四十八】

幾而智（知）之天也上帝𢍰（賢）女（汝）毋戌（貳）尒（尔）心此之胃（謂）也。大埅（施）者（諸）亓（其）人天也亓（其）

【四十九】

人**陞**（施）者（諸）人**儘**也。聳（聞）道而兌（悅）者好**息**（仁）者也。聳（聞）道而畏者好



【五十】

義者也。聳（聞）道而共（恭）者好豊（禮）者也。聳（聞）道而

嚮（樂）者好悳（德）者也。

【参考文献】

荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社・一九九八年）

池田知久『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年）

李零『郭店楚簡校讀記（増訂本）』（北京大學出版社、二〇〇二年）

劉釗『郭店楚簡校釋』（福建人民出版社、二〇〇五年）

武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戰國簡册合集（一）郭店楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一一年）

池田知久『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』（汲古書院、一九九三年）

裘錫圭主編・湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心編『長沙馬王堆漢墓簡帛集成　肆』（中華書局、二〇一四年）

黄德寛 等『古漢字発展論』（中華書局、二〇一四年）

藪敏裕 監訳『古漢字発展論』（発行：樹立社、発売：ゆまに書房、二〇二三年）

禤健聡『戦国楚系簡帛用字習慣研究』（科学出版社、二〇一七年）

白於藍『簡帛古書通仮字大系』（福建人民出版社、二〇一七年）

馬承源主編『上海博物館藏　戰國楚竹書』（一）～（五）（上海古籍出版社、二〇〇一年十一月～二〇〇五年十二月）

清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(一)』（中西書局、二〇一〇年十二月）

清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(二)』（中西書局、二〇一一年十二月）

清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(三)』（中西書局、二〇一二年十二月）

清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(四)』（中西書局、二〇一三年十二月）

清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(五)』（中西書局、二〇一五年四月）

清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(六)』(中西書局、二〇一六年四月)
清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(七)』(中西書局、二〇一七年四月)
清華大学出土文献研究與保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(八)』(中西書局、二〇一八年十一月)

西信康　『郭店楚簡『五行』と伝世文献』(北海道大学出版、二〇一四年)
齋木哲郎『馬王堆出土文献訳注叢書　五行・九主・明君・徳聖　老子甲本巻後古佚書』(東方書店、二〇〇七年)

赤塚忠　『詩経研究』(赤塚忠著作集第五巻、研文社、一九八六年)
石川忠久『新釋漢文大系一一〇　詩經　上』(明治書院、一九九七年)
白川静　『詩経國風』(平凡社・東洋文庫、一九九〇年)
白川静　『詩経雅頌』1・2(平凡社・東洋文庫、一九九八年)
白川静　『詩経』I(白川静著作集巻九、平凡社、二〇〇〇年)
目加田誠『詩経』訳注篇(丁字屋書店、一九四九年)
藪敏裕　『『毛詩』の文獻學的研究―出土文獻との比較を中心に―』(汲古書院、二〇二〇年)

于省吾　『甲骨文字詁林』(中華書局、一九九六年)
郭錫良　『漢字古音手册(増訂本)』(商務印書館、二〇一四年)
季旭昇　『説文新證』(芸文出版社、二〇一四年)
裘錫圭　『文字学概要(修訂本)』(商務印書館、二〇一三年)
許愼　『説文解字』(中華書局、一九六三年)
宗福邦等『故訓匯纂』(商務印書館、二〇〇三年)
段玉裁　『説文解字注』(上海古籍出版社、一九八一年)
李学勤　『字源』(天津古籍出版社、二〇一三年)

加藤常賢『漢字の起原』（角川書店、一九七〇年）
季旭昇　『『上海博物館戰國楚竹書（四）』讀本』（萬卷樓、二〇〇七年）
李学勤主編、沈建華、賈連翔編『清華大学蔵戰國竹簡(壹―叁)文字編』（中西書局　二〇一四年）
李学勤主編、沈建華、賈連翔編『清華大學藏戰國竹簡（肆-陸）文字編』（中西書局　二〇一八年）

裘錫圭著、稲畑耕一郎・崎川隆・萩野友範訳『中国漢字学講義』（東方書店、二〇二二年）
陳偉著、湯浅邦弘監訳、草野友子・曹方向訳『竹簡学入門―楚簡冊を中心として』（東方書店、二〇一六年）
宮本徹・大西克也『アジアと漢字文化』（放送大学教育振興会、二〇一一年）
小島毅『儒教の歴史』（山川出版社、二〇一七年）
内山俊彦『荀子―古代思想家の肖像―』（評論社、一九七六年）
渡邊卓『古代中國思想の研究』（創文社、一九七三年）
漢字文献情報処理研究会編『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』（好文出版社、二〇二一年）

影山輝國「思孟五行説―その多様なる解釈と龐樸説―」（東京大学教養学部『人文科学科紀要』、一九八五年）
近藤浩之、西信康「〈学界時評〉先秦～秦漢代」（『中国研究集刊』、二〇一三年）
古屋昭弘「出土文獻と上古中國語の音韻について」（『中國文學研究』、二〇〇三年）
李家浩「釋「弁」」（『古文字研究』第一輯、一九七九年）
朱德熙「釋**亯**」（『朱德熙古文字論集』中華書局、一九九五）

【謝辞】

本論文の執筆に至るまで様々な方々のご指導、ご支援をいただきました。

藪敏裕先生には、清華簡や安徽簡を読む演習を通して出土文献を如何に読むかについて教えていただきました。また、本論文執筆に際しては厚いご指導をいただきました。出土文献資料を精読することはとても難しく最先端の研究ではありますが、その経験を疑似的にでもさせていただき、改めて漢文学の面白さを実感いたしました。藪先生がいなければ、この分野について学ぶこともなく、大学院の進学や留学についても考えることがなかったと思います。学部生以来公私七年にわたってお世話になりました。心より感謝申し上げます。

岡田浩行先生には、藪先生退官後、異分野にも関わらず指導教官を引き受けてくださりました。また、講義では原文精読の大切さや根拠の提示の仕方など、どの研究においても普遍的に通じる核を教えていただきました。心より感謝申し上げます。

中村安宏先生は修士論文に関する先行研究について発表する時間をとっていただきました。早い段階から修士論文に向き合うきっかけをくださりました。鋤田智彦先生は漢字についての考え方を広げる示唆をたくさんいただきました。見守っていただき励ましの言葉をいただきました。お二人の先生方には最終審査も担当していただきました。心より感謝申し上げます。

中国・山東大学の劉海宇先生には、研究の助言や文献資料の読み方、工具書の扱い方について教えていただきました。また最先端の漢字研究についてご教示いただきました。平泉研究センター長・理工学部教授の平原英俊先生には、中国の方々との貴重な出会いの機会や励ましの言葉をいただきました。お二人の先生にも感謝申し上げます。

最後に支えてくださった諸先生方、昨年度修了されました同じ研究室の諏訪佑成さん、舟山野々花さん、庞博文さん、そして家族、友人に改めて感謝申し上げ、謝辞といたします。